

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十五年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇三六号



日川協加盟

No.1036

同人特集 続・夫婦百景

九月号

第19回 川柳塔まつり

と き 平成25年10月12日(土)

午前11時開場・午後1時開会

ところ ホテル・アウリーナ大阪 4階 金剛の間(中・西)

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 電話 06-6772-1441
(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車)

《 同 人 総 会 ・ 議 事 》 午前10時より

平成24年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

平成25年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《 各賞表彰式・記念句会 》

表彰式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「津軽発おもしろ景色スペシャル」 川柳塔社 高瀬霜石氏

兼題 「広い」 島根石橋芳山選

「ささやく」 青森松山芳生選

「テンポ」 和歌山木本朱夏選

「机」 大阪太田昭選

「忘れる」 大阪河内月子選

事前投句 「樹」(9月2日必着) 川柳塔社 主幹 小島蘭幸選

◎各題2句・勝手ながら欠席投句は拝辞させていただきます

出句締切 正午(午後4時半終了予定) ※各題の「天位」に賞呈

◎会費 2,000円(当日頂きます) ※記念品 呈

ご昼食は各自でお済ませください

《 懇 親 宴 》

と き 平成25年10月12日(土) 午後5時～7時

ところ ホテルアウリーナ大阪 3階 葛城の間

☆会費 7,000円(会席料理) 先着申込み120名様

☆宿泊 ホテル・アウリーナ大阪 8,000円(朝食付き)

* 事前投句および懇親宴・宿泊のお申込はチラシに刷りこみのハガキ(ご希望の方は事務所)にて9月2日(月)までに本社事務所宛、お送りください。

* 懇親宴・宿泊のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主 催 川 柳 塔 社

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号201
〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490
振替 00980-4-298479

柳都65周年全国川柳大会

小島 蘭 幸

大野風柳の「川柳ひとり語り」は、川柳初心の頃、師系との出会い、柳都創刊、岸本水府、川上三太郎、白石朝太郎とのエピソード、柳友との絆を淡淡と語られました。その中で「今、新津駅を通過中……」という手紙をいただいた麻生路郎先生とのエピソードも語られました。私は、その話を聞きながら、路郎先生の命日の7月7日に柳都65周年全国川柳大会のこの席にいることの喜びを、ひしひしと感ずることが出来ました。大会は全国各地から出席者二二〇名の盛会でした。

オープニングで先ず出席者を驚嘆させたのが、書家・菅井松雲氏の「書のパフォーマンズ」です。バケツの墨汁をたっぷり吸った大筆で一氣に書き上げた武者小路実篤の「道の詩」、続いて「守・破・離」の三文字、その圧倒的な迫力に会場は静まりかえっていました。「守・破・離」の言葉の重さと書、川柳の深さをしみじみと感ずることの出来た一瞬でした。

席題は、「書のパフォーマンズの印象吟」でした。選者は徳永政二氏と私、共選ではなく二人の選者にそれぞれ出句とのことでしたが、どちらも佳句が多く、政二選の披露を聞いていて改めて印象吟の凄さを思いました。

宿題選者は大家風太、やすみりえ、梅崎流青、雫石隆子、吉田成一の五氏。私は披露を聞きながら65周年という節目の大会に敢えて若い選者を推薦された風柳主幹の川柳愛を思い、「川柳は凄い」と呟っていました。

第39回白石朝太郎賞、第10回大野風柳賞を受賞された皆様、おめでとーございます。

黒い雪降ってる誰も気づかない 菅原孝之助
さくら咲かない水のほとりにも ひとり 静

私は選句をしていて立ち会う事が出来ませんでした。それでも大西泰世氏のメッセージ「川柳のありました」は、少しでも聞ける事が出来ました。前夜祭、大会、祝賀パーティーと、お世話をされた柳都川柳社の皆様に厚く御礼を申し上げます。本当に「川柳は凄い」です。

後日、尾道文学室の麻生路郎特別展に足を運び、路郎先生の遺影に柳都65周年全国大会の報告をしました。

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

欲すこし土を信じて生きている

遠山唯教

川柳塔 九月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「ドック・淡路岩屋」

■巻頭言 柳都65周年全国川柳大会

小島 蘭 幸 …… (1)

中八について

都倉 求 芽 …… (2)

川柳塔 (同人吟)

小島 蘭 幸 選 …… (4)

川柳塔の川柳讃歌

木津 川 計 …… (45)

西尾 栗句抄

麻 生 路 郎 …… (46)

新川柳鑑賞

麻 生 路 郎 …… (47)

自選集

麻 生 路 郎 …… (48)

温故知新

麻 生 路 郎 …… (51)

水煙抄

川上大輪選 …… (52)

英語 de Senryu

吉村侑久代 …… (73)

俳風柳多留一二篇研究

吉村侑久代 …… (74)

●同人特集 続・夫婦百景

小 栗 清 吾 …… (76)

江戸を楽しむ

小 栗 清 吾 …… (79)

愛染帖

新家完司選 …… (80)

中八について

都倉 求 芽

句会でよく指を折りながら作句しておられるのを見かけます。勿論字数を整えるためですが、それなら川柳は日常会話の感覚で、とも言われます。すると日常お話するのにイチイチ指を折って喋る人はまずいない筈です。

例えば、テンランカイ、オンガツカイなど正確に発音しながら話すことはおそろくないと思います。また語尾に「ウ」がつく、「よう」「こう」「ろう」なども半分は口の中で切れていると思います。これらイ音使、ウ音便、撥音便、促音便を一字音ずつ喋るとすると、まことにギコチないリズムになってしまいます。句を読み下す時、やはりリズムの悪い句は舌にうまくのりません。これら各音便は実際は半分に縮めてリズムよくなります。

諸先輩や先生方の句にも中八はかなり見受けられます。また有名な句の中には

檸檬抄「しつかり」……………竹治ちかし・大内朝子共選…(84)

「呆然」……………村上玄也選…(87)

一路集「引きずる」……………山本玲子選…(88)

「ジョーク」……………小川注湖選…(89)

初歩教室「明るい」……………太田昭…(90)

川柳塔鑑賞……………川本 畔…(92)

水煙抄鑑賞……………坂上淳司…(94)

せんりゅう飛行船³³……………新家完司…(95)

津軽発おもしろ景色¹⁷……………高瀬霜石…(96)

追悼 志田千代さんを偲ぶ……………黒田能子・鴨谷瑠美子・久保田千代…(97)

八月本社句会……………青砥たかこ…(102)

句会燦燦……………各地柳壇(佳句地十選／福土慕情・黒田能子)…(103)

ジュニア川柳……………九月各地句会案内…(117)

柳界展望……………柳界展望……………朱夏・勝弘…(122)

■編集後記(ひとこと／真島久美子)……………

座右の句

再びのない風景を生きている

(公弘)

私の句

いい風に出会い残り火燃え上がる 吉田 陽子

殊さら中八にして、句の内容を重厚なものに感じさせるように工夫してあるものがあります。

指を折っておられる方も最初、自然に出来た句が中八だったので苦心されているのでは、とも思います。

私は大家のように「中八による名句」とはいきませんが、自然になったのは仕方ないと思います。

ついであるが折角のこの機会に、もう一つ気になることを申し上げます。

最近あちこちの句会で「自由吟」なる題を設定しておられるのを多く見受けます。以前は「雑詠」とか「雑吟」とか言われていました。「雑」の語を嫌ってのことだと思いますが、「雑」にも「お雑煮」「雑家」「雑炊」など結構いい分野に入るものもあります。

それが「自由吟」となると、ヘソ曲里的に考えると自由に詠むなら、中八だろうが二十音字だろうが三行書きだろうが、みんな「自由」でなことになるまいか。私は「雑詠」という方が好きです。年寄りのくりごととお笑ください。



小島蘭幸選

大阪府 川端 一步

メイドインジャパンが好きで米の飯
秋たのし家族が一人増えそうだ

コーヒーは薄目饅頭は控え目

さよならをしてから二人振りかえり

八月ははだしのゲンを読むと決め

侵略を聖戦という歴史観

檀原市 居谷 真理子

幸運の女神は意地悪な老婆

切れそうな糸に吊り下げられている

菜を刻み魚を捌いた手で祈る

人間が先か神様が先か

目は伏せぬ鏡に何が映ろうと

人間の道だ飛行機雲が行く

鳥取県 斉尾 くにこ

わたくしが暮らしています無人駅

気遣いを気付かれぬよう気を遣う

言いすぎぬようにいいえと言えるよに

気の強い口の歯形を残される

カーテンを開けたら窓に鍵がある

カラクリは知れどその手に乗ってみる

大阪府 谷口 義

クロワッサンこの世は捨てたものでない

戒名が気に入らぬとは言うてこず

悪妻かどうかはわたくしが決める

七月にいつも壊れる冷蔵庫

暇潰しと思えば何の事はない

首の骨きこきこお気楽にどうぞ

西宮市 足立 茂

洗濯機に入れてしまった当たりクジ

初恋の人から届く招待状

熱燭とビールで中和する温度

冗談が分からね人が聞く落語

大器晩成と言われ続けて今日お通夜

妻と揉め今日は臨時の休肝日

堺市 栗原道夫

灯台の明日をみんなで見つめよう
改札で氏神様と待ち合わせ
シャボン玉飛ばし合つて座談会
黒板に自由自在に咲かす花
空き瓶の方が空き缶よりあわれ
石垣にもたれています旅半ば

弘前市 高瀬霜石

決断をする一秒の長きこと
黒幕はたくさん駒を持っている
特別なことはなんにもない手相
ジョーカーを持つと性格悪くなる
ワンパターン貫きとおす朝ごはん
柩まで持つていくもの多過ぎる

和歌山市 牛尾緑良

再生紙も一度嘘がつけそうだ
友が居て夏には夏の愛唱歌
絵手紙が秋を押し売りして困る
節電へ残る命を推し量る
容赦ない日差しを避ける古稀以来
汗だけを信じた父の母の刻

松江市 石橋芳山

かみ合わせ話曲がつてばかりいる
図らずも増殖してるプリン体
標高を重ねて空っぽの頭

少年はふらふら多感症の青
笑い袋すり切れ老いた人になる
笑われた所に水が流れ込む

倉吉市 牧野芳光

結論のさせぬ話をこねている
食つて寝ることに理屈は要らぬはず
団子虫も蟻も真面目に生きています
油蟬折る形で脱皮する
懲りもせず平均点をとっている
感嘆符残し夕日が沈んでいく

大阪市 田浦實

円空さん木から仏をひよいと生む
風に乗る河内音頭が窓たたく
免許更新テストパスして若返る
許したら肩凝りすつととれました
陰で褒めるとすすく育つ子もいます
ツイッターする舌まで止められぬ

松江市 松本文子

リング畑でリングの唄は歌わない
夕日墜ちる海は心を洗うところ
大ざっぱな人も幻見えた筈
ふんわり生き恐れるものは何もない
楽しかったデコボコ人生だったけど
真夜中の落雷私の怒りかも

三田市 久保田 千代

滝つぼの水は決してにがらない

どうしても良い物から先ずは捨ててみる
早いのが取り得不出来は我慢する

落梅に風の強さを知った朝

追風が吹かねば行かぬ天邪鬼

無人駅長いホームを一人占め

和歌山市 木本 朱夏

戴いた縁のひとつを大切に

お好み焼にワイン小洒落れたおばあさま

西瓜囲む家族ゲームの始まりに

茶断ちして祈るいのちのひと雫

近づけばあなたを妬むことになる

遠きひとへ七夕の笹揺れやまず

河内長野市 山岡 富美子

ハルカスをオアシスにする都市砂漠

スクラムを組むと自然に発芽する

いきなりのパンチ梅雨明けから猛暑

ただ歩くだけで真夏の罰ゲーム

髪を梳くおんなが乾かないように

熱中症になっているのはテレビです

三田市 田中 章子

メールから電話に変えて一時間

雨上がる恋になるには早すぎて
境界線雲は気ままに越えてくる

来年も蛍のツアー二つ三つ

くつろいでベーターベンは聞けません

だまし絵にだまされてみる猛暑の日

堺市 大久保 のん子

日も月も独り淋しくないですか

亡き母の古い手紙がよく喋る

追伸の熱い情けに絆される

天に星くよくよ生きるのは止そう

ダイエット美容のためではありません

四捨五入長所ばかりを手に掲う

青森県 松山 芳生

籬のない暮らしに待っている孤独

落伍者が転ってくるダンボール

起承転結一行詩にも春が来た

安らかに眠る墓地にも鸚舞う

都会の真ん中で村と言う頑固

困頓の村であしたを語り合う

藤井寺市 鈴木 いさお

カッコ良さよりも泥臭さが似合う

手書き主義変換ミスが怖いから

献血の列に並んだ古希の意気

辞書二冊読み比べてる秋夜長

主治医へは基と川柳を教える

蚊帳吊つて家族一緒に寝た昭和

篠山市 酒井 真由

美辞麗句たぶん冗談なのだろう
言い訳をせずにいい汗かくことだ
来し方のはるか彼方の土けむり
いい汗を拭く切株に腰かけて
オカリナが聞こえる黒豆の館
聴いてください森に捧げる挽歌です

鳥取市 岸 本 宏 章

腹時計よりも確かな郵便屋
富士山が水をたつぷり溜めている
先生のお師匠さんはすごい人
熱中症防ぐ薬は水だった
群衆を宥める役もあるボリス
浮雲もアベノミクスも風まかせ

藤井寺市 太 田 扶美代

ザザ降りも気にせずラッキョ漬けている
ホタルの墓何度観ただら泣いただら
久し振りが替えが欲しい雨に遇う
主婦として恥かしくないちらし寿司
お笑いのつぼ心得ている朝陽
腕組む事嫌う夫といて楽し

大洲市 中 居 善 信

何思ったか教育勅語などコピー
手を振っている人がいた向こう岸
裏方に支えられてる木偶である

また何時か会いたいですねぽつり言う
誕生日サラダに愛が盛つてある
妻の留守カップヌードルでも食うか

美作市 大石 あすなろ

クールビズ男の首が軽くなる
素朴さにふれてほぐれた肩のこり
頼られているなと思う自画自讃
雑念としばらく空中浮遊する
言い訳を重ねて霧を深くする
明日を問う返信はまだ陽が沈む

西宮市 秋 元 て る

ネットよしあつさり国を越えて来る
ばあちゃんも英語を使う国になり
お互いに終りを探る長電話
洗濯物越しの景色が性に合う
思いやるが遠慮は要らぬ三姉妹
ふと聞いた言葉が生き方まで決めた

米子市 吉 田 陽 子

明け暮れを軒の雀に癒される
ひまわりに叱咤激励もらう夏
散歩道心澄んだら帰ります
くずれそうな気持ち支えている無口
遺伝子検査知らぬ幸せだつてある
味が出るまでゆつくり朽ちてゆくとする

鳥取県 西谷悦子

風と来てここで開くと決めた花
納得の運と言えぬが生きている
金運より健康運が一番だ
耳打ちがそのうち笑い声になり
名馬には無理良馬にはなれるかも
仏壇へいつでもこころ開け話す

米子市 竹村紀の治

遭されたレシビで作るふたり分
寂しさを埋める一献腑に沁みる
ほどほどにしてネと届く缶ビール
ゴーヤーを貰うとチャンプルーが続く
掛け捨てにしたいね介護保険料
漏れたのか漏らしてるのか汚染水

香芝市 大内朝子

被災地の旅復興はまだ遠い
眼裏の亡母の笑顔の道標
年金の暮しの透けるゴミ袋
性善説ちよつと寄り道した内緒
踏み出せば紫陽花色の風に会う
銭湯の富士も遺産の貌になる

吹田市 山本希久子

波のページ栞一枚はさむ旅
メールとび交い駅の伝言板消える
旅が続いて帰巣本能疼く

八月の手だな昭和握りしめ
静電気苦手な人と握手する
真つすぐ見よう一票を持つ私

東かがわ市 川崎ひかり

子宝に恵まれ紡ぐ余生かな
全開は心許した証拠です
募金箱善意を試す位置にある
タイミング逃しジョーカー手に残る
図書館に睡魔が住んでいるらしい
本音書くために残している余白

和歌山市 柏原夕胡

宮仕え家では妻に仕えてる
人並みに夏バテをする歳になる
叶うならほんとの孫の手が欲しい
今を生き抜いて後悔などしない
共白髪にはほど遠く白髪染め
実家となつて思い知る母の愛

海南省 堂上泰女

棚田にも早苗日本はまだ元気
同じ轍踏んだ自分が情けない
母子無事の知らせに潤み出す返事
千の風になる迄たとある仕事
日曜のデパ地下主夫ら楽しそう
男の子誕生祝す菖蒲の濃紫

鳥取県 細田裕花

自己主張しすぎた口をうがいする

クリームを塗りなめらかにする会話

飲み干して乾いた音のアルミ缶

マスコミが叩くと表から消える

干涸びたおたまじやくしの誤算みる

しなやかな猫になりたしストレッチ

富田林市 中井アキ

ライバルに大きな元氣貰うたよ

カラオケがまだ付き合える声が出る

記憶の底のラブが時々疼き出す

ためらい傷残して愛が遠ざかる

その昔私も赤い渦だった

そして炎はやがてやがての西の空

奈良市 岩本浩二

五・七・五楽しく余生過す糧

行楽の帰りのバスは皆静か

常識に添えば苦も無く楽も無く

遺産分け内気な妻が尻たたく

未練たらたら焼け棒つ杭を吹いている

手の焼ける亭主単身赴任する

芦屋市 竹山千賀子

おみやげは孫の笑顔が最高だ

麻酔覚め新たな自分作り出す

手のひらの母の一字に励まされ

無礼講付けが後からちゃんとする

配る物ないけど笑顔だけはある

一休みせよと仏が背を撫でる

吹田市 太田昭

爪隠す鷹に到底敵わない

遺言状書いて余生の指を折る

床屋から出て真夏日の陽を浴びる

八月忌許せぬ人を思い出す

補聴器で妻の告白聞いてやる

蹴躓いた運命線を振り返る

堺市 村上玄也

深夜ラジオ不眠の僕の子守唄

聞き耳を立てて聞こえぬ老いの耳

切った胃が時々謀反起こしだす

治癒しないうちに老化に追い越され

クラブ捨て断ち切るゴルフへの未練

老いてからは名刺に代えて迷子札

富田林市 片岡智恵子

天蓋に鐘の音ひびく死者生者

パズルの破片合えばそれぞれ動き出す

少子化に長寿の肩身狭くなる

病室がやさしい嘘で満たされる

ゴールまでの道はゆがんでいてもよい

コンパクトの中へしまつて置く秘密

札幌市 小沢 淳

音量は僕は上げるし妻下げる

青森だ甲府だ句会観光に

三十度超すとふぬけの北育ち

マニフェスト選挙戦にも死語となる

川柳を止めると惚ける止められぬ

札幌市 三浦 強一

妻だから鼻毛出ると言ってくれ

遺伝子を組み替えたよな子が育ち

消去法そして何にも残らない

逝く順は不同のんびり生きている

本名と雅号戒名ややこしい

黒石市 相馬 一花

遊びから悟りを開く糞真面目

団塊のハートの底を神ぞ知る

ロックファンも目の色変えるお富さん

混浴でおとなしくなる手長猿

遺伝子はいいから親を観察す

平川市 小寺 花峯

人間を訂正してるのがヒト科

チャンネルを孫と争そう日が続く

遠回りしてから帰る万歩計

熱燗の夜がゆつくり通過する

希望という花を大事に持ち歩く

弘前市 稲見 則彦

サクラサク九月入学使用不可

渡し賃まだ足りないと来るメール

主には無断で巣立つ軒雀

結論を先に言う癖直せない

お揃いの紫陽花柄で庭花火

弘前市 岡本 花匠

はぜ米をスーパードで見た懐かしさ

かつぱえびせん気心読まれ掌が伸びる

そのうちが忘れて悔やむ座禅草

合唱のスズムシ列車客の笑み

ネプタ終え初秋の風に励む業

弘前市 今 愁女

東北に世界に誇る土偶の美

世界遺産われもわれもと山開き

飛行機雲めおとが空のはてまでも

梅雨寒に即席ラーメン役立てり

長らえて今年は兄の五十回忌

弘前市 須郷 井蛙

カラオケの声を磨いてクラス会

フライパンそのまま皿のかわりする

息抜きも出来ぬ携帯つきまとう

身に毒と知ってはいるが煙草の輪

二刀流今日はケーキと話し合う

弘前市 高橋 洋子

立ち話隣の犬にスパイされ
見て忘れ聞いて忘れてバスツアー
血圧が跳ね上りますかき氷
踏ん切りがついて明日へネジを巻く
弔電の以下同文はただけぬ

弘前市 福士 慕情

成虫へ蟬の子いそぐことは無い
故郷で暮らしたことの無いサケ科
どうしても片減りになる僕の靴
窓際でおとこの影が薄くなる
生かされて平均寿命まで僅か

さいたま市 星野 育子

三叉路の道祖神にも四季の花
言い訳は日を改めて聞きましょう
戦争を知らない世代の九条
プライドはないが行けぬ立ち食いソバ
まだ美文字を目指します写経をする

東京都 まえで とよこ

地図を手に迷子になった梅雨の街
シニア料金千円の旅三千里
ころんだらあかんあかと靴が鳴る
富士登山みんなのころひとつかも
ピルのかあなたに富士山仰ぐありがたさ

横浜市 小野 句多留

原発の討論雲の下で聞く
比較する癖が老化を加速させ
忘れ物また引き返す御同輩
危ないよスマホに夢中熟女サマ
県境仲裁役に富士が立つ(静岡・山梨)

横浜市 菊地 政勝

モノクロの話しが弾む同期会
夜話しのクローラーが背に効き過ぎる
終活の話題も楽し趣味の会
七十の自慢のひとつ富士登山
晴天に世界遺産を見て過し

富山市 島 ひかる

教科書をゆずり譲られ使った日
人間に似た玉ねぎの出来不出来
どの子にも同じに分ける老いた父
つば広の帽子に忍び寄る晩夏
サンショの葉叩いて旨いしじみ汁

可児市 板山 まみ子

湿原が広すぎ姿見えぬ鶴
丹頂のつがい別れはならしい
鉦路川カヌーで下る別世界
出されれば何時も完食戦中派
富士山はビッグになつて行きにくい

犬山市 金子美千代

京都市 高島啓子

たつぷりと笑った今日は二重丸

バカ言える友達がいるありがたさ

誕生日きても当分元の齢

25キロ母の命の灯がゆれる

人間の鼻を時々折る自然

犬山市 関本かつ子

タマネギのお蔭か血液いらしい

目を皿に国産品を選ぶ食

竹割った性格嫌う人もいる

良し悪し心臓だけが丈夫過ぎ

トマトにもこんなにあつた料理法

犬山市 吉田幸子

よく見えた目もお疲れになりました

植え替えて精取り戻すハイビスカス

たまにはと目先を変えたメニュー売れ

恥ずかしいが目立ちたがり屋が隅に居る

犬山の美人鵜匠もアイドルよ

愛知県 早川遯行

思い出を毀したくないから会わぬ

憎らしい体重計が置いてある

男はもうとうの昔に捨てました

富士山を世界遺産にして稼ぐ

言い勝った後は味気のないビール

詩人どうしは鳥語で喋る

思い出し笑いを隠している日傘

運だなと諦めてから負けが込む

まだまだデフレ百均のパン屋さん

いつまでも胸底を這う山椒魚

京都市 坪井孝一

素晴らしい青空誰が文句言う

父さんの愛の賛歌は無理がある

パンの耳彷彿う道を問うてみる

ライバルが怖い顔して下戸だった

肉ジャガに女の個性染みている

京都市 藤井文代

温度差も友の魅力と読む空気

あるがまま生きたばかりに滅ぼす身

今日の酒の肴になった過去の傷

楽しい日ばかりでなくも空くお腹

蛇行したお陰で出せる別の顔

京都市 榎本宏子

父の日も子供の好きなハンバーグ

迷った末菌はビールでやつつける

週刊誌ほどの雑学処世術

清純派で通すおんなのスキヤンダル

結婚した息子と位置がずれた椅子

京都市 三宅満子

いつかするつもり母への恩返し
深夜便が暑い暑いと眠らせぬ
気がかりなケーキ半分食べて寝る
就活にノーマネクタイもウエルカム
座禅組み雑念ばかり湧いてくる

亀岡市 井上森生

足腰の激痛未曾有の理を問う
激痛の天罰まるで知らなんだ
生と死の課題は苦も楽もみな含む
人生観変えろと迫る痛み攻め
激痛の体験生かす道探る

長岡京市 山田葉子

雑巾を絞る力は残しとく
刻んだ記憶思い出すたびあたたかい
疑うと愛は出口のない迷路
半分こすると一息つけそうだ
落ちてゆくものは落してゆく後期

八幡市 今井万紗子

やさしすぎる男にちよつとだしの素
同窓会ちよばちよばに生き笑い合う
窓枠に今日も元氣と貼っておく
恋のキズ癒す窓辺を予約する
化粧瓶秘めごとたと溜めてます

大阪市 阿野壽美子

簡単に捨てずに着てる古い服
人生もまあまあかなと振り返り
真似してもなかなか出ない母の味
ドア開けてお帰りの声疲れとび
助け船すぐに出したい親心

大阪市 池上清治

料理好きの妻の両手を拝んでる
勉強嫌いで漫画上手の孫が好き
ラジオ体操ベッドで手足伸ばすだけ
聞いてくれる気がして参る家の神
繁昌亭天神様が肩を貸し

大阪市 井丸昌紀

弱いところ見せない人で友はなし
謎を解くヒント余りに多すぎて
五合目でそつと油断が忍び寄る
ずる休みしたもの身の置き所
照れる事なくなりやがて惚けてゆく

大阪市 岩崎公誠

入れ子型にことば出し入れ正誤表
棟梁の一途かんの刃が光る
軽々に自己建て直すなど言わぬ
騒がれた愛も萎んで過去になり
平凡で正しいことがむつかしい

大阪市 江島谷 勝 弘

警察に一度も世話にまだならず
オスプレイ墓で作つて釘を打つ
古稀なのに仕事の夢をまだ見てる
さあ古稀だ見たいしたいは今のうち
冷静になれば燥いでいる私

大阪市 榎 本 日の出

スニーカーお蔭で少し走れます
簡単にオペにしますと印を押す
子孝行親孝行も求め合う
問題は饅頭かケーキ迷つてる
ストレスのあるお蔭です惚けてない

大阪市 榎 本 舞 夢

主人よりお先に逝くと言つてある
これからは二人で一人暮し向き
サークルもあつておしゃべり癒される
御祭や餅搗ぎたのしボランテニア
ハルカスも建つてたのしく集う街

大阪市 大 川 桃 花

便利さに馴れて手先が鈍り出す
メイドインジャパン捜すの難しい
雑音を消すためつけているテレビ
これはもう災害ですと言う猛暑
プライドがまだ許さない押し車

大阪市 奥 村 五 月

愛し合い八十路すぎれば底い合う
川柳に五本の指がありがたい
力抜く蟻など見えぬあの組織
最近は栖山行きも金がいる
神よりもボックリ寺に母通う

大阪市 笠 嶋 恵 美

入院の面会だけでああしんど
決断が妻の役目でどんと来る
入院にただただ感謝してやまぬ
はつとするとんちんかんがトゲになる
青空は心を洗う洗濯機

大阪市 神 夏 磯 典 子

夏過ぎて命の重み確かめる
出ぬ答え少し道草してみよう
美容院噂の辞書が積んである
十六夜が心の闇を照らし出す
糠に釘そんな私を好きと言う

大阪市 熊 代 菜 月

生き方を自分流にしてケセラセラ
手の平で掴めるだけの愛で良い
餌一つ分け合う心軒ツバメ
夏休み無いかの蟻の列つづく
目がさめて今日の元気に拍手する

大阪市 古今堂 蕉子

怒りっぱい私の中に老いを見る

感謝感謝仏に近くなるわたし

聞く機会増えてきましたレクイエム

程の良い友とゆつくり午後のお茶

つかず離れず小川の向こう岸あなた

大阪市 小谷 集一

ハッピーエンドを信じて生きている

善人と言われる人の隙だらけ

聞き役に回ってからの無責任

輝いて逢いたい人が一人いる

本音書くとき鉛筆がよく折れる

大阪市 坂 裕之

本心は言わず笑ってやり過ごす

おとといの事がどうにも出てこない

五十年前の話を今日もする

好き嫌いみんなあるので面白い

どうしても好きになれない人も居る

大阪市 佐藤 忠昭

憶れて何度も読んだ若菜集

高砂や長持唄でご入場

大漁節さんさ時雨の祝い唄

ラブラブと言って秘事公開し

妻に耐え子供に耐えて喜寿迎え

大阪市 津村 志華子

経本の解せぬままに朝の行

雑念を払う真白き沙羅双樹

蝉しぐれ羅漢に聴かすジャズソング

残高と余命がどうも釣り合わぬ

清貧に自由の時はあり余る

大阪市 津守 なぎさ

猛暑とか検診予約キャンセルに

独り身の渴きを癒すポランティア

後期高齢外出控えテレビ漬け

暑中見舞い一番乗りの先越され

打ち水へ誰も通らず陽が上がる

大阪市 寺井 弘子

すこしずつ押し付けがましオスプレイ

誘惑にのつたコーヒー苦くする

照れながら花束とどく父の日に

点滴のしずく命に立ち向かう

絵画展値札に吐息釘付けに

大阪市 原田 すみ子

ついでだとやった仕事が開けたドア

溢れても一筆箋も埋まらない

もういいかい待ちこがれてた蝉が鳴く

大人顔思慮と分別足りぬまま

モナリザの謎の微笑を妻もする

大阪市 板東倫子

久しぶり株屋も保険屋もやって来る
四季狂う花見も梅雨も風情なし
警官や教師が離職する不思議
聞く耳をお持ち下さいい仏さま
散歩する犬猫案じる熱中症

大阪市 平嶋美智子

母さん詐欺自分の親に手は出さぬ
病院の梯子で疲れじわつと来
此処だけで会える友居る整形科
一日をテレビに御守りしてもらい
特に記す事もなくいい日です

大阪市 伏見雅明

最後まで世渡り上手にならぬまま
子の背負う荷物は軽いほうがよい
湯煙を透かせばみんな美女に見え
コンピニの味がいつしか母の味
押しボタン横断歩道ひとり占め

大阪市 升成好

雑草の種は場所など選ばない
残塁の数なら負けておりません
万策の尽きた頃みて来るチャンス
夫婦の絵二十四色では足りず
派手を着て老いの残滓ふつとばす

大阪市 松尾柳右子

退院日鯛を食べてる昼御飯
入院の淋しさつのる午後八時
病院の点滴みつめ祈る秋
新聞に知恵貰つてる昼下り
娘の電話暑さ知らずのひと時だ

大阪市 山崎君子

花のないベランダ淋し日曜日
デイサービス歌って踊るたのしきよ
フラダンス青赤のレイ美しく
僕は僕オモチャの小犬ひとり言
親子かな三羽のガラス電線に

大阪市 山本加お里

お蔭様母の口ぐせひとり言
病室の窓から虹のプレゼント
自分史を書いてだんだん蘇る
あるがまま遠回りしてきた私
オモチャより新聞破り自慢顔

大阪市 吉内タカ子

梅雨明けや布団干しましよ洗濯も
寂しいな青田に蛙鳴きもせず
未来の子声だか笑う下校道
憲法の改正選挙ボケ防止
肺移植ただただ祈る成功を

堺市奥 時雄

ハンドルを握り戦う姿勢とる
凹ましてからは洗車をしていない
盃を伏せて密議の顔が寄る
風呂だけにスポーツクラブ通いつめ
嫁が来て息子の自慢しなくなり

堺市荻野像山

帰りどう私お連れがありますの
酔いぎめの水ほど美味い味はない
御馳走も漬物なしは物足りぬ
夕べのお返し塩気のないお粥
あつさりと逝かれもたつく台所

堺市柿花和夫

あの世まで持つて逝きたし喋りたし
延命は拒否するつもりです今は
夏物バーゲン原価を知らんから買える
嘘つきが正直者を裁いてる
猛暑日は地下街を行く万歩計

堺市加島由一

古稀さなかさて婚活か終活か
交番の前で十円玉拾う
また恋をしているんですお月様
私の三本の矢は母妻娘
金釘流盆に帰って来いと母

堺市源田 八千代

子等つどい長寿を祝う夏休み
この夏を乗り切るやろか息乱れ
もうあかん言うて呑んでる吸うている
天国の薫風師匠お出迎え（志田千代さんを偲ぶ 2句）
川柳も書も多才なる人惜しむ

堺市齋藤 さくら

婆ちゃんともうトランプの出来る孫
朝御飯ビフテキ食べて痩せはった
また選挙選ぶ政党見当たらぬ
妻が先旅立つことを考えぬ
誰も居ぬ所で思い切り弱音

堺市澤井敏治

目から鱗そのとき神の声を聴く
主語述語なしの会話で済む二人
ピンポンと風が囁く昼寝中
無人駅無人交番丸ボスト
いつからかフラッペというカキ氷

堺市遠山唯教

さあ夏だテニスの効果身が軽い
駅までの距離が遠くになってきた
実力が無くてイメージ描けない
負け戦で家族の絆つよくなり
太陽が彩る湯船ひとり占め

堺市 内藤 憲彦

青い星セミもカエルも残したい
お出かけの鏡の前でダンスショー
誰とでも等距離に居る苦勞人
かぶりつく水瓜が似合う日焼け顔
朝顔を雨のち晴れがよく伸ばす

堺市 西村 りつえ

甘く見て登った苦勞富士は知り
今日もまたとんちんかんの共白髪
凄んだが河内弁では乗りおくれ
子の歳を時時間かれ迷ってる
個性消え似た味並ぶ果物屋

堺市 矢倉 五月

まだ目差す物あつたでしよ通夜の席
サヨナラの極み術なく棺送る
出来ぬ事出来ぬと腹を決め昼寝
心にも投棄くれる良き主治医
大事やりとげ涼やかな顔がある

池田市 栗田 久子

長生きは素敵未来は弾んでる
やさしさに氣付いた靴の揃え方
身内にも身内としての氣の配り
虹の色白を足してもいいかしら
匂を先取り早くもセリという秋刀魚

和泉市 横山 捷也

左遷地にもきつと美味しい酒がある
熱燗も冷酒も同じアテで呑む
寂しいとは漏らさぬつもり猫と居る
同じ道歩んだ亡父の歳を越え
愚痴が出るばち腰を上げようか

泉佐野市 山本 蛙城

潤う目の鯉職見よ少子国
末席で鼻の高さを見比べる
慰安婦を知っているから黙ってる
カード入れ診察券で破れそう
新党の匂い老骨馴染めない

茨木市 島田 誠一

曖昧な笑みに答える顔が無い
失言の舌をかばっている右脳
愛犬が真ん中にいる夫婦仲
立ち位置がやつと見えだす崖つぶち
悪知恵が六法の隙泳がせる

茨木市 藤井 正雄

意気投合くにの訛で飲める店
自分史に書けないボカの二つ三つ
子の無理を聞いてた頃が懐かしい
達筆で説得力のある葉書
じんわりと言わず怒鳴ってほしい罰

大阪狭山市 矢野 梓

便利さがいよいよ地球怒らせる
コーヒーの味で体調よく分かり
血圧を計り直してほつとする
今日もまた何も起らぬこと祈り
つかあとかめ夫婦の聞き違い

河内長野市 植村 喜代

本人が来てるのに証明出せと言う
平等だと言う夫婦は離婚しない
富士山は昇るより眺める山かもね
坊ちゃん議員どつちの味方なさるやら
あれ見たいこれも買いたい体力はない

河内長野市 梶原 弘光

伸び代に望みプランは白寿まで
水百選の近くに友が居て和む
ときどきは罪滅ぼしの皿洗い
自己中さん他人の歌を聞いてない
三千円以内と決めているサブリ

河内長野市 木見谷 孝代

決断を鈍らせている背負うもの
本心を隠し伺いたてている
やり過ぎてあとでじんわり膝にくる
染まらない芯が摩擦の種になる
損得がからんだ嘘が重くなる

河内長野市 坂上 淳司

決断はいつも女房がしてくれる
ゴーサイン係り居る筈渡り鳥
断つ決断なかなか出来ぬ酒タバコ
青春切符喜寿と米寿がご愛用
肥後守に刃物の使い方学ぶ

河内長野市 谷 久美子

握った手あげ優しさ取り戻す
言い過ぎて夫の無言が突き刺さる
五合目を過ぎて増え出す物忘れ
携帯の電源切つて三次会
不揃いの顔に出ている人間味

河内長野市 松岡 篤

相手見て鳴き方変える家のポチ
黙祷の間も漏れる話し声
芸術だバツタのようなあのお辞儀
薄味は妻の愛情だと思ふ
爺ちゃんの嫁になるのが夢だとか

河内長野市 村上 直樹

ひもじさを語り不戦の子を育て
芋半分お粥育ちの粘り腰
i P S 近づいてきた不老不死
這ってでも卒寿までには富士登山
時空超え千年杉の動かさる

河内長野市 山室光弘

妻が逝き背中丸いぞ影法師

主夫妻板についたと見る遺影

バックシヤン白いうなじにほつれ髪

決断の出来ぬ男は昼の月

あれこれとないものねだり短冊に

岸和田市 岩佐ダン吉

ああ地球ヒト科を消してなるものか

井戸掘った人がいたこと忘れない

覚悟あるかいつも私に問うている

不屈二字彬教えてくれている

雑踏を泳ぐ一点外さない

岸和田市 堤 檀代

三食をきれいに食べて今日も過ぎ

お出かけを案じてくれる人がいる

知らぬ間に出来ない事が多くなり

紫陽花も私と同じ旬が過ぎ

クーラーを入れてゐるのに扇子もち

岸和田市 森元ふみよ

八十路過ぎ張切りすぎてダウンです

写真では世紀の美人もセピア色

爺ちゃんは今日も元気で一二三

遺産無し親族誰も寄りつかず

婆ちゃんと言われて怒る独り者

岸和田市 雪本珠子

夕映えに孤独な影が迷いだす

踏んばって悲しみに耐え生きてゆく

作句中言葉の森に迷い込む

考え込んだ結果小石に蹴躓く

エアメール異国の香り乗せて来る

四條畷市 吉岡修

袂をぬいだら死角なにもない

胸の灯に息吹きかけるのも自分

その日まで眠らせておこ古証文

国際化ご自慢ですか大相撲

余ってるのはファイトだけ膝痛む

吹田市 大谷篤子

悴こえて生命線が伸びている

自分の悴知って端役に徹してる

包み込む父の大地に帰り着く

赤ちゃんが笑ってくれた帰り道

突然の涙に過去がいとおしい

吹田市 木下敏子

肩の荷をおろしてからの笑い皺

雨降っていいよやる気出た河童

アベノミクスまだ解らない台所

梅雨晴れ間元気を出せと市場籠

賞味期限過ぎて優しい老いの味

吹田市 藏田光子
森林浴大氣にひたり背を伸ばす
氏神の楠の森氣を貰う

朝の祈り家族の無事を一番に
久しぶり会話がはずむ電話口
愚痴話氣晴らしかなと聞いておく

吹田市 須磨活恵

古里の海をぎゅつと抱きしめる
おおらかな心で生きよと波の音
ゆつたりと波の演奏聞く渚
思いやり余計なことは口にせず
板塀の落書クジラが泳いでる

吹田市 瀬戸まさよ

安全はスロースローと言ひ聞かせ
カッコよく老舗の弁当五〇〇円
水晶の出番真夏のネックレス
共稼ぎ男も家事に疲れます
ヤングのつもり家で短パンTシャツよ

吹田市 野下之男

慎ましく今日も麗し富士の山
戦前を忘れさせない流行歌
王将を歌えば何故か元氣でる
公園で一人雀に見守られ
父の日は花と大トロ和みます

高石市 浅野房子

乾杯の音頭取るのはいい男
コーラスを聞いて心の塵払う
梅雨明けを待っていたのは猛暑なり
食欲はないが食べたら食べられる
蟬しぐれ今年も無事に夏がきた

高槻市 井上照子

共稼ぎ夫婦の仲をつなぐ孫
向学の青年時給の皿洗い
不信心ワイン美味くて吹っ飛んだ
思案して宅配弁当週五日
偶然よと言ひわけをする巡り会ひ

高槻市 指宿千枝子

考えるを止めにしてから案になり
しとしとと命育む雨が降る
雨の日は雨の装いたのしまん
蝶になり隣の庭を散歩する
初蟬に七月八日梅雨終る

高槻市 片山かずお

生き様を背で語っているオトコ
諍いの根っこ小さな行き違い
ひと言で仲間の輪から弾かれる
お詫びする前に言ひ訳でしまふ
背くのが想像出来ぬ子の寝顔

高槻市 佐 甲 昭 二

高槻市 杉 本 義 昭

隣家との絆を保つ低い塀
心地よく歯科医の椅子に座りたい
スビーチのヒントを探す新刊書
がやがやと言われ会長させられる
理想とは叶わぬものでいいらしい

高槻市 左右田 泰 雄

プールより波風のある海が好き
年重ね心も背なも丸くなる
何故かしら心に響くハプニング
なるようになれと流れに身を任す
苦手でも文句が言えぬ宮仕え

高槻市 島 田 千 鶴 子

やめましよう愛想笑いはすぐばれる
ボールペン言葉の森がお気に入り
ナツメロの中で私が笑ってる
にわか雨長い思案にけりつける
校庭の蟬賑やかに夏休み

高槻市 初 代 正 彦

いたずらを許す親御をつい睨む
下駄箱の隅に昭和の赤い靴
微力でも地産地消と旗を振る
順風に慣れた男の走り方
深井戸に西瓜冷やした遠い夏

摺り足の静かさに酔う能舞台
口説くのが下手で出鼻を挫かれる
貧乏だった幸せだった昭和
青空と水ささやかな望みです
隕石よおまえもいじめられたのね

高槻市 富 田 美 義

神は死を望んで居ない見てるだけ
粒よりの中で私が目立たない
正義売る男は何処へ行ったやら
大粒のなみだ多くを語らない
お互いに気付かぬ振りでまた明日

高槻市 富 田 保 子

富士仰ぎ空気ふくらむ伊豆の旅
虫の音に歩調合せて散歩なり
古希という駅を出てから出合う友
急がぬと決めた老後に秋を聞く
クイズ解く調べて知った女偏

高槻市 峯 村 勲 弘

句作りで海馬鍛える梅雨半ば
筆順を違えたままで七十年
同病で話題尽きない二人部屋
トラにだけ良く飛ぶボール投げてくれ
看護師の慣れた摺り足夜勤明け

高槻市 安田 忠子

にっこりと許して肩の荷をおろす
どう許したのか言葉選っている
たいていは女性がリード老夫婦
母さんもスマホに嵌つてみたい
寝る時間もつたないと九十歳

豊中市 池田 純子

電動の新车ぐんぐん坂登る
梅雨のうつ回して遊ぶアンブレラ
ウエストも服に合わせてアッパッパ
跳ね回るボールの如き孫を追う
ハイハイの怪獣が来る床磨き

豊中市 江見 見清

本箱に残るひとかけらの若さ
かみあわぬままに仲良く三世代
この辺でひと息ついたらしい文
活断層うごめくらしい街に住む
ティーカップになぜお独りなのと訊かれ

豊中市 松尾 美智代

夜が明ける悲しみうすれてる不思議
諦めとまだやれるとがせめぎ合う
きつちりとしすぎてるから疎まれる
本心は心の襞にしまつて
小さな旅サプリントにして元氣

豊中市 松村 里江

運を天に見上げる男ののど仏
もつれ糸ほどく根気は誰ゆずり
作り置き急なお客の酒のあて
張り合つてもあかんと鏡にべもない
貸した本押し花しおり連れ返る

豊中市 水野 黒兎

途中下車ローカル線にない予定
岬からああ空の青海の碧
打ち水で路地に涼呼ぶエコの夏
不揃いに調和見つける竜安寺
願い事笹に吊してビール飲む

豊中市 藤井 則彦

来年はまたもこつそり飛ばぬ球
飾り立てぬ言葉は人を飽きさせぬ
選ばれたはずの夫は消去法
情報で海でスマホが耐えている
自分だけは似合うと思うクールビズ

富田林市 中崎 深雪

震える手だが575かいてみる
夾竹桃暑い中でも元氣節
弱り目に祟り目やさしさが染みる
訃報きても今となつては驚かぬ
朝顔の青の深さに足止まる

富田林市 山野寿之

寝屋川市 山本三郎

隠さねばならぬ美人の大欠伸

一粒の飯を大事にする躰

底の底舐めてどっこいよいとまけ

白髪に似合う帽子を娘が選ぶ

追い風を知らずに過信走りだす

寝屋川市 富山ルイ子

津波に耐えた東北に炎暑また

ポナスが中小企業には出ていない

アベノミクス恩恵のない高齢者

原発の稼働は会社優先か

私の部屋うっかり越える三〇度

寝屋川市 平松かすみ

山の水吸うた野菜はほんまもん

何よりのお野菜血液の味方

心身が疲れて明日が恐くなり

白旗は身体が悲鳴あげたから

幸せの答え旨い物が旨い

寝屋川市 森茜

ビードロはこなごな七色に絶叫

導かれるように一冊読み通す

生きやすいように口角あげてます

真夏日もほのかに春蘭香る闇

逢わせたいふたりに駅の花時計

似顔絵に似てると言われ怒り出す

師を真似て段々上手になって行き

警戒をしても新手で来る詐欺師

温情にどん底暮し這い上がる

連休に元氣いっぱい子の笑顔

羽曳野市 安芸田泰子

いい人の振りで自分を可愛がる

すぐ其所のポストが遠い炎天下

遠雷に出掛ける足が後戻り

丁寧言葉で仕掛けられた罠

満腹になれば許せるほどの怒り

羽曳野市 宇都宮ちづる

朝刊のバイクの音を聞く不眠

断捨離に決断力を鍛えられ

日焼け止めタツプリ塗って墓参り

プライドが邪魔で損する詰め放題

桂離宮拝観料は身分証

羽曳野市 徳山みつこ

夏やせ禁止よ友の文あたたかい

スズムシ成長涼しさおすそ分け

嫁さんが来るのよ掃除機がうなる

節電メニュー鯖缶レタストマト添え

愚痴るのやめた時を大切に

羽曳野市 永田章司

招待御祝儀代で高く付き

過疎の村今でも水車息吹いてる

公約に伏せられている鷹の爪

脱原発風車生み出すエネルギー

国境の落し所の難かしさ

羽曳野市 三好專平

慰安婦自殺者救災援助感涙法可決

参議院無用無駄捨象法可決

貨物運搬軍用機東京配備法可決

沖縄県米国編入優遇法可決

川柳国民皆詠諷刺推進法可決

羽曳野市 吉村久仁雄

生き方を円空仏に笑われる

経験が明日の墓穴を掘っている

肌合いが違つて友の縁切れず

地球儀が落ちてガラガラ核の音

穏やかな日々欠かせぬサスペンス

東大阪市 笠井欣子

一日を無事に生きたとお線香

相合傘傘一本の幸福度

嬉しい事つづきつかれがたまります

酒びんを供えて今日のうつ晴らす

三回忌終えて出て来たラブレター

東大阪市 北村賢子

なぜ急に騒がしいのか知らぬ富士

楽しい筈の趣味でストレス作つてる

一回は逆らつてみる鬼を飼う

ちゃん付けで呼ぶ友が居て癒やされる

片隅に残り火抱いて同期会

東大阪市 佐々木満作

七回忌供花手向けて蟬時雨

覚悟してかかれば運も味方する

仕掛花火天空に舞うサプライズ

天寿までもう一花を咲かせたい

胸張つて有終の美を飾りたい

枚方市 安達忠央

後ろには釈迦の慈悲の目日々感じ

アイデアの塊試作品だらけ

天変地異まさにラジオの出演なり

選挙戦風刺漫画のネタ豊富

有り難や偉いご先祖ずらり居て

枚方市 海老池洋

平和な街の下にうごめく活断層

信号の青疑つてから渡る

目を閉じて行間しかと読んでみる

哲学の道で探している自分

私も大地に還る樹木葬

枚方市 小林 わこ

今日はいいい日だ車窓の景色きらきらと
新幹線富士が見えるか今日の運
あなたのための小さい窓を一つ持ち
窓灯り消してあなたの側にいる
窓閉めて好きな香りを閉じこめる

枚方市 伊達 郁夫

夏だから軽いジョークを二つ三つ
黒粋の友の知らせを裏返す
補聴器と眼鏡がずれている会話
母笑う家の空気がまた笑う
ドナーカード作り空気が軽くなる

枚方市 丹後屋 肇

老いらくの窓を許せよ湧く清水
全没句ブツブツ独り立ち呑み屋
心技体身に沁みてくる負け相撲
一言で破れる恋のデリケート
喉越しのビール炎暑に深謝する

枚方市 寺川 弘一

人間の宣言をする呱呱の声
人間は羽根が無いのに飛びたがる
定年になっても髭が伸びて来る
無人駅にも乗車する人降りる人
お酒をやめる代わりの価値が見つかれば

枚方市 二宮 紫鳳

日焼けした孫の笑顔に優勝旗
水田にネオン映して蛙鳴く
ウォーキング涼風嬉し夏の宵
夏休み絆をつなぐバーベキュー
朝顔に朝一番の御挨拶

枚方市 二宮 山久

毎日のチラシが招くバスツアー
ライバルに負けじと元氣もらう日々
梅雨晴れ間布団たたきの音がする
幸せな暮しに妻の笑顔みる
少年の笑顔が似合う夏帽子

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

蓮の花ひらく焦がれたひとのこと
八月に約束があるカブト虫
アイデアを下さい暑い日の夕餉
身構えて疲れてばかりいる鏡
トンボ舞う盆だと思ふ亡姉忍ぶ

藤井寺市 高田 美代子

暑い笹天神様のお渡りだ
ハルカスのお蔭阿倍野の地価跳ねる
男坂と女坂あり神参り
人並みにペットボトルを持参する
深呼吸したら血圧落ちついた

藤井寺市 津田シルク

父の日は娘がデートしてくれる
単身赴任また呑みましたねとテレビ
収まらぬ虫がコップの酒あおる
睡眠の質を狂わす熱帯夜
亡母の齡近く断捨離考える

藤井寺市 増井ヨシ枝

老人と呼ばれたくないまだ七十
ひまわりの元氣もらつて散歩道
旅先で森鷗外にひよいと逢い
カサブランカ亡夫の形見香る夜
若葉から出でて青葉の蟬の声

藤井寺市 俣野登志子

勝ち負けはいつもあいまい二人老い
月と陽とロマンチックな月の勝ち
カード払い借金してる気分なり
許せてもわたしは巳年忘れない
アクションを起こしましたまた用が増え

藤井寺市 吉田喜代子

待ち兼ねた雨飲みすぎましたミニトマト
胡瓜にも自己主張あり曲り方
ありがたい窓全開の梅雨晴れ間
節電に夕顔の蔓急に伸び
疲れないテレビに出すぎ名医達

藤井寺市 若松雅枝

申し訳無いがまだまだ逝けません
亡夫ならどちら選ぶか尋ねたい
七夕にアベノミクスの話でも
まだ少し残る元氣に感謝する
赤富士の写真亡夫の遺品です

松原市 森松まつお

ソーメンでも充分すぎる運動量
枝豆とヤッコで二本ロング缶
文楽の余韻を抱いて中ジョッキ
川に何故わざわざゴミを捨てにくる
Tシャツと短パン夏の正装さ

箕面市 酒井紀華

逢える日はネール薄めに塗りなおす
嬉しさを隠しきれない目が笑う
うれしい時おもしろい言葉でる
窓際で絶景ながめ社史作る
去るものは追わずと決めた恋が行く

箕面市 広島巴子

残雪の立山ほつとりフレッシュ
雷鳥に順応性を学んでる
蝙蝠も飛んで恐怖の熱帯夜
猛暑日も口は元気な長電話
里帰りいつかと鳩が窓で鳴く

八尾市 内海 幸生

朝顔の種は朝顔裏切らぬ

切り捨てた葱が済まぬほどに伸び

わらべ唄痴呆症病む顔でない

阪神が負けた日孫はねだらない

天災は地球に払う地代かも

八尾市 高杉 千歩

ならぬものはならぬ生き易し

妻だった頃思ひ出す七分粥

有難うどつち向いても感謝です

健康年齢卒寿まではと三千歩

百歳も珍らしくない町に住み

八尾市 宮崎 シマ子

今日はさよなら明日はどんな風かしら

選挙戦他人事ではないんだよ

日中はだれも通らぬ白い道

白百合が仏の前にある季節

行き先は波にまかせている浮輪

八尾市 村上 ミツ子

曖昧なまま梅雨入りも梅雨明けも

食べて寝て覚めたらおなか空いていた

ジョークのうまいおひとに右へ倣えする

猫の恋人目気にせず無責任

悔しさを言わずただただ鍋磨く

大阪府 桑田 ゆきの

思い切り火蛾打ち憤懣ぶちまける

サングラス掛けて違った世界見る

実直に生きた証の父の椅子

食育に力を注ぐママの意気

浄土への土産沢山習い事

大阪府 野田 栄呼

自分流ひと日ひと日の持ち時間

ありのまま自分の色で生き通す

何となく力抜けする休刊日

若作りしても体型うそ言わぬ

三世代老いに冷たいすきま風

大阪府 米澤 俣子

生きるとは今光ること蛍の火

穏やかに柔に核心ついてくる

怖いもの見たさ日向で見る鏡

時折は身軽さ願うかたつむり

段々とがざつになつてきた地球

大阪府 初山 隆盛

ふるさととは花いっぱい絵に染まる

平和への祈りに揺れるお灯明

どんでん返しあるから靴を買いにゆく

かんなくず薄く削つた腕も錆び

生ききつて花の柩も地に還る

奈良市 阿部 紀子

舞台挨拶スターのオーラ貰ってる
映画見て泣いてさっぱり気が晴れた
等身大女性フィギュア悩ましい
志長い怠惰で消え果てた
淡水の真珠不揃いだから好き

奈良市 大久保 眞澄

つまずくから仕返しに石蹴っておく
心地よいお世辞に思い出し笑い
下戸も負けへん熱燗でウーロン茶
とんがった心背を丸めて隠す
確かなうちに聞くべきだった墓のこと

奈良市 加門 萌子

また消える大正昭和松坂屋
どの街もお好き大型複合化
急テンポで変わる都会の競争図
しま風に二歳児と乗る初景色
わつと飛び付く国民富士山の杞憂

奈良市 辻内 げんえい

若肌を褒められて買う化粧品
若いわね褒め言葉とは思えない
くるくる寿司孫の注文みな高価
聞こえぬ祖母聞こえぬ振りの子と同居
予定空き突然やる気湧いてくる

奈良市 米田 恭昌

ばらばらの家族でもみなあつたかい
ゆるキャラ被りひとが変った内気な子
争いを好まぬ孫は鳩が好き
干涸らびた輪ゴムと亡母の闘病記
ハイレグの若さ眩しい夏の海

生駒市 飛 永 ふりこ

大皿に真夏華やぐアラカルト
根野菜のシャキシャキ悔しさも刻む
おすましもシャベットには片えくぼ
さりげない打ち水しんなりと五感
野菜ジュレ旬が浮き浮きサンシャイン

奈良県 渡 辺 富子

枝豆の青と昔を語り合う
生き下手を笑い合ってる紙コップ
カラフルに自己責任で咲いている
薄味の夫婦になつて寺めぐり
天国へのきざしちらり見えてきた

和歌山市 上田 紀子

誰だろうハートにノックしてるのは
完璧の鎧段だん重くなる
目に見えぬ所を磨く気の配り
的を射る殺し文句が浮かばない
胸張って政治家などと言えますか

和歌山市 喜田 准一

有りのまま生きて暮らしの泣き笑い

すぐ軌む格好つけた思いつき

強烈な個性に両刃ぶら下げる

風読んで決める立つ位置座る位置

限界を超えているのは承知済

和歌山市 楠見 章子

追ってくる秒針の音熱帯夜

夏休み爺の体力もうひとつ

お化けより熱中症のこわい夏

百均の軽いリズムに踊らされ

ひまわりが揺れてゴッホに会えそうな

和歌山市 坂部 紀久子

今日もまた言訳ばかりする猛暑

整理してもすぐごちゃごちゃになる机

後悔を明日の彩に塗り替える

平均の中から一歩出る努力

八十路坂軌道修正繰り返し

和歌山市 武本 碧

担がれて乗った話がむず痒い

青かったサラダ記念日セピア色

近いうちと言つて音沙汰ない諭吉

保証書の付いた方向音痴です

吹けば飛ぶ蚊にもチクリと刺す勇氣

和歌山市 田中 みね

何ぞ有る覚悟の上で医者へ行く

句会の日はなぜかきらきらしてる妻

引くわけにもゆかず隣家の庭の草

すつぴんでもまだまだいける自己暗示

以後注意冗談いえぬ人と知る

和歌山市 玉置 当代

梅雨明けてまた始まった梅仕事

女子会が持ち上げている大ジョッキ

病室の窓ごしに見る遠花火

食べて飲むのんでは喋る憂さばらし

食欲旺盛リバウンドした意志のなさ

和歌山市 土屋 起世子

シャッターを下ろしひっそり独り住む

何もせず遊べと里でもてなされ

三回忌やつと押入れ片付ける

どん底を知ってる顔がよく笑う

おつかれさま一声かける苦勞人

和歌山市 福井 菜摘

やせ我慢さらりと捨てて生き易し

亡母いれば降りたと思う花の駅

憔悴の身にかけてかえのない家族

前向きに生きると決めた朝の駅

泰平の明日を信じて種を蒔く

和歌山市 古久保 和子

風鐸にシルクロードの風あそぶ

絵手紙の花にも水をやるころ

音程の多少のずれも持ち味に

ドーナツの穴へ介護のバスが来る

移動スーパ―演歌流して週二回

和歌山市 堀 富美子

労いへ亡夫のひとを抱いて生き

私の歩幅で生きる幸せ度

見かけなど要らぬ心の豊かさは

こんな所に潜んでいたか論吉様

わたし色長いスパンで染めあげる

和歌山市 松尾 和香

雪の八甲田迎えてくれた全日本

年一回会える楽しみ続く幸

青森で我が家の地震知らされる

過去は過去今が大事と四股を踏む

熊野灘強くなれよと来る波濤

和歌山市 松原 寿子

真上なる銀河よ遠き人偲ぶ

一滴の炎を抱いて夢を積む

介護から離れ潮風噛みしめる

図太さが少しはほしい肩を抱く

熱帯夜のちの水は欠かせない

海南市 小谷 小雪

深夜まで蟻御一行お働き

ロボットに浚えてもらう宇宙ゴミ

復興を祈る銀河に立つ二人

太陽のリズムは悩み吹っ飛ばす

だんだんと前傾姿勢坂登る

紀の川市 宇野 幹子

古民家を守り通した五寸釘

両の手で抱けばどの子も立ち直る

妥協して目深に被る夏帽子

アンテナを張って女の指定席

立葵あしたの夢が掴めそう

紀の川市 北山 絹子

少子化へこどもの声が遠ざかる

土付きの野菜に母の愛がある

人生の長いトンネル潜ってる

余所の子は何故か頭が冴えている

聞かぬ振りそんな夫の地獄耳

紀の川市 辻内 次根

食卓はひとり誤嚥をせぬように

梅雨晴れ間花のポットを頂いて

立ち止まる迷路で飽きることがない

選ぶのは他人天下は我のもの

時々強く揺すってみる暮らし

田辺市 岡本 昇

戦中は一枚岩の隣組

棒グラフなぞつて苦い昼のパン

整形の妻さりげなくそれとなく

梅雨最中あじさい寺に響く鐘

ヤッホーの銜を友にひとり住む

橋本市 石田 隆彦

シヨパンの調べに負けぬ森の雨

老いてきて些細な事に感謝する

地べた這う影も暑さにとろけてる

ほんわかと四季を転がし生きている

半分は年金暮らし近未来

神戸市 伊勢田 毅

妻が逝き最後を描けぬ白い画布

夏休み孫のペースで日々疲れ

切れのよいジョークを飛ばし母白寿

流れ素麺父は巧みな箸さばき

ビヤガーデン向うの席は送別会

神戸市 井上 じろう

傷心を満たしてくれた妹は今

風の色楽しみながら今を生き

異議ありも自分をこらすことがふえ

富士山頂誓った友も天国へ

僕の夢小中高と変わりゆき

神戸市 木村 貴代子

ただ今と遺影に声をかけてお茶

合席の客につられて箸動く

隣席の仲良し続く七十年

ゆずられた席にゆずった頃思う

核のゴミ庭先に積み帰れと言う

神戸市 白川 淑子

キラキラと海スキップもまだ出来る

面白い事しかやらぬ水瓶座

梅雨あける孫のおねだりさくらんぼ

いじらしくて見れぬシヨーケースの小犬

川柳が好き主人公になれるから

神戸市 山口 光久

今日の日を占うような朝の空

浮き草もしつかり花を咲かせます

子宝に恵まれ五欲すてました

人生のふし目節目で活ける

濃淡をつけて自分史書いてる

神戸市 山口 美穂

あつい暑い咽から暑さ吐き捨てる

また犬の最後を語る涙声

今日がいちばん若いんだよと蟬が鳴く

お喋りが若さの秘訣立話

五千歩へ足踏みも足す万歩計

神戸市 山田 婦美子

老いてまだきれいな円が描けない
生命線の先に不吉な跡がある

前の世の続き演じているヒト科

三猿に目もくれないと言う矜持

勿体ないの言葉もうすれた新人類

相生市 中塚 礎石

返盃は打算の滴残しとく

染める気にならず白髪闊歩する

筋書きを書いても駒が動かない

定年になっても八十路同じ靴

老骨の尻を叩けば歌が出る

明石市 梶谷 和郎

平和には核の飾りが似合わない

どの神も自爆しろとは説いてない

熱中症か血圧とるか迫る塩

小さな夢なんて言わない言わせない

ボケるまで生きてその後は神まかせ

芦屋市 黒田 能子

回覧車ふっ切れましたひと回り

同じことしたのに今日は叱られる

昨日の私リセットさせる朝の風

でこぼこのコンビで恙無く暮らす

ソブラノで笑える若さまだ少し

尼崎市 市坪 武臣

謎なぞを母に習った道しるべ
富士よりもやはり故郷の桜島

したたかに呑んだ帰りのあの辛さ

ケーキ屋になりたい孫の夢無限

怪童尾崎を偲び昭和の夏とおく

尼崎市 加川 靖鬼

雑草も雑魚もわたしの辞書にない

臓器提供やさしくします馴れるまで

男偏の漢字はいつか消えていた

取り敢えずグメン謝ること増える

地団駄を踏むと活断層覚ます

尼崎市 軸丸 勝己

今思うラッキー富士に二年住み

わが物と朝な夕なに仰ぐ富士

万葉の思いに暫し田子の浦

富士山に一礼ゴルフ第一打

自転車も凶器世の中忙しすぎ

尼崎市 春城 年代

沈黙に責められている夜のしじま

梅雨の廊下ですれ違ったオーディオロン

この町に生かされている馴染んでいる

しょっぱいか涙のあとをたしかめる

なに程のことか卒寿の日が流れ

尼崎市 藤井宏造

サウナでの僕の汗みなアルコール

海水着きるのに妻はダイエツト

我が儘を言つてはならぬバスタア

流行の家族葬して安くつき

力んでも弱弱しげな影法師

尼崎市 山田耕治

土産などいらぬお前を待つてゐる

屑籠へあとで拾いに行くシュート

登校の子等犬の背を撫でていく

この雨はダムにも降つてくれている

おのが名を呼んでしつかりせよと言ひ

加西市 金川宣子

見直した仕掛け花火のプロポーズ

原因を医者のはしごで突き止める

孤島でも人口増える夏休み

三世代総出でゲット特売日

傘寿なる最終章の幕あける

川西市 西内朋月

嫌われる煙草ですけど止められない

ロボットが文句を言っている掃除

落日を見ると明日が見えてくる

返事などしないと決めてから迷う

正解が無いかも知れぬから難儀

川西市 山口不動

おしゃべりの嫁はんがいて癒される

柳誌来て秀句のシャワー浴びている

追いつこう後ろ姿が魅力的

この坂で今日一日の息切らす

くちなしの匂いの中に遠い悔い

川西市 米原雪子

この暑さどう乗り切るか老いの知恵

老人会欠席の人氣にかかり

週一回笑顔を見せに老人会

皆出掛け私テレビのお客様

食事講座小食のわれ奮起さす

三田市 石原歳子

夫逝つて星大好きになりました

本開くすぐに睡魔に襲われる

人を待つ時が幸せ腕時計

十五階鳥の視界で暮らしてる

いつまでも若い気持で歌うたう

三田市 上垣キヨミ

友の檄私に太い支え棒

天地のめぐみ戴く朝の膳

借りている命大事に生きている

背かれて自分の昔振り返る

夏来る平成の足闊歩する

三田市 尾崎 一子

青春を駆けた街並み今レトロ
物忘れ子にしつかりと見抜かれる

三猿にまだまだなれぬ好奇心
達者です巡り来る日の介護椅子
長いおつきあい隣の灯が消える

三田市 北野 哲男

バンザイを稲が叫んでいる酷暑
草笛を孫に教える夏休み

老人になり切れなくて忙しい
昼寝でも寝れない夜はありません
誰よりも早起きをする炊飯器

三田市 福田 好文

諍った後の夕餉も出るビール
ネクタイ屋倒産させるクールビズ
投句欄友の名もなくホツとする
自爆テロごとく蚊蚊が食らいつく
後一本飲めば本音が言えそうだ

三田市 堀 正和

本当は人間嫌いですホテル
雨女一人だけなら勝てるけど
雨の日に読むミステリー買つてある
オレオレの電話来ぬのも淋しいね
富士山が怒ると怖いことになる

西宮市 緒方 美津子

麻酔から醒めて記念の日となった
ストレスを少し背負っている元氣
真つ直ぐな人ばかりいて束ねられ
それとなく晩酌監視してる妻
静かには食べられぬ激辛の麵

西宮市 片山 忠

気まぐれにやつて来そうなバスを待つ
少しだけスリルも欲しいクラス会
父の日に誰か来ぬかと抜く鼻毛
メールには過剰反応してしまう
明暗を分ける独りになつてから

西宮市 亀岡 哲子

相棒が未だエアコン大嫌い
南窓ひまわりあつちばかり向く
タンス預金うなぎ高値もなんのその
天国の特等席に母が居る
許しませ孫と揃いの半パンツ

西宮市 西口 いわゑ

追伸に静かな雨の音を聞く
両の手で握手よろこび倍になる
恋らしいきらきらしてる孫娘
富士山を改めて見る写真
輪になつてみんないい顔してジョッキ

西宮市 牧 渕 富喜子

姫路市 古 川 奮 水

こわい顔で言つてゐるつもりない暑い

探すこと焦がすこと増え月変る

腰深く座つてからの視野の幅

自由とはふと落ちつかぬもののある

坪庭の木洩れ日きらり生まれけり

西宮市 山 本 義 子

胸の線大きめの服バサリ着て

汗だくだくとても淑女に化けられぬ

長生きも芸のうちかと元氣ぶる

こち良い騙されかたもあるとする

足湯よし今日の疲れは今日のうち

西宮市 吉 井 菜々子

コーヒーが冷めないうちに這い上がる

これしきの雨に怯まぬハイヒール

空き缶と並んでちよつと雨宿り

バイオリン片手に天女みたいだな

月光をひたひたお肌隠れ

西脇市 七反田 順 子

犬と散歩涼しいうちに行くのです

目覚めたら名水たんと飲むんです

子育てのツバメに学ぶ低飛行

ウグイスも熱中症かな鳴きません

蟬しぐれ熱苦しゅうなりますな

三味太鼓民謡踊る里は夏

歌詞聞いて理解が出来ずラジオ切る

コーヒーと深夜放送テニス観る

覗き見を面白く書く週刊誌

停留所二停歩き大ジョッキ

鳥取市 有 沢 せつ子

一輛の電車稲田の色に映え

晴天が二日続けば雨を待つ

相槌を打つのもきつと愛でしよう

姉妹には癒えてから言う軽い風邪

アラームがやさしく鳴って効果ゼロ

鳥取市 池 澤 大 鯨

袋叩きせめて土竜の叩きまで

迷路のごと行く先々が袋小路

袋掛け箱入りにする手間をかけ

中身より袋に金をかけている

大黒天袋の中は米ですな

鳥取市 奥 谷 彩 子

人生劇で脇役演じ切った亡母

蚊遣りの蚊も遠慮するだろ私の血

終焉まじか仮面外して幕降ろす

老いの知恵三猿通し日が暮れる

日本海漁火ゆれて星もゆれ

鳥取市 加藤 茶人

二番手でいるから学ぶ隙を見せ
延命は遺言に書く俺は嫌

介護から遺産それから墓で採め

縁と円巡りめぐって元の鞘

絵は心あなたを写す色を選ぶ

鳥取市 岸 本孝子

通販で買うとおおかた無駄な物

観光で蛍が金になる平和

ピッタリの服を体がきらい出す

しつかりもほどほど惚けたふりもする

厚化粧して隠すから目立つ皺

鳥取市 倉 益一 瑤

伸びきった輪ゴム会話が弾まない

ハッケヨイ時間と相撲取っている

後戻り出来ぬ青さがいとおしい

ヒロインはわたし一人で見るテレビ

束にした輪ゴムの力見ましたか

鳥取市 高 浜 勇

定年を無事通りすぎスロウダウン

ギスギスをペットが舐めて消してくれ

身構えぬ人どんなにか楽だろう

心地よい汗がバランス保つてる

幻の一日すぐに暮れていく

鳥取市 竹 口 清 信

初盆の仏帰ると秋が来る

秋風に吹かれて消える赤とんぼ

春がいい年中春で居て欲しい

人間の勝手ばかりを聞いとれぬ

四季のある日本一番いい国だ

鳥取市 土 橋 はるお

失敗を許されるから生きられる

北海道から暑中見舞を頂いた

九分九厘正体わかりドア開く

天の岩戸開けて呉れたら入って見る

羽交締された事ないしした事ない

鳥取市 永 原 昌 鼓

飾らない暮らし気楽で安上がり

銭だけはいつでも味方してくれる

八十の坂へ助走が欠かせない

身の丈に合った暮らしが心地よい

見栄を張る事ももうない老い暮らし

鳥取市 中 村 金 祥

OB会また生きがいを教えられ

天才は悪魔と神の両刃持つ

お隣の猫が時々虎になる

自分から奈落の底に落ちてみる

外孫のおもちやを仕舞う手がにぶい

鳥取市 夏目 一 粹

おかわりと言えぬ戦時の灰汁がでる

無駄なもの省いて見たが味気ない

ただ酒で騒いだあのホロ苦さ

極楽があるとわかつてから逝こう

ならぬことならぬで白虎隊が死ぬ

鳥取市 西川 和 子

閃いてもすぐに忘れてどじばかり

良い人に間違ひ無いが馴染めない

私に一番馴染むのはBランク

この列を乱さぬ様に付いて行く

炎天がとっても好きなナストマト

鳥取市 春 木 圭 一 郎

青い鳥心開けば飛んで来る

幸せを分けて与えるようになる

目の前のことを乗り切ることにする

今ここに生きている意味考える

希望あり夢があるならやつてみる

鳥取市 平 尾 菜 美

くどくどは言わぬ邪心が募るだけ

被災地へとんでゆきたい鳩という

習慣にしたい脳トレ三日程

激変の時代と揺らぐ人情論

人生は色色夢も溺れそう

鳥取市 深 澤 千 恵 子

エイジレス鏡の奥に住む乙女

アクセサリー目立たぬ方が品が出る

今でしょう はやり言葉に乗ってみる

子へ孫へ残す自慢の母の味

積む苦勞知らずに崩す砂の城

鳥取市 福 西 茶 子

進化なのか退化なのか消えてる高所恐怖症

迂闊にも社交辞令に乗っている

二枚舌使うとわたくしが消える

亡母に逢う橋なら渡るかも知れぬ

脳味噌は元氣ときどき腹が立つ

鳥取市 前 田 楓 花

前向きに翔んでみますねまずホップ

お喋りが終ったあとの疲労感

脳味噌が理解できない動きする

情けないスルメも噛めぬ歯になった

梅雨明けの入道雲とにらめっこ

鳥取市 宮 脇 道 子

幸福は花と語らう老い暮し

田舎町ばあちゃん世代座を占める

化粧品一つ減らして散歩路

少年の運動見惚れ暑さ増す

年齢を重ねて骨も怒りだす

鳥取市 森山盛桜

強面の裏には腑甲斐無い自分
落ちの無い話美談になりにくい
持っているだけのスマホになつて来た
理想ならLEDという余生
揉め事を川に流して知らん振り

鳥取市 吉田孔美子

大山をわが家の庭とシエアハウス
城は網戸と蚊遣り目隠しゴーヤ
消防も見ぬ振りなのか畑蚊遣り
愛猫の手術の後手に来る小言
膝腕のぽっかり寒い愛猫死

鳥取市 吉田弘子

ボンと音出し開く蓮朝の景
山ほどの記念誌どれも宝もの
デリケートな体になつて老い進む
平均寿命高いハードル未だ続く
勝敗の競技に握手ない相撲

鳥取市 両川無限

出し惜しみしたジョーカーが手に残る
梅雨明けて女々しいことはもう言わぬ
野心まだ捨てず砂丘のど真ん中
母さんがほめて育てる茄子胡瓜
涙ポトリと闇の深さに落ちてゆく

倉吉市 猪川由美子

ワクチンで予防どころか病得る
アベノミクス諸物価上がり良し悪し
お子達の話題多い宮家です
沸点が低くてすぐにキレちまう
今年もまた期待外れのパンダの子

倉吉市 山中康子

奥さんよ主をたてて損はない
さっぱりと丸洗いでもしたい辞書
プリンプリン曾孫の肌がたまらない
子の数が減っていく淋しいこの世
肉食のお蔭か名案湧いてきた

倉吉市 山本玲子

ほどほどがすぎて出口を見失う
ジーパンの破れをてらうのも若さ
気は急ぐが腰にはりつく鉛紙
ひとり居を支える背骨よく撓う
街路樹が深呼吸吸する雨上り

米子市 後藤宏之

植樹祭回りの樹々も旗を振る
城山の山頂に立ち街づくり
かさをさしかじか鳴くなかたんぼ道
酒すすみカラオケすすみ宴すすみ
孫来れば自然と腰が伸びている

米子市 後藤 美恵子

紫陽花に庭の土壌を教えられ
静かに咲き静かに落ちる沙羅の花
統一球トップも知らぬ変化球
萎縮する脳に悪夢は寄せつけぬ
頼れる手求めて伸びる蔓野菜

米子市 高田 振作

休日は休みたいのに目が覚める
燃えもしない冷めもしなくてダイヤ婚
逝った友の話題が減った酒の席
本屋さんゆつくり読めと椅子がでる
派手な服着てもだーれも振り向かぬ

米子市 中原 章子

機転利くDJボリスいる誇り
反発心粘着力の棋士が勝つ
政界もクールビズ派と正装派
ゆったりと歩くゾウさん長生きだ
満たされて無い物ねだり娘が欲しい

米子市 成田 雨奇

脳天に響く煎餅よりゼリー
ドタキャンがあつて刺身の皿回す
十人に四人何かの先生だ
運動のひとつと思ひ掃除する
汽車の音響くルールに耳あてる

鳥取県 石谷 美恵子

咳ひとつしても氣遣う妻という
和解まで時間のかかりそうな溝
不器用で大事なときに転ぶ夫
脳トレへ揃つて弾む老いの靴
この頃のいじめは神も目を背け

鳥取県 岩崎 和子

手紙書く元氣湧き出て止まらない
もうお昼何かしなくちゃペン止める
足弱い夫も朝食美味しそう
朝食後新聞見入り声がない
日に二度の洗濯乾き嬉しいね

鳥取県 鳥越 鬼一

熱中症負けるもんかと水を飲む
夕立がまぼろしとなるこの酷暑
モットーは3歩進んで2歩下がる
老犬と老人ふたり侘び住まい
揃つての海外旅行今年こそ

鳥取県 松川 行男

新幹線汗を拭きつつ孫に会う
爺婆の出会いの秘密縄電車
砂時計返せば過去の三分よ
早々と梅雨明けダムは満腹か
原発も痛し痒しの夏迎え

鳥取県 山下 節子

無駄話上司の咳でしずまった
つまみ食い不意に呼ばれて咳き込んだ
ややこしい話のようだ近づかぬ
口下手で正直すぎて不安です
古くても婆の知恵には無駄がない

鳥取県 山本 正光

いいことがまたあろうかと努力する
仏典に我慢の是非が書いてある
今一度会いたい人が多く居る
千枚田マヤの遺跡に遠くいる
モアイ像歩いて来たは嘘でしょう

松江市 小川 注湖

平凡な幸せ分かる人になれ
原発が廃炉の国の輸出品
うなぎ高値落語の中で笑わせる
九条のおかげ明るい部屋で寝る
軽く出すジョークが刺した傷深い

松江市 川本 畔

代理なら少うし肩の荷が軽い
四帖半仏の匂い布団の匂い
望郷の雲がトンボになる日暮れ
効くような効かないような薬飲む
空しさを蹴って遊んでがらんどろ

松江市 錦織 禮子

夏本番製氷室はギブアップ
午後八時やんちゃな空がやつと暮れ
一滴の地酒戦火の口になる
やむを得ず検査をすれば芋ずる式
学ぶ余生今日も新たなこと一つ

松江市 松本 知恵子

カレーパン食べて速効エネルギー
一寸先読めない人間の無力
付き添いをしながら本を斜め読み
大山を遠く眺めて祈ってる
病室の窓から見てる俗世間

松江市 三島 淞丘

湖に浮く現実と追想と
わたくしをどこまで責める昼の月
ワイングラスに夜を注いでいる二人
逃げ水を追って自分を見失う
覗いてもカルテの文字はパピプペポ

出雲市 伊藤 玲子

たとう紙に亡母の筆蹟残る帯
焼香の小さな喪主に風も泣く
吐息ひとつ風が拾ってくれました
この暑さ裂けたトマトの叫び声
日本海の青が魚の目におどる

出雲市 岸 桂子

いきなりの暑さにあたふたする鏡
レシートをなぞる値引きの品ばかり
つつじ炎え会いたい人は左きき
気がつけば国もわたしも崖つぶち
空の画布哀しい彩は似合わない

出雲市 小白金 房子

山鳩の声参道の朝を踏む
手おし車朝一巡の風を抱く
三十年学んだ詩集の重み抱く
麦わらぼうし求め観戦孫を見る
七夕へ手折る母子の温い指

出雲市 多久和 敬子

脳味噌が足りなくなつて水を飲む
脚光を浴びてそれから迷い出す
茶柱が立つたあの日は遠くなる
おばあさん他人に呼ばれ知らぬ振り
水溜り跳べるチャンス逃がさない

出雲市 竹 治 ちかし

視野に海入れると跳ねてくるわたし
語りたい語りたくない歴史持つ
一寸の光陰老いてから解る
断捨離の中で私が消えていく
吹き込んだ命砂像の良い笑顔

島根県 伊藤 寿美

何も出来ず一緒に泣いてあげただけ
お帰りと言う仏壇に灯を点す
ネムの花咲く山すそに小豆蔕く
ITの海吃水線が深くなる
サザン復活号外も出る巷

美作市 福原 悦子

人生はその他気楽に土と生き
一筋を通す男の眉がある
人間の窮地を救う知恵袋
笑つたり泣いたりして出来るゴミ
チャーミング母は達者で歩いてる

広島市 岸 本 清

晩酌は常にセルフで満タンに
悪友の生きとるかには情がある
掃除ロボ襖障子に体当り
職退いてかわいい部下の掃除ロボ
腹這いになって気付いた安堵感

竹原市 石原 淑子

生かされて二十四時間自由人
繕うたつもりの笑い空回り
風さやか出遭えた不思議掌を重ね
蓮の葉に抱かれた蕾阿弥陀さま
御先祖のひとりとなりし姉彼岸

竹原市 岩 本 笑 子

朝顔も夕顔も植え夏にする
逃げないで朝の蛙はハンサムで
風鈴の忙しそうな客ばかり
前へ前へと何も無いけど歩く
新鮮ですよと新聞紙にくるみ

宇部市 平 田 実 男

ピンポンが鳴ってケンカは小休止
間違ったほうへも進む多数決
匙投げた患者から来た内祝い
ひと言で広がる余波は無限大
冷や飯を食った男の底力

松山市 古手川 光

梅雨の鬱入道雲が追っ払う
猛暑猛暑へ泣いている人笑う人
英霊に問えば改憲ノーだろう
消えそうだ鰻上りという言葉
美辞麗句もう結構という遺影

松山市 宮 尾 みのり

中庸でよしばあちゃんは恙無い
シュレッダー少し残っている未練
息継ぎの位置に友だちいてくれる
突き詰めていくと臓器が疼き出す
実像は別に持つてるプロフィール

西予市 黒 田 茂 代

短命の蛍も蟬も欲がない
スケジュールに昼寝の時間書いてない
冷暖房付きの葬儀がありがたい
築百年今の平家が住み易い
一つが出て一つがまた行方不明

高知市 小 川 てるみ

脱水症意識しすぎの水太り
心にもサプリメントという読書
思い出し笑いを風に覗かれる
合併をしてもちつとも変らない
雨続き酸素欠乏症になる

高知県 小 澤 幸 泉

罪深い私の奏でるアヴェマリア
七十歳そろそろ眼鏡変えてみる
黒枠の柳友を見送る寒い夏
長生きの秘訣は知らず生きつづけ
妻植えしひまわり今朝も顔を向け

唐津市 坂 本 蜂 朗

恰好いい老いを演出した疲れ
鍵眼鏡の放浪癖に悩まされ
親心判って急に墓参り
煩惱と妥協しながら歩いてる
父を避け母と娘のあのねのね

唐津市 山口 高明

山寺の斜面を埋める水子仏
雨の夜は呪詛の声きく水子塚
過剰米あるのに何故か高い米
噴火口のぞいて死ぬ気失せました
ひとつだけ残った饅頭半分こ

(前月分) 高槻市 左右田 泰雄

痛いところ突かれそっぽを向く白髪
控え目な気持が覗く眼鏡越し
八十路坂ゆつくり越える水入らず
見極め力をくれた虫眼鏡
水臭いことは言わぬが花ですな

(前月分) 東大阪市 米田 水昇

世界遺産立派に見える富士の山
過ぎた日の海外旅行夢で追う
酒を止め人生の旅細くなり
孫の作人形の枕を抱いてます
夫との思い出なつかし風の盆

(先月分) 奈良県 渡辺 富子

挽きたてのモカとゆつくり読むコラム
古都暮色相合傘でぬれてゆく
見掛け倒しの若さを坂に笑われる
来し方のノート海鳴り高くなる
来るものが来たあの人も杖をつく

病癒えて蛍の光夢のごと

(前月分) 鳥取市 宮脇 道子

老いた脳思わぬことも言って退け
災害保険明日が分らず続けるか
雨を待ち子らの色傘冴えている
宝籤私の夢は三百円

(前月分) 米子市 成田 雨奇

山清水コップ取り出す無粋者
スパゲティ食べてきた子が田植えする
正直なのは降り出す雨か予報士か
弔辞終り思わず拍手したくなる
小心者浅いところで引き返す

「美と川柳X」観月の夕べ

と き 9月19日(木) 13時30分開場

ところ 兵庫県立美術館
(阪神岩屋駅下車南約400m)

宿 題 各題2句 14時30分締切

「遊 ぶ」 黒田 能子 選
「 絵 」 谷垣 郁郎 選
「 橋 」 平山 繁夫 選
「 月 」 赤井 花城 選

参加費 4,500円(美術館観覧料、句会費
月見の宴を含む)

申し込み先

山本 芳男 TEL 078-751-1327
長島 敏子 TEL 078-793-3641

主 催 兵庫県川柳協会
協 力 兵庫県立美術館

川柳塔の

川柳讃歌

(105)

木津川 計

噂では地獄の閻魔認知症

古今堂 蕉子

アハハ、笑いました。法螺を吹くならこれくらいのスケールでありたいのです。

「死ぬなら今だ」の訳は二つです。①先代閻魔の二千年忌故、格別の憐憫をもって極楽へ通しつかわす。②閻魔大王以下役人が収賄で逮捕され、閻魔庁は空っぽ。そこへ三番目の訳が閻魔の認知症ときました。もはや前世の善悪を見分けもできず、「地獄でも極楽でも好きな所へ行けい」で、死ぬなら今ですが、蕉子さん、死なんといてやー。

七十の手習い男磨いてる

山崎 武彦

「曾根崎心中」の徳兵衛は命代りの大金を友達の九平次に貸したら、返してくれん。心配するお初に徳兵衛はこう言うのです。「あいつも男を磨く奴、如才はあるまい。氣遣いしやるな」ところが九平次はワルです。「借

りた覚えはない」に絶望した徳兵衛はお初と心中して果てるのです。

男の磨きようも善悪二つあるのを知ります。武彦さんは善の手習いで男を磨きますから箔がつき、文字通りピカピカの老春です。

母の日に軍手干してる母子家庭

伊勢田 毅

細い布で被せ縫いしたボロ服の外交員を岸本水府は電車の中で見て感動したのです。二日もかけて繕ったであろう内助の功に打たれたのです。水府に学んだ岩井三窓も温い眼差しの方でした。原爆で奥さんを奪われた川柳家の胸を打つ句を、他社の巨頭が未節の技術批判で酷評したのです。三窓は怒り、「なぜ句のところが読めないのか。母の日の母子家庭の軍手に目をとめた毅さんのことです。

かすみ草がけれどもという聞いてやる

籠島 恵子

かすみ草は辛い上に悲しいのです。色が白いばかりに、清らかなころと思われ、無邪気な魅力で夢見心地と花言葉で解されるのですから。

なぜ外見でわたしを判断するの。「あざみの歌」をご存知でないのですか。「山には山の愁いあり、海には海の悲しみや」のようにあざみも悲愁に沈んでいるのです。かすみ草

は例外だと、なぜあなたには思えるのですか。恵子さん、よく耳を傾けてやりました。

財産がないから風がよく通る

牧野 芳光

「おくりびと」の小林大悟は孤独死した父の許へ行き、財産がダンボール箱ただ一個に「この人の人生は何だったのだろうか」と思ったのです。「無法松の一生」の松五郎も柳行李一つを残して逝きました。「風がよく通」ったことでしょう。まさか芳光さんがそんな暮しとは思いませんが、樂觀はしておれないからです。消費税は確実に8%、10%と上ります。低所得ほど負担割合が高いのです。芳光さんの達観がずっと続きますように。

神さまの歳は存じておりません

谷口 義

「神風」で散った特攻たちは二階級特進して靖国に祀られ、二十代で軍神になりました。乃木大将は明治天皇に殉死して切腹、乃木神社が建てられ、六十二歳で神様になったのです。神様は人間の都合に応じてつくられてきました。科学に立脚すれば無神論にならざるを得ません。が、人間は弱く、何かにすがりたい。かくして唯神論はうまれ、年齢不問の漠たる神を頼るのだと義さんは考えるのです。

〔上方芸能〕誌発行人

西尾 葉句抄

(定本『西尾葉句集』平成八年発刊)

家族風呂

皿割った音を奥さん寝間できき
意見する儂がまだまだ遊びたし
姑は半分きこえる耳をもち

孫が来て碁石が足りぬ駒がない
巻きずしの中だけ食べる祖母育ち

染め直し昔の生地をほめられる
おんなじ話きくも孝行の一つなり
せやさかいにとゆるう叱られる

みんな帰してホンにおなかすきました
俺は独酌妻は家計簿差し向かい

ギヴアンドテイク

判取をしいしい容態きいてくれ
セールスは譬え話をたんともち

得意先のボンボン抱いて泣かれたり
交渉はギヴアンドテイクの肚でいる
操短の工場の上の揚雲雀

倒産へ非力な親類ばかり寄り
ひがんできけば機械の音も借金借金
菜の花の中の工場は閉めてあり

新川柳鑑賞

(19)

麻生 路郎

お見合いのお菓子一つも減つたらず

(藤 波)

見合いの席と言うものは、何んと言うことなしに気の詰まる思いのするものである。菓子は出してあつても誰一人手を出そうとはしない。「どうぞ」

と言われても、若い二人は手が出ない。僅かにお茶に乾き切った唇を濡らすに過ぎない。とう／＼茶菓子は一つも減つていなくなつたと言ふのが作者の発見だつた。

何一つそろえぬ方が先に嫁ぎ

(不二)

年ごろの娘にとって、結婚準備は容易ではない。親の世帯が苦しければ、会社勤めをしても、ポツポツ準備をするものである。ところが何一つ揃つていない方が、先に結婚したというのは美貌をのぞまれてこしらえどろりという結婚をしたか、相思の仲で、何のこしらえもなしに結婚したことを意味するのである。あとに残つたのは二人の娘の姉か、或は友達の場合であろう。それほどどちらでもいいが、何一つ揃えぬ方が先に嫁つたというのがネライである。

交際しろとは事前工作か

(圭太)

近ごろ年頃になつても、なかなか結婚がしにくい。深窓で育てていては、いつ良縁があるか判らない。勢い相当の家の娘でも、会社へ勤めにやつたり、適当な青年がいたら交際をさせたりしている。

この句はそれを詠んだもので、その点、娘でも息子でも心得たものである。交際はしても、あまり間違ひの起こらないのも時代であらう。

出世すりや兄が下座で酌をする

(六花)

大学を出た弟が、警察署長を経て知事になつて地方としては出世に違ひない。そうなると、なんかの集りがあつても兄の方が下座で酌をするのを見かけるが、この句から兄ではあるがやむを得ないという諸めと、この弟の兄だという幾分の誇りとが感ぜられぬでもない、複雑な感情を汲みとることが出来る。

嫁かんでもいいわに嫂ちとあわて

(満秋)

小姑というものは、昔からうるさい存在とされているものであるが、戦後、女があまつている時代ではなおさら厄介な存在に違ひない。

三十を過ぎるとますます縁遠くなり、どんなところへでも嫁ぐ気になつても、どんなところさへなくなるものだ。そうなると、本

人もふてくされて、「嫁かんでもいいわ」になるものだ。そうなると嫂の方が、少しあつてるといふのである。人情の機微を衡している。

ユアマザーと佗しき嫁の言葉なり

(北海)

家庭の複雑さを巧みに表現した句である。この嫁は所謂アプレ派の嫁であらう。自分の夫の母なら、自分にとつても母である筈だが、ユアマザー即ち、あなたのお母さんでしよう、わたしの知つたことではありませんわと、家庭のもつれに際して、母即ち姑に対しての親しみを少しも持ち合さないのである。この句の場合、夫に対して、ユアマザーの語の痛烈な反撃は姑としては実に佗びしい言葉となつて響いたのである。

もう二十言つても聞かぬ娘に育ち

(多久志)

作者の実感であらう。

「もう二十」の「もう」がよく利いている。「お父さん、わたし短大に行くわ」と言うたうら行くし、「デパートへ勤めようと思つての」と言うたら、どんなコネをつけてでもデパートへ勤めるし、休みにはスキーに行くこと云うたらスキーに行くし、イヤハヤ、アパンの親達には想像もつかぬ娘に育つたものだと言ふのである。まあ、まあ、したいようにするさと親の方が匙を投げたかたちの句である。

自選集

小島 蘭 幸

奥田 みつ子

笹に願いを句碑にお酒を路郎の忌
ケープルテレビやがて市長も来るまつり
句碑まつり終わると雷が落ちた
路郎展文学館に風が吹く
路郎展の余韻と展望台にいた

八十田 洞 庵

河 井 庸 佑

追伸に母は辛抱せよと書き
善人と言われた人にこの秘密
人生の余白もつたいなく使う
蔵の壺家宝と言うが偽らしい
左遷の日栄転らしき人も乗り

板 尾 岳 人

川 上 大 輪

初恋が落ちていたので持ち帰り(竜飛岬)
人間に逢つて蹄の音を聞き(十和田市駒街道)
浮いている地球の上で恋をする
三枚におろし煎じている余生
母に言いたいことがあり灯をとます

句の絆初対面でもうち解けて
古都今はバラの色香に彩られ
胸底の秘密ときどき悪さする
角のポストにぽとりと落とす我が想い
乾いた胸に皆のやさしさ沁み透る
二度の職終えてのんびり一人旅
スタミナを溜めて時待つ長丁場
詰将棋鍵の一手へ思案顔
先手打ち後はじっくり待つ結果
友の意見なおざりにした自己嫌悪
熱帯夜ときどき脳がショートする
ペランダの雀何やら置土産
囁りが止まぬ説教終らない
ひとすじの煙自由になりました
眺めてるだけでは越せぬ父の山

小西雄々

涼風にホールインワン邪魔された
要領の良いこと上司知っていた
シャボン玉人の情けを知らず割れ
泣きごとを聞かされしばし咀嚼する
同情は徘徊をした死亡記事

斉藤 劼

試験管ですくすく育つ科学の芽
草笛を吹くと蛙も唄い出す
しんしんといのちの唄を刻む森
ドクダミの花の白さは本物だ
変化球見抜くバットが冴えている

塩満 敏

参院選新日本の門出です
傘寿でも老いらくの恋してみたい
富士山の遺産登録おめでとう
これからは鶴彬さん出番です
リハビリのお陰杖無しで歩きだし

新家 完司

男にも乳首があつてなさけない
黴臭いマンネリの部屋やモリ這う
パソコンも応答鈍い熱帯夜
富士山が「君もガンバレ！」などと言う
自画像はコロリ転んでいる徳利

恒松 町紅

今の世の生き方老いは見てるだけ
晩酌の味健康のバロメーター
まだ欲があるから老いの小さな夢
怒つたらおしまい黙つて笑つてる
老いの杖また探しものやつている

津守 柳伸

蛍飛ぶ川へ総力あげる村
まっ白になった身内の無菌室
心頭滅却気分爽快大掃除
喉元を過ぎて煮え湯も教訓に
庖丁の冴えあまおうを薄切りに

都倉 求芽

自衛隊演習場も世界遺産入り
街も過疎駐車場の照り返し
こよみ別に日本の神はお出ましで
毒の字に入れられたのはどんな母
懸装品新調梅雨明けコンチキチン

土橋 螢

ならぬことはならぬと父に教えられ
そのときは仏になって旅に出る
高い樹にとまったことがない燕
仏からあずかっている妻ひとり
巣立つ子にさくらの花が散つてゆく

西 出 楓 楽

エステより緑の風を吸いに行く
七十五元氣出すのは今でしよう
思い出のシーンにいつも香る花
自叙伝に多目に入れる句読点
ありがとうすみませんで足る暮し

仁 部 四 郎

あの頃のニュース映画の大掛値
字幕です天然色ですバグマン
ムニャムニャと日本人なり伝次郎
リメイクの忠臣蔵のスープ味
ハラキリの美学は無声映画なり

林 瑞 枝

大宇宙のひとつの星よこの地球
名医との出逢い寿命がまた伸びる
優しさが欲しくて珈琲店をさがす
どんぐりの夢へ優しい雨が降る
天窓のいつもの位置にははの月

前 たもつ

今日何度笑い合ったか指を折り
優待パス十年間もありがとう
二十粒サプリメントへ食減らし
うつ伏せ寝日野原流に癒される
心に満ち言葉となつて口に出る

政 岡 未 延 子

老いの氣を削ぐむらさきの俄雨
錆多くなつて汚くなる氣持ち
汚いものを捨ててようやく我が時間
ウエストに魔法をかけてはくジーンズ
ジーンズがもう似合わない年齢だった

三 宅 保 州

果たし状いだだき血湧き肉躍る
予見外と告げられた手術結果
細い糸もたぐり寄せると太くなる
文才の無さが追伸かもしれぬ
変わり身の早さ両刃の剣となる

宮 西 弥 生

人生觀変えても先へ進むだけ
一流のくらしも同じ白いご飯
忍の字を越えた笑顔に生かされる
まる文字の奥にかくれた生と死
疎まれる世代の昭和に学ぶこと

夏 百 日 八 木 千 代

百日行まだ序の幕の橋懸り
水だけが武器のわたしに大氣温
睡蓮も金魚も沈みかけている
猫たちの会話 コトシハシヌミタイ
水晶のじゅずと秋まで蹲る

第138回 大坂川柳の会

日時 10月9日(木) 午後1時開場・午後2時締切
会場 大阪市立総合生涯学習センター 第一研修室
宿題と選者(各題2句・席題なし)
△「人情」中桐 徹 △「包む」谷垣 郁郎
△「面目」米田 恭昌 △「学ぶ」住田英比古
会費 1000円 欠席投句 10月8日まで 本田智彦宛
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4 706

第27回 堺市民芸術祭川柳大会

とき 9月8日(日) 12時30分開場
ところ 堺市梅文化会館 3階 第1講座室
堺市南区桃山台2-1-2
TEL 072-296-0015
(泉北高速鉄道 梅・美木多駅より3分)

宿題 各題2句 締切 13時30分
「ウイルス」 日野 愿 選
「こっそり」 笠嶋恵美子 選
「高い」 加山よしお 選
「荷物」 山本希久子 選
「汚れる」 植野美津江 選
「乱」 河内 天笑 選

参加費 1000円(作品集呈)

連絡先 堺川柳協会

〒593-8305 堺市西区掘上緑町2-16-3

河内天笑 方(Tel 072-278-4706)

主催 堺市文化団体連絡協議会

水煙抄

(つづき)

(前月迄) 府中市 馬場利子

喜寿を盛る皿が余りにも小さすぎ
時どきはストレス溶かす茶をたてる
かつぼう着のまま明日の彩を溶く
きまぐれな風と語って絵をめくる

温故知新

『谷垣史好句集』より

お賽銭春夏秋冬さむい音
輪廻とはかくの如きか観覧車
別荘でいる気でおれと見舞客
脳味噌まで乾かす音よドライヤー
意地悪な神様がいてまだ独り
心ときめく四十の俺としたことが
そこまでの散歩へ口紅引いてくる
闘病十年神より人をまだ信じ
青春の骸よ書架の資本論
余情なくナイトーの灯はすぐ消され
ズバズバと言うて女に好かれてる
からませた小指へ熱い血が流れ
謝ればあやまり方にまたからみ
退院の荷物小さな恋も秘め
四五日はお客のように扱われ
掛時計俺の寿命を刻む音
海の広さへ人間石を投げたがり
ハネムーンなんで万歳するんやろ



川 上 大 輪 選

大阪市 杉 尾 奏 子

神様の死角で赤い実をかじる
膨らんだ嚢が蓋を持ち上げる
降らぬ雨生命力を試される

無理に羽化させてしまったトウシューズ

美しいままをはさんである葉
あつけないものねほどけた赤い糸

竹原市 若 年 幸 子

バーゲンの山盛主婦の勘弁える
体調の日替りメニユー梅雨のウツ
コンマ以下コインにもならない利息
遺影に守られ好きに跳んでます

熟れ過ぎの葡萄は如何オホホホ
羽ばたきして八月を待つ千羽鶴

山口市 中 前 幸 子

笑い袋をいつも背負って夢売り屋
たましいが一人歩きをして困る
失意の日風の背中を見えています

眠りの底で見えている蜃気楼の街

鱗一枚剥いで女の正念場
花火炸裂原色の夏を描く

大阪府 神 野 千 恵 子

雲ひとつ無い空思考停止する

崩れてる魅力おかめもひよつとも

晴れがましい事もなくなり自然体

ハンガーに掛けるとかつこいいドレス

笑顔から纏れた糸の端が見え

戦災を昔話で片付ける

大洲市 花 岡 順 子

涙腺の掃除ドラマへ泣いている

家計簿にときどきは使途不明金

生きるとはツバメの糞が落ちている

まんじゅうを食べた食べたと血糖値

検診へ微妙に揺れる心電図

つぶやきを許せぬ外野席に居る

炎天下土が恋しい足の裏

松江市 武島 ちよえ

退屈はしない詰まったスケジュール

返り咲く気持は未だ持つている

書き順を昔こうだと言ったとて

珍しく儲けた話聞かされる

耳寄りの話と聞いて立ち去れず

岡山市 藤成 操江

美味だった食はず嫌いのピザの味

頼られるまだ少しある力こぶ

年金と加齢の話一時間

愚痴るほど落ち込む穴を深くする

縁あってこの地の水と二十年

この先の不安は言わぬただ歩く

豊中市 荒木 郁子

停年の妻を労い缶ビール

束の間の自由を謳歌無職です

この歳じゃハローワークも匙投げる

古里の風が気持を和らげる

この暑さ脳の回路も臍曲げる

努力賞愛の絆の感謝状

富田林市 肥山 一文

古希すぎてパターはもはや杖になり

毎日を摂理にまかせ淡々と

俺に似ず賢く生きる息子達

期限切れもつたいないと胃に仕舞う

転勤で妻のリモコン届かない

手を振れず呆然と追ううしろ影

宝塚市 丸山 孔一

石油ガス搾って地球干涸びる

恋という賞味期限の無い料理

炊きたてのご飯 私は日本人

もの言わぬ犬が心の抛り所

いつからか若いですねと言われ出し

薔薇の花おいでおいでと棘隠す

河内長野市 辻村 ヒロ

深呼吸ときどき私若返る

ときめきも人生ちよつと弾ませる

お洒落してデイサービスの迎え待つ

老いてなお女子会ですと燥ぐ友

年の功都合悪いと物忘れ

耳鳴りも友にしている老いの坂

岡山市 工藤 千代子

騙す気はないがオセロの黒と白

傷口を雨が叩いて通り過ぎ

告白を急ごう素麺茹であがる

レジ袋提げたまんまの軽い嘘

今更の言い訳クシャミが止まらない

夫の背に詫びた日もある欠け茶わん

弘前市 高森 一 吞

マイペース我が道を行く蝸牛
岩木山語りきれない日が沈む
最高の棺も焼かれ同じ灰
修正液消しても消えぬ罪と罰
笑う児も泣く子も一緒縄電車

東京都 井上 つよし

パパママと呼ぶな父さん母さんだ
憎まれ口に磨きがかかる年の功
目覚しよりも先に目覚める苦勞性
空きっ腹にああ旨かつた握り飯
終の住み家が活断層の上だった

横浜市 巖田 かず枝

愛犬の野菜煮てますメタボです
いつか着るいつか穿こうと衣更え
オレオレの電話を受けた後の汗
これでもかと思う程の葉達
どこかある自分の中のましなもの

横浜市 川島 良子

わたくしを置いて桜の花が散る
元氣よと嘘を言ってる電話口
独りつてつまらないですネ貴方
仕事復帰キミを忘れていた時間
振り返る景色の中にキミがいる

佐渡市 高野 不二

子もいないのに学校を建てかえる
どうしても入りたい人がない選挙
T P P わからないけど反対し
熱中症対策一日中ひる寝
女房に申し訳ない夢を見る

富山市 有澤 嘉晃

耐えること教えてくれた母のしわ
ストレスがたまると独り栓をぬく
聞き上手じわじわ本音あぶり出す
頑固さが消えた親父の背が丸い
すみませんだけで済ませる世が恐い

静岡市 渡辺 芳子

親友と遺影の仕度写真館
さあこれから氣楽に人生過せます
二度とない人生だからニツコリと
来世は別の自分で生きましよう
大空襲七夕の夜は忘れられ

豊橋市 藤田 千休

週休七日消化不良の日が暮れる
接待で公私の堀を埋められる
三本の毒矢に財布攻められる
神様も新居が好きな御遷宮
常識の枠から出れぬ規格品

大阪市 内田 志津子

あの山に登りたいからジムに行く
鬼の顔名利守る仁王像

A K B 顔の識別きつとムリ

一人飯今日はなんだか嬉しい日

然りげ無く助けてくれる娘が二人

大阪市 柴 本 ばつは

さびしいな九月になればまたひとり

口答えどんどんしてね父ちゃんに

弱虫も突然跳んだとべるんだ

朝顔も暑さに負けずよう咲いた

大きくてずつしり重い子らの夢

大阪市 高 杉 力

平積みのおぶどうを値切る直売所

コロッケを買って夕焼け帰り道

三品目毎度お決まり冷や奴

のびしろは十分にある通知表

テニスよりベンチトークで盛り上がり

大阪市 寺 本 実

譲りあいポトリと落ちた決勝打

最終のバスが目の前ブンと行く

デパートへ論吉引き連れ妻の供

検査時はたしなむ程と言っておく

お互いが異に落ちたと言う夫婦

堺市 梅 木 澄 空

同意書に署名する手が震えてる

若者に誘われて行くランチとか

年金に身体のネジが緩み出す

調子良い人の本音が見えなくて

簡単に昨日の事も出てこない

堺市 近 藤 治 子

思いきり泣いて笑って出来た皺

簡単な機能でいいと電気屋へ

簡単な塩おにぎりが孫にうけ

衰えを見せない爪の伸び具合

炎天にかけ込む大樹慈父のよう

堺市 羽 田 野 洋 介

堪忍袋スベアが欲しいこの世相

迷わずに選んだくじはまた外れ

物差しを変えると理想すぐ実る

それらしくムリに振る舞うごちなさ

連休明け軽いふところ重い足

堺市 山 崎 早 苗

用意した作り笑顔で乗り越える

頭上からけんか売ってる日の光

百均の店員さんにこれいくら

ダイエット達成祝いのバイキング

「ゴミですよ」ちがうのですよ顔のシミ

池田市 上山堅坊

高槻市 鳥居 宏

あの世ほど遠く離れたところはない

ペン習字急げば直ぐに元の文字

ポケットでじつとり汗を掻く拳

感動と笑いあふれる句会の場

間違うとてきめんボタン改札機

泉佐野市 稲葉 洋

腹立ちが越えれば笑う他は無し

雨文化蛇の目の傘と下駄の音

UVを知らず日焼けの昭和の子

ら抜き語も慣れ流暢に出る会話

野暮天も一句出そうな秋の夜

河内長野市 藤塚 克三

過ぎた妻とその都度思い耐えてます

鉛筆の芯に負けてるやわな自負

脳味噌が乾かぬ前に遺書残す

ゴミ掃除境界線で折り返す

夜に咲く月下美人も変り者

河内長野市 渡邊 修

政策無く当選ねらう売名者

飽きもせず父親探るワイドショウ

パツ3を明るく語るコメディアン

落選で招待席をそつと立ち

もめるたび恋文見せる内の妻

殆どを妻が支えるお付合い

思い切り走つてみたい犬もいる

嘘混せて生き生きとする物語

隠すからますます重い悩みごと

予定とは違う道だがそれもよし

富田林市 中村 恵

贅沢な自分のためだけの時間

真夜中の靴はこっそり踊りだす

曖昧を許し花など買ってくる

内にある夜をきつぱり終わらせる

見回せば一人死角にいるわたし

羽曳野市 磯本 洋一

向日葵にペットボトルの水を分け

赤蜻蛉優しい日差し待っている

団子虫ころげころげて鉢の下

熱帯夜パジャマが一人旅に出た

真夏日にエアコンのそば席さがし

枚方市 河田 洋子

残さずに食べて戦後を思い出す

バイキング元の取れない年になる

腹一杯食べてデザート別腹に

旬のものを食べて元気を貰つて

八十路過ぎ好きなだけ食べ飲みなはれ

和歌山市 磯部 義雄

独身の娘洗濯物みやげ
遺書置いてまさかには空の旅
リハビリもままにならない高齢者
眼帯を取れば明るい手術室
もう余り嬉しくもない誕生日

和歌山市 北原 昭枝

こつこつと振り子時計が胸たたく
耳鳴りと仲がよすぎて眠られぬ
途中下車しては気持を切りかえる
思い出をひとつ増やした里がえり
染みついたものが消せずにいる日記

和歌山市 さかた きく

ささやかな夏のギャンブルすいか割り
オルゴールに心癒してまだ迷い
風車風をからかう声がする
やれやれを重ねて今日も茜雲
やさしかった面影だけの母の地図

紀の川市 楠原 富子

サングラスかけて生き方変えてみる
口数が多くて遣る気けずられる
倦怠期心に鍵を掛けたまま
我慢する事も知ってる土踏まず
不平不満軽く流して歩が揃い

田辺市 小川 イセ

流れ雲ふる里の兄達者かな
最高の幸せ孫と鎌をふる
紫陽花と語れば楽し雨の午後
夏休み孫の好物市場がこ
明日咲く蕾にたと水をやる

和歌山県 森下 よりこ

うやむやに丸くおさめるのもヒト科
花は咲くの今年の野菜みな不作
つくづくと皺んだ手足撫でてみる
出てるかなとても楽しい茗荷採り
Uターン錦を飾るほどでなし

神戸市 木村 忠義

大袈裟な話は耳に残らない
正直に言うべきかちと思案する
ご近所のこと気になるは余裕かも
紳士的対応をする美人らに
楽しそうきつと夫婦じゃないだろう

神戸市 玄番 美恵子

癌完治親子で祝う旅の膳
明暗の時を刻んだ古時計
バス停に温い心の椅子一つ
元気だよそれだけでいい子の便り
ゆるやかに時が流れて白寿まで

神戸市 山根 弘子

久々にお客になった里帰り

俄か雨チャンス待つてる傘の中

友の愚痴こらあたりで句読点

旧姓で私呼んでる里の道

したたかに昭和を生きた子沢山

加東市 安達 厚

若い日もあつて僕かて恋をした

玉の汗無駄骨だとは言わせない

椅子席から埋まつてゆく寺行事

散歩せなアカンと足が言うている

わしよりはおそく来いよと妻に言う

川西市 大坪 一徳

土砂降りもあつた人生今日は晴

定年は心晴れ晴れ迎えたい

人生はナビが無いから面白い

子の顔が通せん坊と引き留める

電動の助けが欲しい老いの坂

篠山市 北澤 稠民

人生の終点忘れわがままに

人情もテレビのように薄くなり

待った雨三日続けば愚痴となる

お互いに少しぬけてて上手にくい

妻旅行のんびり昼寝ビールつき

篠山市 酒井 健二

金髪が肩で寝ている汽車の中

喰う為に喰わせる為に生きて来た

喰う事が全てであつた敗戦記

銭金で何でも換算して終る

サラリーマン終わりましたねカラーシャツ

篠山市 佐々木 勇

太陽と共に燃えたいこの夏も

抜け道を知っているのは土竜だけ

年金の税が凄いと福祉国

リサイクル暮らしに生かす潤滑油

退職後探し求めている居場所

三田市 足立 つな子

賞賛を浴びることなどない暮らし

少し地味サファイヤが合う歳となり

旅に出て拭いきれない垢落とす

雨の日は自由気ままに休みます

年の功強気な夫も丸くなり

三田市 上田 ひとみ

大丈夫ピンクのシャツもよく似合う

その席に私がいてもいいですか

ハイヒール会いたくてただ会いたくて

たつぷりとサラダ少しの赤ワイン

すこしだけ笑えるようになったんだ

三田市 多田 雅尚

銅像は髪の毛抜かれ課税され
帰国して近づく人がスリに見え
頑固でも脳は豆腐の軟らかさ
政治家に特効薬は選挙だけ
候補者がオレオレ詐欺に見えて来た

三田市 野口 晶子

伝統を青い目が継ぐ古都に住む
紅ひいて女だったと思う朝
いい訳の言葉を探す朝帰り
気がつけば私一人が生き残り
二枚では足りない舌を持つ議員

西宮市 株元 玲子

転んだ理由知りたくてすぐ起き上り
まだ若いつもりで挑戦している
まだまだ空いている秘密の引き出し
失敗を見てみぬ振りの夫婦坂
原発がねた振りのまま待っている

西宮市 藤本 直

うたた寝が氷の溶ける音で覚め
幸せな石ころのまま終りたい
お互いに我慢の意味が解りかけ
暑い基準35度になりました
ぶち切れの男が増えるこの猛暑

南あわじ市 萩原 狸月

グルメレポ不味いと言えば次はない
円安の副作用だけ出た家計
終戦日話通じぬ三世代
婚活にガラスの靴を持って行く
開拓の汗が泣いてる放棄田

鳥取市 坂本 とも湖

海風ぐとわたしの愛も芽生え出す
赤すぎる夕陽にわたし見詰められ
横文字はカット日本語なら読める
文句たれの夫は粗大ゴミに出す
窓を拭くわたしの心拭くように

鳥取市 山下 凱柳

iPS細胞未知の世界のベール脱ぐ
孫昼寝やつと静かなティータイム
傘の内きつと美人に違いない
外れても外れても買う宝くじ
政治家が小粒になった気のせい

米子市 生田 和之

ロスタイム売るほどあるがまだ多忙
刈り上げて夏を迎える支度する
ならぬことならぬと言えぬ世に暮らす
多産妻ぜひにやりたい栄誉賞
人生の最後の車軽中古

米子市 見山温子

雲南市 菅田かつ子

おれおれに振り込むほどの金はない
いい雨も三日続けば疎まれる
匙加減一つで母の味になる
いい人も入りこんだら刺を出す
草刈りを労うあざみ咲いている

米子市 森脇麗

真ん中を歩きときどき蹴躓き
チャンスです兎が昼寝しています
るんるんの気持鏡に見透かされ
身の丈に合うてのんびり行く歩幅
それじゃまたそれが別れになろうとは

安来市 原煩悩児

爽やかな夏が広がる心太
生きたいと思うピンクの服を買う
生きなければ夫をひとりにしたくない
バスタイム疲れた羽を休ませる
心の錠を外して語る友がいる

鳥取県 大塚美代子

阿鼻叫喚夜の時計が進まない
入院で小さくなった太鼓腹
疼痛が腰伸ばすこと許さない
疼痛と激痛の間に一眠り
消息は死んだ死んだのことばかり

瀬戸内市 東楨ますみ

老い一人話す相手は仏の灯
八十路坂越えて学びの虫眼鏡
不揃いのすすきも伸びて自己主張
パソコンに聞いて遊びのプラン練る
プレッシャー私の肩に乗りたがる

松江市 山根邦代

まだ生きるつもり青竹踏んでいる
雨の午後長い電話がしたくなる
マイナスをプラスに変えて日を畳む
荷下ろしを終えた背中が風邪をひく
朝の便座おひとりさまで急がない

岡山県 池田たか子

衰えた足腰カツを入れて行く
横になるテレビはスグに子守歌
新調の服は心をおどらせる
五十回忌過ぎても心泣いてます
挨拶は暑いですねと交すのみ

目も耳も病んで鉛筆丸くなる
空襲の火の海今も消えてない
ハイビスカス摩文仁に散った夢あまた
甘え癖つけて年金かじられる
ポジティブとネガティブちよつとややこしい

竹原市 六田 半徳

年金は勤め果たした褒美です

言い過ぎて詫びているのはいつも僕

切り抜きを溜め込んでいるゴミの山

午睡してこれからのこと考える

梅雨明けを待ってましたと油ゼミ

宇部市 高山 清子

お喋り雀どこへ消えたか暑い路地

一言の軽い返事で四面楚歌

日頃下げぬ頭深々選挙戦

妻という安住の座で皮下脂肪

卒寿迎え亀の歩幅で生きる知恵

今治市 渡邊 伊津志

相談というのが核心伏せたまま

空の海の隙間へ秘密落ちてゆく

開運を静かに待つて胡蝶蘭

優しいこと言われるたびにする我慢

貸し借りがまだ切れてない深い仲

松山市 神野 きつこ

不況でも持つてる人は持つてゐる

盲導犬飲みたい水をがまんする

赤福に釣られてお伊勢参りする

ポーナスが着陸態勢になった

人生をリセットすれば自由の身

香南市 桑名 孝雄

日本よじつと我慢の子でいこう

T P P日本全土の雑草化

大勝大敗一億民の出来心

国民学校あのままで居た銀杏たち

櫛の歯のようにポロポロ欠ける友

北九州市 小松 紀子

よいしよで始まりよいしよで今日終る

ピンコロと逝きます様に仏さま

丸い背の姉に似て来て背をのぼす

良いもんだ眠れぬ夜は句を作る

廻る寿司おひとりさまで行ってます

北九州市 岡田 幸生

二段跳びした階段を今は杖

長寿化を咎めるように騰る税

寡黙とはいいいもの世辞を言わずむ

就活で母への受話器まだとれず

集団下校させねばならぬ世の歪

札幌市 佐藤 登美子

遊び過ぎ投句日せまり大慌て

バスツアー花とグルメと買物と

収穫に一喜一憂泥軍手

乳癌の遺伝子持つて生きている

猛暑日はコンビニ井の手抜き食

札幌市 富永恵子

疼く胸母の頑張り深い愛
恥の屋根そくつと抜けて強くなり
精米機挫けましたと働かず
白鷺の住んでる里を今気付き

塩竈市 木田比呂朗

お月見は前座ですよと吟醸酒
新米に思いを寄せる生たまご
サブリマで忘れないでと食の秋
机上にはいま4Bと電子辞書

つくば市 嶋本喬

神様へ少し待ってよ雨と風
志摩の朝雨が上がって島が出て
遷宮の檜の香気森満たす
矢三本はるか高所を飛んで行く

東京都 高岡弥生

お金だけ稼げばいいってもんじゃない
子供にも気を使わせて気がつかず
木に立って見ているだけが出来ぬ父
子供なり精一杯に生きている

多摩市 大竹一良

おだてられ調子にのってほぞを噛み
米寿旅つわものどもの夢の跡
無視されてにやりと笑う気味悪さ
欲もなく心静かに歎ふるい

横浜市 長島亜希子

選挙後に何を言いだすあの笑顔
選挙前危うい話伏せてるな
また席を譲られ嬉し情なし
最後かも知れなかったクラス会

川崎市 成田せいじ

バーゲンの詰め放題に主婦の技
海の日休み使って山登り
部屋に吊る風鈴の音で震度読む
「しがみつki」全柔連の得意技

熱海市 三谷圭角

雨上り十国富士を一望す
雨蛙急に跳び出し足竦む
わが家にも猿いのししの注意報
いつの世も浄財集め食いものに

岐阜市 平野あずま

半分こすると一層美味くなる
先生への恋はマル秘の日記帳
溜めるのも使うのも好き生きる欲
漬物がほんのり甘い母の塩

愛知県 樺嶺志

何故ないの着るべき服の在り所
クールビズだらしのなさと紙一重
黒四の遡行懐かしダムを見て
山歩き身の丈思い引き返す

江南市 脇田雅美
夫婦茶碗割れる音聞き顔見合う

灼熱の暑さに耐えた金魚鉢

無人駅話相手は時刻表

腰ひもで結んだ袋非常食

京都市 清水英旺

コンサートの余韻を映す円い月

青畳の匂い清清しつゆの入り

つゆ寒にアールグレイのホットティー

筋一本通して伸びるアガパンサス

大阪市 浅井公平

コーヒーが仲をとり持つ友作り

我が妻が菩薩になつて道を説く

今開けた積りで見ると閉めたまま

燕の巣あれよあれよともう育ち

大阪市 梅里南天

昨日見た映画は死んだ人ばかり

救急車後ろ走るは清掃車

失せしもの不思議な場所に現れる

梅雨明けて油虫めの羽根光り

大阪市 太田としお

野良猫にエサをやる人怒る人

人よりも猫は激しい恋をする

外からは本真のことは分からない

一日の半分かけて物探し

大阪市 岡田元

馴れた道過信が事故を呼び寄せた

またかいな親父の怪我は耳にタコ

いいものも時が過ぎればゴミとなる

喉ごしの泡に酔いしれうさ晴らす

大阪市 前川善之

富士山の景観くずすオスブレイ

我が国の安全神話嘘が行く

平和の花咲かす努力を惜しまない

一人者ラーメンすすり生かされる

大阪市 松田聰

目の色を変えて座席を取る熟女

頼まれた買物メモが見当たらぬ

水やりは忘れないでと木々の声

多すぎても少なすぎてもこまる雨

大阪市 平井露芳

お天道さまおおきに電気売れるやて

牛の子もやつぱり牛乳呑み育ち

富士山や登らず遠くから見とき

平仮名で堪忍してやうつの文字

大阪市 藤田武人

ただいまの声に一家が勢ぞろい

父からのボール息子ヘストライク

疑いはまさかまさかを繰り返す

プロポーズ掻き消したのはクラクション

堺市 増田 わこう

岸和田市 中岡 香代

中流なく上流下流が漂って
親友のつもり盗聴されていた
年金減り白髪と皺が増えました
アベノミクス中小零細素通りし

全身のパーツが緩む更年期
踏まれても立つ雑草で生きている
節電に体力維持と先ず昼寝
イケメンの案山子と話す稲雀

堺市 大和 峯 二

河内長野市 穂口 正子

辛酸を舐めて懐深さ増す
年金者値上げ増税身が沈む
じんわりと地球住めなくする汚染
身が縮む原発を売る愚かしさ

途中下車終着駅が見えそう
私でもいきなりこうじゃなかったの
湯に浸し戻してみたい顔の皺
朝顔が夏の盛りを楽しめます

泉大津市 助川 和美

豊中市 荒巻 夢

「いらつしやい」孫が来るたび出る諭吉
言わればなしたためて爆発妻の乱
母の日にプレゼントして倍返し
ばれたはずなのになんにもいわれない

怒ること多くていまだ歳とれず
花火いくつ上げたかなあと数えてる
佐藤錦横目に取ったアメリカ産
陋屋の母と眺めた窓若葉

貝塚市 石田 ひろ子

豊中市 石橋 優明

舞洲のゆり六甲を借景に
さざえ焼くじゅうじゅう海を恋しがり
サッカード夜を短くするテレビ
ゴミ出して近所の噂拾ってくる

おはようと言つてもマリモ知らんふり
かみつぎと頭突きが得意技でした
黒板のすみに消えない相合い傘
子らの被爆防がぬ国にした無念

河内長野市 大島 友子

豊中市 貝塚 正子

母と同じ顔で鎮座し足のタコ
丁寧な本音包んでご挨拶
今日よりも半歩前への明日が良い
此処一番涙だけには勝てません

笑いすぎなぜか涙でまた笑い
脇にそれ話なかなか戻らない
古アルバム開くとシワのない私
子育てがすんでやれやれ孫まだか

豊中市 源 田 啓 生

藤井寺市 田 付 絹 枝

織女さん隣の席を空けといて
幸せを語るのはいつ今でしよう
八十路来て私の磁場が狭くなる
世界未だ武器の数だけある正義

高槻市 原 洋 志

羽曳野市 藤 原 大 子

暑さ呆け返事が少しずれている
デジタルに背を向け古く生きていく
想い出はスローモーション夏の海
あとがきを先に読むくせかたつむり

高槻市 三 谷 白 黒

枚方市 松 原 保

偉いなあ昔はゴミを捨てず済み
携帯が鳴っているけどどこにある
何事も少し不足が丁度よい
風船を膨らます時齢を知る

寝屋川市 岡 本 勲

羽曳野市 安 本 美 喜

子を叱る母は逃げみち空けてから
工夫したって変りませんと三面鏡
扇風機の風になでられ西瓜くう
世話好きもしつかりしすぎ嫌われる

枚方市 坂 本 ミヨノ

松原市 市 川 雄 太

ぬか漬なす炊きたてご飯紺色に
遠花火七色虹のおびのよう
長電話明るいリズム妻の声
歳ですに鏡を眺め拭くぼやき

涼風を工事の幕が堰き止める
あの亡夫の荷造り上手は祖父ゆずり
半世紀狸出た郷ビルの街
口切れば出るわ出るわのエコ話
子を守る娘ようやく親の顔
重くなる空気に勝てず外に出る
耳日曜良いことだけは聞いておく
適当にと言われ尚更思案する
商いに待ったをかける乱高下
この期待外れない事祈る今
投票に行けば得する人もいる
各紙とも右むけ右の論評だ
麦稈帽父祖伝来の田を守る
紅燃ゆるハイビスカスの蕊つんと
ハーブティ脳に活力湧いて来る
料理番組見るだけ何もしてくれず
高気圧に囲まれ日本蒸し風呂化
約束を飛ばされ心闇に落つ
選挙期間ネットの上も盛りあがる
そうめんに思いが馳せるこの暑さ

松原市 大嶋 信次

ダリの絵か時計が融けた猛暑の日
擬態する蝶よお前もなりすまし
雨空が欲しいときには晴れマーク
身を切ると言うが政党助成金

箕面市 寺井 柳童

打水の効果もうすい照り返し
寄り道も無駄でなかった良い肥やし
神経痛しくしく痛む明日は雨
血迷って老若区別つかない蚊

箕面市 村田 恵子

夫のニュース解説付きの朝ごはん
出てこない名前求めてあ・い・う・え・お
花婿と手つなぐ次は介護かな
京・神戸・大阪一つに括らんで

八尾市 田邊 浩三

がっかりが分つていても宝くじ
三本目呼ぶが女房の返事無し
我が色に染まってくれよ角隠し
背を見せず逝った親父に喜寿告げる

八尾市 前田 紀雄

高気圧ビールの味を引き立てる
未だ浅い人間陶冶の句が出来ぬ
雑学の階段極め進化する
原発の所長の死去が気にかかる

八尾市 山根 妙子

カタカナ語助つ人になる電子辞書
世に連れて優しき雨の少なくて
にが瓜の蔓が行方をさがす朝
口まわり赤青黄の子かき水

大阪府 小栢 こずえ

見方変え良いとこ見つけ生きている
無学でも常識だけは知っている
必要になって気が付く忘れ物
義理がたく路傍の草も種をつけ

大阪府 高木 道子

待たすより待つ身ゆとりの花時計
ムンクの如叫んでいますこの暑さ
選挙区で忘れてならぬ国訛り
ふてぶてし雑草が居座る梅雨の明け

大阪府 西川 冷子

ハグしても孤独癒しは犬嫌う
スポーツライト浴びて花嫁我が家族
暑いですぬひと言で足るご挨拶
梅雨明けた猛暑いきなり攻撃す

大阪府 畑中 節子

耳に手をあてて鎮く立ち話
裏山の実梅成るまま落ちるまま
猫よりはましとばあちゃん鎌を持つ
亡き夫の農業日誌お手本に

神戸市 井上忠貞
待てサイン見落し打ってホームラン

肌はじく水玉光る露天風呂
精神の若さを保つ好奇心
孫達が命のバトン継いでいく

神戸市 松井文香

愛の記憶自由に飛べた若い頃
一呼吸待てば心が風いでいた
田を守る大切さに伝えねば
惜別はいつか誰もが通る道

川西市 日野岡和之

出来不出来結果は問わぬ玉の汗
歩には歩の役目たいせつ一市民
未だ足りぬ知恵と工夫と汗不足
ならぬものやはりならぬと天の川

三田市 雑賀一泉

ヘルシーと今やもてもて麦の飯
ミルクからお墓まであるカタログ誌
貴重品捨てたあとから追っかける
国会での謝り方も芸のうち

神戸市 能勢利子

二世帯を用意されたら気が重い
馬の合う嫁だが同居先送り
やっとな孫抱けると友のメール来る
キラキラを着たらウキウキする私

加東市 岩本美緒子
足に來た耳に來た老い受け止める
せめてもの脳は使えるありがたさ
もしもしと杖に呼ばれてハツとする
銀文字の米寿の祝い面映ゆい

加東市 黒崎美紗子

太陽と土と仲よく生きている
乗車義務シートベルトに慣れて來た
廊下まであの人來てる高笑い
遠く來て法事墓での汗をふく

尼崎市 小池幸子

朝刊が入ってからの一寝入り
散歩兼ね夕方値下げスーパ―に
富士の山世界遺産に沸く日本
ピンコロリ楽に逝きたい終の欲

篠山市 稗島照代

目覚めから時計と共に明け暮れる
居乍らに世界ニュースもわかる日々
朝顔に涼とやすらぎ貰つてる
風鈴も風の情けにすがつてる

神戸市 興水弘

美人横呼び出し声を聞きもらす
痛いところ競いあつてる傘寿会
暑いからカバンの中はタオルだけ
あの笑顔お土産食べてハイおわり

篠山市 藤井 美智子

奈良県 谷川 憲

何するもヨイシヨの声がついて出る
うさぎよりかめは抜け道知っていた
好奇心また学ぶ事一つ増え
大病も知らず百歳知った母

三田市 辻 開子

田辺市 大峠 可動

梅雨最中続く夏日でばて気味だ
同窓会初恋の人見付からぬ
貧乏性捨てられないで物ためる
会うたびに笑いもらえる足運ぶ

三木市 山口 久子

和歌山市 平田 元三

娘等に苦労かけさせ甘えてる
万歩計足が動かず役立たず
本読みも眼鏡のせいで遠ざかり
わが五体故障ばかりで苦労する

奈良市 尾畑 なを江

和歌山市 福呂 秀子

人生は日々選択の連続で
草取りは妻の趣味だと知らぬ顔
人生をやりなおしたいこんな時
立ち見して自分の位置を確める

奈良市 前田 弘恵

鳥取市 大前 安子

躓きも無駄ではないと身にきかせ
ドクターに健康法を尋ねられ
永久に継げ昭和名曲聞き飽きず
子守唄聞かせた息子もう白髪

お願いねあつさり言うて妻は旅
何やかやぶつぶつ言うて日が暮れる
締切り日来た急げ急げと尻叩く
期限切れクーポンもある遺産分け
八月や天狗の鼻も汗をかき
竹トンボ回転軸は人を恋う
指切りが好きで生れて来た一句
感動は我が身と共に華になり
葉の為に作るゴーヤー実はおまけ
演じてるうちに本音も出る舞台
町工場アベノミクスで夜も灯が
安売りを横目で見てる気障な人
原産地確かめ急ぎ元の位置
検診日近くて食事気に懸ける
飛び込んで知る川柳の奥深さ
ベートーヴェン食事の仕度抄らせ
ためらわずしつかりと踏む里の土
砂時計しつかり見張る癖がある
お説教しつかり頭上げて聞く
夫のジョーク囃み切れなくて胃が痛い

鳥取市 近藤秋星

暑い暑いと言つてゐるうちが夏の華
敬老の日は大役が待つてゐる
必ずしも長寿幸せとは言えぬ
12政党の名前あなたは言えますか

鳥取市 谷口回春子

人間の甘い辛い紙一重
年相応心に決めて今日も生き
ひと言で動かす力妻が上
放言が盆に還らず四苦八苦

鳥取市 津村律子

猛暑との試練始まり梅雨明ける
猿にきじ狸がスイカトマト食う
句は出来ずあるは苦しい締切り日
老いの癖何時死んでもと口走る

鳥取市 西根弘康

明日あると思うな今を頑張るぞ
カマドで炊く飯のうまさ懐かしい
昔アイドル今は普通のおばさんだ
ハンディを付けて貰うが矢張りダメ

倉吉市 岡崎美知江

風ばかり読んで力は人まかせ
不器用でハートがうまく動かない
やさしさの中に力のある言葉
あの人がやるなら力出してみる

倉吉市 田中紀美恵

かくれんぼ夕暮れ追るスリル感
ゆつたりと心遊ばせ昼寝する
前ばかり見る首だからけつまずく
どんな首さげて熟れたか毒いちご

倉吉市 中村毅

血圧が上がらぬ程に腹を立て
梔子蕎麦仇のように口に入れ
脳年齢測つてみたいけど不安
ゴキブリが大の大人を振り回す

倉吉市 堀かずこ

本当は感謝してますお父さん
寄りそつて一緒に散歩影ぼうし
惚れました君の笑顔がステキだよ
子が笑うつられて笑う平和です

境港市 中井虎尾

故郷は大砂嵐視界ゼロ
数ミリにつまずきころぶ年となる
荒された風紋夜に風なおす
五線譜に音符で書けぬ乱れ声

米子市 池岡たけし

今一つ渋さ何処かへ加齢臭
老いらくの日々の長さを寝てばかり
激動の世に猫の目は落ち着かず
渋み増す年の積もりも色は褪せ

米子市 小野 鶴子

病む人の強い握手に明日は晴れ
軽はずみ未だ尾を引く胸の傷
人並みの評価まずまず生きている
御手の物俎板たたき夏料理

米子市 加藤 正二

ころんだらそのまま寝たい年になる
老いてから氣付かなかつた夢がわく
人生を笑っていけば成仏だ
百様の健康法に迷いこむ

米子市 田村 周子

変な格好しないで呉れと孫に言う
家族旅行偶にはやつておかなかちや
渋い味だんだんわかる年の功
世の中はすっかり変りスマホです

米子市 野川 宣子

原色を纏った頃は若かつた
家猫に生まれ帰れる家がある
薄墨の和紙のにじみに亡父偲ぶ
熱中症怖くて水が手放せぬ

米子市 湯浅 俊久

体重の二割受け持つビール腹
乾くまで苦勞話を軒に干す
冷めた目で見られて氣付く勘違い
山とある服は昔のMサイズ

鳥取県 飯野 菖子

踏まれても耐えて野の花咲き誇る
躓けば思い出します母のこと
ありがとう命を呉れた母偲ぶ
子供の目輝き見せて未来へと

鳥取県 下田 茂登子

死ぬことは考えていない親雀
尾鰭付け喋って見せるおばあさん
大器晩成信じた息子挫折する
人は皆それぞれ武器を持つて生き

鳥取県 田口 清帆

世界遺産富士山山開きご来光
日銀がアベノミクスを垂れ流す
母さんがスカートはいてどこへ行く
また忘れ記憶をたどる朝のお茶

鳥取県 橋谷 静江

今が良い荒波越えた人生よ
ゆとりある心静かな今日がある
何ごとともひらき直って今日を生き
野仏の道は毎日通る道

鳥取県 松島 恭子

この暗気川柳抜けぬ空しさよ
縫りたい作句出来ない依頼心
母笑顔今更浮かぶ名残り月
梅雨明けて一氣に布団干す仕切り

鳥取県 吉野 いさお

聞けばすぐ人に言いたい人生訓
趣味興味スローライフで色褪せる
穏やかな顔を崩さぬある気骨
一捻り人も胡瓜もある個性

松江市 相見 柳 歩

難しいことを仏が軽くする
爪を研ぐあなたに傷をつけぬよう
ふたりして静かに包む包まれる
君を抱くぼつぼつ足湯から出よう

出雲市 黒目 英 男

二刀流野手も投手も非凡です
新緑の森林浴は気持ちいい
のんびりが性に合ってるマイライフ
なつメロに新たな力もらってる

岡山市 丹下 凱 夫

再利用できるパーツのないわたし
晩酌をするため家に帰っている
電飾のために街路樹植えている
深酒にとっても歪な夏の月

岡山市 永見 心 咲

「燕去り月」南方ばかり向く小芥子
限定品誘い文句にのせられる
空くじはないがティッシュばかり引く
水出しの麦茶妥協を迫られる

岡山市 前田 恵美子
無駄でいいやりたい事をやってみる
時々糸を弛める無駄が要る
肩たたき背中を少し丸くする
幸せは普通の事ができること

倉敷市 安東 モ モ

湯の中で話を聞けば同じ町
帰り道対向車なし道も過疎
知らぬ道ナジも迷っているらしい
蝙蝠が家宅侵入パニックに

玉野市 片岡 富子

人恋し店員相手に饒舌に
「お似あいよ」家の鏡は嘘をつく
自分史に言い分けばかり添付する
野菜作り夫婦の会話支えてる

備前市 森 ふみか

父からのDNAで蟻になる
真ん中のピースが欠けて絵は空ろ
颯爽と歩いた後の筋肉痛
燃え上る妻に戻らぬ火の決意

岡山市 田中 恵

日替りのランチで余る今日の幸
食べるだけ食べても頭動かない
忘れ物今日の行動巻き戻す
寝返りを打ってたのしい夢を見る

竹原市 土井輝恵

唐津市 岩崎 實

モノサシが大分長くなつて来た
いつ迄も同じ価値観続かない
風なのか猪なのか横切った
元気なのは閻魔様の匙加減

広島県 馬場利子

梅雨明けの青葉の風と散歩する
ひたむきに生きる命の響くまで
古時計昭和奏でる音でなる
傷心を洗うコロの風景画

四国中央市 篠原 久

平和ぼけジープの穴ある限り
我が家から見えるケアハウスの施設
縄梯子ユラゆら父の樹にのぼる
T P P 横目に母は鋏を振る

高知市 三谷 待太郎

わが親にジイジバアバと孫仕向け
母に添い右向きに寝た癖抜けず
コレステロールオレをいじめな身内だろ
やつてみたやはり覚えぬ A K B

福岡県 本田 さくら

こぼれ種あいさつをしてピオラ咲く
張り替えたばかりの障子孫破る
川遊び園児かわいいバスタオル
郷愁を誘う童謡由紀さおり

わが足が足でなくなるこのおもい
歩けない立派な歩道あるけれど
生は死の助走に過ぎぬとはいえぬ
福島とどう向き合うか再稼働

唐津市 吉富節子

監督が代わり手にした優勝旗
後半に備え長寿の道をよむ
幕下りて拍手の波がアンコール
老友とお喋り楽し長寿薬

熊本市 杉野羅天

二合目で発作起こした友がいる
絵は昔煙霧にくもる阿蘇五岳
夜の蝶不況で羽根も色あせる
捌きたて老舗のうなぎうならせる

(前月分) 大阪市 平井露芳

大金を積んでも出来ぬ地震予知
三浦さん私は目指す天保山
跳ね上がる泥なく何処もアスファルト
バス以外乗れない路線バスの旅

(前月分) 篠山市 永井 かほる

集会はニュースをきいて持ち帰る
雨ほしい菜園みんなひめいあげ
傘寿すぎ苦手な事が多くなり
初なりのキマリはカラス先ねらう

(馬場利子さんの句は51頁にあります)

英語 de Senryu ②1

麻生路郎句集『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE
(岐阜保健短期大学)

もう未練ないが糸屑とつてやり

*my heart free from her
I take some lint
from her clothes*

子にやつた机で履歴かいている

*writing my re'sume'
on the desk
that I bought my son*

～リバーウィローのため息～（川柳海外普及の立役者、ブライスの著書(2)）

Japanese Life and Character in Senryu（北星堂 1961）

ブライスは川柳書 *Senryu* 出版の 12 年後に、元禄から明治に至るまでの川柳の概観を述べた *Japanese Life and Character in Senryu* を出版します。挿絵も入り 626 頁の大著です。「川柳に見られる日本人の暮らしと気質」と題名にもあるように、川柳にこそ日本人の暮らし方や気質が表現されているとブライスは信じました。

「日本人が川柳を作り上げたが、川柳それ自身もまた日本人を作り上げた。川柳の心は日本人の心の一部です。川柳は日本人自らの生き方です」と、川柳と日本人の関係を述べました。そのような見解を持つ外国人はブライスが初めてでした。しかし彼の著書はほぼ全て英語での記述ですので、当時、一般の日本人読者を得ることは難しい状況でした。「川柳はどんな状況であろうとも世間を真面目に、そしてユーモアを以って捉えようとしします。*Japanese Life and Character in Senryu* では、日本人の暮らしと気質を理解するだけでなく、英語圏の読者が自らの暮らしや気質を見つめることができます。」と述べるなど、ブライスは海外の読者を絶えず意識していました。当時、日本人が誰も気づかないうちに、ブライスは川柳を海外へ紹介していたのです。ブライスは *Japanese Life and Character in Senryu* の中で、「日本人は、川柳を賛美しすぎる外国人とわたしのことを言わないだろうか、いや言うだろうね」とユーモアたっぷりに川柳に囚われてしまった自画像を述べています。

俳風柳多留一二篇研究 3

細井龍夫・伊吹和男

山田昭夫・石川道子

小栗清吾

清 博美

12 座頭の坊またのありたけまたぐ也

細井 手引に反吐や水たまりを教えられても、目が見えないので、必要以上というよりは、思いつ切り股を広げて跨ごうとする座頭の滑稽な様。

そりや／＼と座頭にへどをまたがせる

四二

清 賛。

13 よし町へぞくの行のが末世なり

細井 芳町は堀江六軒町の俚俗名で、親父橋の東詰（日本橋人形町（三）辺り）にあった。ここには十三四歳から十七八歳ぐらいまでの

美少年……主に芝居の舞台子や色子という女形の地下のある少年役者たちに薄化粧をさせ、振袖前髪姿の女装で接客をする陰間茶屋があった。女色を禁じられている僧がそこへ行くのは分かるけれど、一般人がそんな所へ行くなんて世も未だ、というのである。

年寄の橋をわたると若衆也 六一 19

よし町ハ和尚をおぶい後家をたき 安六仁五

よく／＼のはかよし町に三日居る 一八 32

小栗 賛。「末世」という仏語を使ったのが手柄。坊主が行くのも十分末世と思うが……。

清 賛。

14 せき台へなすびをうへる安ぬんきよ

細井 石台は、長方形の浅い木箱の四隅に把

をつけた植木鉢で、箱庭を作ったり、盆栽を植えたりするのに用いた（「日国」）。

風流を解するなど無縁となり、形振り構わなくなつた安っぽい隠居は、その鉢で茄子を栽培している。その生長を見てると結構楽しいもの。しかも実用性が高い。

隠居してはたけ壺枚八百やにし 宝仁七

石川「風流を解するなど無縁となり、形振り構わなくなつた」ではなくて、もともと風流とは無縁、形振り構わぬ安隠居ではないでしようか。

小栗 石川説賛。風流とは無縁の品格のない隠居が「安隠居」で、だからこそ石台に茄子を植えるというバカなことをするのである。

清 同右。

15 香のもの程にさしみを女房きり

細井 女房は刺身を作るのに、無神経にも漬物と同じように、ぞんざいに切り刻んでしまった。これでは折角の高級魚が台無しだ、とは亭主のぼやき。しかし、「私や料亭の板前じゃないわよ」と逆襲されそう。

あさつけをそう切ったのうまくない

明五礼二

あさつけをすなをに切てしかられる

安七仁4
さしミ程に切ていせや壺つつけ 天五天2

山田 厚さもあるのかも知れませんが、むしろ礎のように香の物を切るように刺身を切ったというのではない。一般の家で刺身包丁が使われるようになるのは幕末からで、それまではぶつ切りが普通だった。

小栗 概ね山田説のようなことと思う。もともと刺身は鱈の親類みたいなもので、鱈が魚肉を細かく切り刻むのに対し、もう少し大きく切ったものらしい。主題句もいわゆる刺身状にいていねいに成形しないで、ぞんざいに切ったのだらう。

清 同右。当時の料理方法を考慮に入れる必要あり。

16 身ん上ハたて直ッたがけちなよめ

細井 につきもさつきも行かなくなつて、悩んだ末に持参嫁をめとつたが、その金と呼び水になつて身代が立ち直つたら、今度はお粗末な嫁が鼻につくようになった。人間なんて勝手なものだ。罰当りめ。

身ン代イかなをると嫁が目立なり 一三6
清 賛。

17 手ぬぐいをふんどしにしてつめをとり

細井 銭湯で湯上りに、番台に備えてある鉢を借りて、柔らかくなつた爪を切っている情景であるが、股間丸出しではなく、褌代わり

に手拭を前にあてがっている奥ゆかしさ。
やわらかで爪のとりよひ風呂揚げ生鱈 35
清 賛。

18 みくら紙たくさんが嫁のなり

細井 耳盥は「左右に耳状の柄のついている盥。多くは漆器で菌黒を塗るとき口をすくのに用いる」(『広辞苑』)もので、若嫁はまだ付け慣れないので、どうしても紙を多く使つてしまふ。口をふいた紙が沢山あると、これは嫁の耳盥であるということがわかる。

おはくろをよめすばまつてつて居る

安四松3

耳だらけ嫁るり紺の唾をはき

二四12

小栗 賛。姑はケチなので紙を節約する。

清 賛。

19 しょうとうじ三シの足まで聲ハふみ

細井 東陽山正灯寺は妙心寺末の禪寺である

が、境内は紅葉の名所で、近くにある吉原行きのここつに絶好の場所だった。しかし、入智は立場の弱さから、二の足どころか三の足まで踏んで吉原行きには参加できないで、すこすこと帰るのだつた。

正洞寺むこいへどうもく 二42

智用をもみちの下てかそへたて 一四23
清 賛。「三の足」が見付どころ。

20 かたにぼう左官がおくとせわしない

細井 不明句。左官が「鏝と鏝板を持つと忙しくなる」というのなら分かるが、「肩に棒」となると分からない。天秤棒で練つた泥を運ぶ、というのだろうか。練る所と塗る所とが離れているのか。どうも情景が浮かんで来ない。

小栗 何と比較してせわしないかが問題だが、「物売り」ではなく、「左官が」とすれば、あたりに目もくれず、ひたすら運ぶ動作がせわしないということになろうし、礎稿のいわれるように鏝をつかう動作と比較してということでも、鏝はゆつたりと使うものであるから、つじつまは合う気がする。

清 ばてふりとの比較があるのではなからうか。

同人特集 続・夫婦百景

平成二十一年～平成二十三年
同人吟から 編集部

黙秘権の行使ではなし老夫婦
進む時計遅れる時計夫婦かな

麻生 路郎
橘高 薫風

あんととは喧嘩仲間のまま老いる
警官でないのに妻をオイと呼ぶ
一波乱ありそう妻の生返事
愛しきも煩わしきも妻であり
オイお茶入りましたと妻を呼ぶ
ボクの明日白紙委任で妻に投げ
雲行きが怪しい妻の丁寧語
お似合いの夫婦と言われこそばゆい
病妻に掻いて貰っている背中
嘘泣きで駄目なら居直る妻である
埋蔵金探し疲れた妻の留守
山坂を越えた夫婦にある絆
夫婦げんか折れる潮時みてる猫

中井 アキ
榎本日の出
坂上 淳司
川端 一步
奥村 五月
岩崎 公誠
横山 捷也
野下 之男
丹後屋 肇
宮崎シマリ
伊勢田 毅
久保田千代
緒方美津子

今以て分からぬ妻のお小遣い
妻のぐち一喝できぬ理由がある
まだ妻に言えぬ内緒がたとあり
地球儀を回し亡夫に会いに行く
機嫌よい夫にすぐく腹が立ち
ネクタイを結んであげたのは昔
十のうち一つよいことあり夫婦
いつからか妻が三步も前歩く
若い日の借りを返すと老妻が言う
湿布張る位置でもめてる共白髪
見え透いた嘘も鵜呑みにして夫婦
妻の口たまに抜きたくなる電池
屠蘇祝う夫の写真にも一献

藤井 則彦
安土 理恵
升成 好
三浦 きぬ
鴨谷瑠美子
太田扶美代
山田婦美子
加藤 茶人
山口 高明
高野 宵草
三宅 満子
大川 桃花
森田 麗

ワンカップひとつで夫を飼育する
 ささやかなイベント妻の古希祝う
 吊り橋でひさびさ夫の手の温み
 百八十度違った人とまだ夫婦
 半分こ妻が大きい方をとる
 助手席の妻は寝てるか食っている
 生きがいへ醒めない妻を護る日日
 唯一無二やつぱり夫だと思ふ
 車間距離おいたおしどり夫婦です
 晩酌を付き合ひ弾む凡夫婦
 保険金受取人は妻ばかり
 サープ権妻が握つて離さない
 子をあやすピエロになつてゐる夫婦
 三步下がつて妻は他人の顔をする
 定退後妻のおかかえ運転手
 クシヤミ出る今頃妻は旅の宿
 口臭を注意しあえる夫婦です
 味噌汁がうまいと妻にほめられる
 誤算です肉食系の妻だった
 女房の奏でる音に踊つてゐる
 透明な時を醸して老夫婦

須郷 井蛙
 小谷 集一
 森本 弘風
 大久保のん子
 福士 慕情
 小野 句多留
 安達 忠央
 吉田 弘子
 野口 節子
 山本 半銭
 政岡 日枝子
 星野 育子
 小林 わこ
 吉村 久仁雄
 川崎 ひかり
 熊代 菜月
 田中 章子
 堀 正和
 松川 行男
 小川 注湖
 居谷 真理子

妻の留守迷走する気にもならず
 メモを持ちスーパードビュースる夫
 別々の予定を立ててゐる夫婦
 三食は一緒にスリルありません
 褒めながら充電します老い夫婦
 磨り減つてやつと歯車合う夫婦
 節約を目指す夫が小うるさい
 妻病んでチームワークが狂い出す
 ずれ少しあつて夫婦は穏やかに
 土壇場にいつも役立つ妻の智慧
 髭生やしたいけど妻が許可しない
 うきうきはするがはてさて妻の留守
 妻に客僕は放牧されました
 妻が手を差し出す時の静電気
 よい垣根あつて夫婦の仲もいい
 ままごと財布ちやつかり妻が持つ
 日本語が下手な夫婦でよく揉める
 究極のマジック老婆の厚化粧
 ピンチでも妻には言えぬことがある
 見て見ぬ振りお互い上手くなりました
 言葉尻捉えて妻を巴投げ

坂本 蜂朗
 西村 益子
 倉益 一瑤
 徳山 みつこ
 永原 昌鼓
 升成 好
 原田 すみ子
 古川 奮水
 坂 裕之
 山口 光久
 早川 遯行
 高瀬 霜石
 柿花 和夫
 鴨谷 瑠美子
 村上 ミツ子
 西口 いわゑ
 小谷 集一
 岩本 浩二
 梶谷 和郎
 田浦 實
 村上 直樹

なんとこんなにあなたが死ぬと保険金

私を妻にしたのが不覚です

ちよっとだけ多目に飲める妻の留守

猫も夫も同じ口調で叱る妻

妻の出す方向指示器無視出来ず

家計簿は夫の手前付けるだけ

延命は不要と妻に書かされる

まだ生きるつもりで買った夫婦箸

夫婦共おまけ人生枯れぬよう

コンビニに夫あずけて女旅

今やもうあなたと呼んでくれぬ妻

沈黙の我慢比べは妻の勝ち

実印を預かりますと妻が言う

夫より電化製品よく喋る

夫の背に三歩下がって指図する

夫が几帳面しすぎて胃が痛い

新聞へ夫婦で学ぶ別のこと

この歳で連れに説教しています

ばらばらの夕食二人っきりなのに

朝めしの旨い夫婦で喜寿傘寿

妻の肩揉んでポイント溜めてます

寺川 弘一

源田 八千代

大隅 克博

水野 黒兎

菊地 政勝

小川 てるみ

三浦 強一

太田 昭

笠井 欣子

岸本 孝子

村上 玄也

藤井 文代

奥 時雄

藤岡 りこ

金川 宣子

永田 俊子

亀岡 哲子

古今堂 蕉子

矢倉 五月

北野 哲男

山田 耕治

あんたより一日遅く逝くという

鯛焼きのあんこのような妻である

ブランドの似合わぬ妻とフルムーン

探し物妻は手品のように出し

輝いた頃は無口な妻でした

寄り添って歩いたことのない夫婦

姿見が夫婦百景見つづける

どことなく妻に似てきた家の猫

放し飼いしても夫は家にいる

赤い糸何度も結び替えて今日

近頃は妻のカーブがよく決まる

雨漏りを楽しむ余裕有り夫婦

大概のことなら妻の言うとおり

無印良品夫婦茶碗は割れぬまま

婿が着る亡夫を偲ぶ下駄浴衣

振りむいてときどき妻を確める

触れない妻に代わって海鼠切る

病名は夫在宅症候群

妻に借り数え切れないまだ借りる

フラダンス妻きらきらと今日も留守

好物をしばらく出さぬ妻の乱

初山 隆盛

岡本 昇

渡辺 富子

樋口 輝夫

鶴田 遠野

夏目 一粹

大石あすなろ

雪本 珠子

江見 見清

福本 英子

坪井 孝一

古久保和子

片山かずお

山本希久子

上垣キヨミ

伏見 雅明

成田 雨奇

高島 啓子

竹口 清信

杉本 義昭

俣野登志子

子供はかわいい

小栗清吾

本誌の読者の多くは、かなり以前に子育てを終えられた方々ではないかと思えます。そこで今回は、「そういうえば、うちの子もそんなふうだったよねえ」という、ちよつぱり懐かしい句をご紹介します。江戸時代でも、子供のやることは同じです。

男の子裸になるとかまらず

三三

「とかまる」は「つかまる」に同じ。着替える時などに裸にすると、子供はなぜかはしやいで走り回り、とくに腕白な男の子はなかなかつかまえられなかったりします。

蚊帳釣つた夜は珍しく子が遊び

一四

夏になって初めて蚊帳を釣つた晩は、子供が面白がつて出たり入ったりします。「蚊が入るからやめなさい」と叱つたくらいでは、子供の興奮は収まりません。

面白がつて子のくぐる土用干し

一九

いまでは全く見かけませんが、昔は夏の土

用に衣類や書籍を外に出して、日に当て風を通して虫除けにしました。細引きに着物が掛けてある下を、子供が面白がつてくぐっている光景です。きやつきやつという声が聞こえてくるようです。

片々は敷居の外に子の草履

五〇

外から帰ってきた子、勢いよく草履を脱いで「お腹減つたあ、何かない？」と上がってきます。見れば、草履の片つ方は敷居の外に飛び出しているありさまで。でも、元気なのが何よりです。

紙雛に角力とらせる男の子

二七

紙雛は、千代紙を折つて作つた一对の内裏雛です。女の子が雛壇に飾つておいたのを、男の子が取つてきて、向かい合わせに組ませ、畳を叩いて勝負させます。いたずら坊主のやりそうなことです。

わんぱくさ金魚を買つて料るなり

三三

金魚の解剖をしたのです。これも男の子の仕業でしょう。そういうば、カエルやミミズなどにいろいろ残酷なことをした記憶がありますね。

子の使い帰るとなだり事を言い

一五

親に頼まれてお使いに行ってきた子供、帰るやいなや「お駄賃ちょうだい」。昔はよく

お使いに行かされたものですが、近頃の子供はどうなのでしょう。

二三日歯の抜けた子は恥ずかしい

傍初

乳歯が抜けた時は、子供心にも恥ずかしい。でも、それも二、三日のことで、すぐにすっかり忘れて、歯のない口を開けて笑っています。いい句ですね。

子の月代にしゃべり人が三人

一七

子供が月代を削るのをいやるので、家族総出でしゃべりまくつてご機嫌をとる様子です。この時はかりは、姑も小姑もなぜか協力的だったりします。現代でも、写真屋さんでよくそんな光景を見かけますね。

すねた子はつかまえ所に困るなり

七二

すねた子は壁からやつとひつpegし、すねた子は扱いにくい。固く縮こまつて抵抗する子もいれば、壁に張り付くようにして動かない子もいます。なんとか壁からひつpegがしても、ご機嫌が直るまでにはしばらく時間がかかりそうです。

鬼ヶ島まで行かぬうち寝てしまい

八二

桃太郎の話しながら子供を寝かしつけていると、まだ鬼ヶ島まで行かないうちに眠ってしまったのです。近頃の子供は、桃太郎の話聞くでしょうか。

愛染帖

新家 完司 選

大阪市 谷口 義

おばあさんばかりで板揚げない

(評)親戚中を見回しても残っているのはお婆さんばかり。葬儀屋なら台車のようなものに乘せてくれて手間要らずだ。……

藤井寺市 鈴木いさお

GバンTシャツまだスキップも踏める古稀

(評)恰好は若者と同じでスキップだって出来る。が、何をしてもいささか無理があり、似合っていないのは自分でも分かっている。

鳥取県 石谷美恵子

ややこしい村だ同姓過半数

(評)地方には未だ残っている村社会。同姓の家ほとんどが縁戚。他所者には分からないが、本家や分家などなかなかややこしい。

池田市 上山 堅坊

スクリーンの余韻に浸る独り酒

(評)映画館の後の居酒屋か、テレビの後の食卓か。いずれにしても、酒はうまいが感動を語り合う相手がないのが少し寂しい。

和歌山市 古久保和子

銭湯の富士のお山もおめでたい

(評)めでたく世界遺産になった富士山。見慣れた銭湯のタイル絵も何やら誇らしげである。お風呂屋さんさんも嬉しいことだろう。

三田市 福田 好文

日めくりと一升瓶は早く減る

(評)酒は確実に毎晩減って行く。日めくりはつい忘れて三日ほどまとめてめくるが、どちらもアツという間になくなってしまふ。

大阪市 柴本ばつは

ぼけたらアカン輪ゴムときどき飛ばしあう

(評)この「輪ゴム」、相手を刺激する言葉とも読めるが、本物の輪ゴムのほうが面白い。はんやりしているほったにバチン！。

米子市 生田 和之

厄介をこつそり招く招き猫

(評)招き猫が招いてくれるのは、客や金運や子宝。しかし、厄介を招くこともあるというのだ。確かに、潰れた店にも招き猫は居る。

豊中市 松尾美智代

寝てあの世起きてこの世を徘徊す

(評)寝ているときは天国らしき所をうろろ。起きては近所をうろろ。この「夢と現」の区別がつかなくなってくると危ない。

安来市 原 煩惱児

消息は死んだ死んだのことばかり

(評)まことに残念だが、そのような歳にな

ったということだろう。順番が巡って来るまで、現世をゆつくり楽しもうではないか。

河内長野市 山岡富美子

武装する黒い日傘にサンクラス

息継ぎは地下街猛暑日の皆

大阪市 奥村 五月

誕生日残る赤飯もう三日

酒あれば気遣いなどはいりません

岡山市 工藤千代子

「暑いね」と100回言うつと夏終わる

わたくしの背中目もある耳もある

堺市 加島 由一

親切にされるとすぐに恋をする

酒臭くにんにく臭く生きてます

大阪府 米澤 俣子

今年また越せるだろうかこの猛暑

夫源病 夫は何も理解せず

高槻市 片山かずお

は何をしたかな今日も暮れてゆく

検診を受けてないからまだ無病

富田林市 中村 恵

スクランブル交差点を直角に曲がる

身の内に隠し続けている狂気

札幌市 三浦 強一

川柳はいいな本音を吐けるから

結論がうつすら見えてきた八十路

長岡京市 山田 葉子

雑用が好きでホイホイ動いてる

今治市 渡邊伊津志
名案が風呂で浮かんで風呂で消え

瀬戸内市 東横ますみ

羽根生やす日も通院もある暦

鳥取 夏目 一粋

歩かねば歩けなくなるから歩く

三田市 上田ひとみ

あの頃はうちわ風などくれた夫

河内長野市 坂上 淳司

愛妻の病名何と夫源病

西宮市 牧渕富喜子

ごはんふつくら今日は沖縄慰霊の日

雨上がる雀と子等の声戻る

三田市 北野 哲男

機首天へ金婚祝い乗せて行く

呼名には大阪訛りあつてよし

松山市 神野きつこ

子育てが終わり昭和史読んでいる

相続はしつかりもらう約束で

京都市 都倉 求芽

暑くなると雲までみんないなくなる

ヒマワリも気をつけない熱中症

生駒市 飛永ふりこ

タブレットからのお言葉まず慣れよ

筑うどん素顔解け合う仲間達

泉佐野市 稲葉 洋

黄点滅気をつけないはれ次の色

全身にイエローカード内科外科

唐津市 吉富 節子
町内に駐車場増え人が消え

鳥取市 土橋はるお

北海道から暑中見舞いを頂いた

和歌山市 楠見 章子

街灯が滲んで見える小糠雨

大阪市 高杉 力

どうやって捌く土産の赤なまこ

尼崎市 春城 年代

昔々の山友なりし計が届く

三田市 堀 正和

蹴球と言った頃には地味だった

会葬は一本締めにして欲しい

西宮市 緒方美津子

芸の道拍手の力底知れぬ

悪いことしている人は休まない

弘前市 高瀬 霜石

なにもないですがとスツと酒・肴

徳利は振るもの夜は更けるもの

大阪市 宇都満知子

くよくよも明日になれば薄れてる

今の歳慣れた頃には一つ増え

堺市 奥 時雄

肩すかしでも懸賞は同じだけ

虎ファンと決めて運ちゃんよく喋る

八尾市 宮崎シマ子

施設入りちらっと娘に言うてみる

暑中見舞いに来て夕方まで喋り

神戸市 山口 光久
幅広い人脈築く縄のれん

鳥取市 春木圭一郎

おしまいはやはりジョッキを持っている

堺市 遠山 唯教

蜜声のマイクが酔いを加速する

枚方市 寺川 弘一

酔いどれて居酒屋ラリーしなくなる

加西市 中川 修

2泊して浴びたビールのツケが来る

香芝市 大内 朝子

そうめんを茹で始めたら鳴る電話

大阪市 江島谷勝弘

栄光をもたらしたのはシエルパたち

三田市 田中 章子

お料理を好きにならねばあほらしい

紀の川市 辻内 次根

よく寝たと言わないそんな歳になる

倉吉市 牧野 芳光

熱中症にならぬ程度にムチ入れる

橿原市 居谷真理子

私だけあだ名をつけてもらえない

京都市 坪井 孝一

うろろうとするから逃げる青い鳥

和歌山市 柏原 夕胡

気分ほど若々しくはない見た目

鳥取市 高浜 勇

人こみが体力低下自覚させ

シドニー

坂上りの子

絵のモデルして脱水でしほむ花

堺市

村上 玄也

効能に個人差ありと言うサブリ

島取市

倉益 一瑤

味方だと勝手に思うことにする

吹田市

太田 昭

葬列が脳天をゆく八月忌

堺市

矢倉 五月

お役目があつて雑草かて生える

神戸市

奥澤洋次郎

国会は大阪弁でしまへんか

大阪市

津守 柳伸

汗一斗カレーうどんと格闘中

奈良市

辻内げんえい

強気な妻とバランスとつて内気です

松江市

三島 崧丘

夏の夜は膝枕より水枕

八尾市

高杉 千歩

肥後守不易糊老いの一徹

枚方市

伊達 郁夫

通訳に間がずれている笑い顔

海都市

堂上 泰女

虎の子を食うクーラーが有り難い

亀岡市

井上 森生

喜寿前に激痛攻めで極楽遠のく

島取市

山下 節子

メールだめスマホもだめで電話する

明石市

桃谷 和郎

置き去りの傘がしょんぼり主を待つ

東大阪市

北村 賢子

行かなあかん所が増えるから死なん

つくば市

嶋本 喬

つむじ風竜巻の影よみがえる

島取市

斉尾くにこ

ひとりでも孤独でいると限らない

米子市

加藤 正二

独り者猛暑続いて冷奴

大阪市

大川 桃花

前籠の犬走つてる貌になり

羽曳野市

吉村久仁雄

半分は妻が創った僕である

藤井寺市

鴨谷瑠美子

昔集めたマツチを持って墓参り

橋本市

石田 隆彦

温暖化に緑の帽子かぶるビル

寝屋川市

富山ルイ子

三十度の部屋で我慢をする娘

河内長野市

松岡 篤

ローカル線飛行機よりも高くつき

島取市

西川 和子

彼岸への予定も無いがもう近い

大洲市

中居 善信

死ぬるほど痛いと思う向こう脛

和歌山市

福井 菜摘

見栄はって歩けばすぐにくたびれる

芦屋市

黒田 能子

出しそびれそのままになるお詫び状

岡山市

丹下 凱夫

宝くじ気合いを入れて買いました

堺市

近藤 治子

病院へ行く日はちよつとおしゃれする

高槻市

初代 正彦

今ひとつ気乗りしないと拭く眼鏡

和歌山市

玉置 当代

生き恥を晒すと楽になつてくる

島取市

山下 凱柳

草深い田舎を終の棲み家とす

羽曳野市

宇都宮ちづる

イヤリング片方だけが增えた箱

堺市

増田わこう

街ゆけばステッキ持つ人多くなり

大阪市

栃尾 奏子

七色の人は信用出来ません

寝屋川市

岡本 勲

呆け防止妻とときどき政治論

岡山県

田中 恵

バラバラと雨と間違ふ棕櫚の風

弘前市

岡本 花匠

長電話確かめ尽きぬ妻と友

倉吉市

山本 玲子

楽しみのひとつひとつが宝もの

唐津市

坂本 蜂朗

大阪市 伏見 雅明
オゾン層破れ人間天日干し

神戸市 白川 淑子
きれいだよ朝の鏡に言い聞かす

倉吉市 中村 毅
福島を過去形にする推進派

藤井寺市 若松 雅枝
浴衣なら昔の柄も新しい

香南市 桑名 孝雄
ピンコロか要介護かは神次第

尼崎市 小池 幸子
下校とき児童に会えた日の至福

和歌山市 磯部 義雄
カーナビも顔負け妻はよく喋る

河内長野市 谷 久美子
亡母に手を借りて覚えた味噌作り

川西市 山口 不動
猛暑日や今日は一日お留守番

神戸市 松井 文香
熟れた西瓜試食今年はアライグマ

松江市 相見 柳歩
叩かれて育った親は子を叩く

鳥取県 大塚美代子
シャボン玉無理な高さを飛びたがる

大阪市 太田としお
絶滅にならぬ間に鰻屋へ

高槻市 島田千鶴子
土用まで待てず特価のうなぎ買う

高知市 小川てるみ
心にも鍵をかけた外したり

大阪府 初山 隆盛
千鳥足に行き届かないバリアフリー

加東市 黒崎美紗子
飽きもせず平凡な日日生きている

塩竈市 木田比呂朗
張り切った脳トレグッズ昼寝する

大阪府 畑中 節子
たっぷり汗をかせる粗大ゴミ

篠山市 佐々木 勇
日の丸を振った路線に残る声

鳥取市 有沢せつ子
ありがとだけはその場でちゃんと言う

和歌山市 喜田 准一
ぶりっ子も精々四十路半ばまで

堺市 内藤 憲彦
Tシャツを買うのも妻の診断書

大阪市 阿野壽美子
おめかしで時間かけ過ぎ遅刻する

鳥取市 谷口回春子
子守唄時代遅れと笑われて

豊中市 池田 純子
拭かんとこ小さな手形窓飾り

堺市 荻野 像山
一寸ずるしてコンビニで間に合わす

和歌山市 上田 紀子
あの世でもあるのだろうか死ぬ思い

高知市 小澤 幸泉
夢の中一句浮かんで眼が覚める

神戸市 能勢 利子
私の行く道老母が歩いてる

鳥取市 近藤 秋星
耳鳴りでない本物の蝉の声

三田市 尾崎 一子
ピアホール歳を忘れたアロハシャツ

河内長野市 渡邊 修
誰にもやらん溜めた小金は使い切る

東かがわ市 川崎ひかり
ソーメンは本当は手間の要る料理

堺市 羽田野洋介
一人前とって分け合う老いふたり

三田市 上垣キヨミ
風邪引いた言えばだあれも寄りつかぬ

広島市 岸本 清
ゴキブリが出て家中が活気づく

鳥取県 岩崎 和子
足が攀るこんなに温くなったのに

奈良市 大久保真澄
考え過ぎて固まっているロダン

高槻市 左右田泰雄
迷い道答えさがしに引き返す

和歌山市 土屋起世子
老眼鏡小さな幸を探してる

米子市 高田 振作
好きになる妻とタイプが違う女

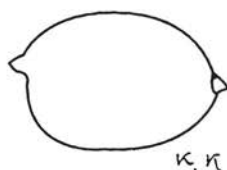
共選欄

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 724句)



「しつかり」 竹 治 ちかし 選

もう仕事ないがしつかり飲んで食う
 しつかりと遺伝子継いで普通の子
 ハーケンを打って手応え確かめる
 この舌にしつかり馴染む妻の味
 効能書き隅にしつかり但し書き
 しつかりとすぎた紐がほどけない
 後期高齢しつかり余命受けとめる
 しつかりと食べて楽しく往く余生
 しつかりと調べたはずでこの程度
 黙っとこしつかり聞いた内緒事
 しつかりとした字だ母は大丈夫
 しつかりと貯めているから寄ってくる
 しつかりと風読んでいる次男坊
 その日までしつかり生きていくつもり
 しつかりと住所氏名はまだ言える

三田市 北野 哲男
 米子市 後藤美恵子
 紀の川市 辻内 次根
 三田市 久保田千代
 和泉市 横山 捷也
 松山市 宮尾みのり
 京都市 清水 英旺
 和歌山市 玉置 当代
 三田市 雑賀 一泉
 高槻市 島田千鶴子
 三田市 田中 章子
 紀の川市 北山 絹子
 和歌山市 武本 碧
 芦屋市 黒田 能子
 岡山市 工藤千代子

「しつかり」 大内 朝子 選

しつかりと大地を掴む屋久の杉
 最後かとしつかり握手クラス会
 自分に喝暑さに負けてなるものか
 しつかりとついた脂肪と格闘中
 父が逝き急にしつかりした息子
 左遷地の情にしつかり根をおろす
 妻の後黙って蛇口締め直す
 しつかりとし過ぎお一人様でいる
 半夏生しつかり食べてよく眠る
 しつかりした方が損する三次会
 しゃんとしてグツと胸張り生きなはれ
 しつかりも過ぎれば人に疎まれる
 舵取りの巧い二番手いる安堵
 しつかりがだんだん負担弱音吐く
 しつかりの自負に潜んでいる迂闊

田辺市 岡本 昇
 豊中市 水野 黒兎
 枚方市 小林 わこ
 大阪市 内田志津子
 奈良市 阿部 紀子
 神戸市 山口 光久
 唐津市 坂本 蜂朗
 海田市 堂上 泰女
 岡山県 田中 恵
 堺市 加島 由一
 大阪市 枋尾 奏子
 高槻市 片山かずお
 堺市 矢倉 五月
 大阪市 笠嶋 恵美
 八尾市 新海 信二

しっかりと利かせる妻の隠し味	広島市	岸本 清
しっかりと我が家が塗り替える	鳥取県	石谷美恵子
しっかりと自分を守る金バッジ	宇部市	平田 実男
しっかりと妻に手綱を握られる	大阪市	板東 倫子
堅実に生きてしっかりと踏み大地	出雲市	岸 桂子
しっかりと自分の足で生きている	西予市	黒田 茂代
しっかりと根を張り父祖の地に生きる	篠山市	酒井 真由
しっかりと歩けるうちに杖を買う	池田市	栗田 久子
左遷地の情にしっかりと根をおろす	神戸市	山口 光久
しっかりと生きた証が今にある	シドニー	坂上のり子
しっかりと者になろうと草臥れる	西宮市	亀岡 哲子
しっかりとピエロを演じ踊り切る	米子市	生田 和之
しっかりと食べて居るか娘を案じ	鳥取県	大塚美代子
遺産分け妻がしっかりと主張する	奈良市	岩本 浩二
しっかりと者と言われ仮面が外せない	鳥取市	倉益 一瑠
抜かり無く年金で引く保険料	米子市	竹村紀の治
結び目もしっかりお見せする手品	河内長野市	梶原 弘光
広辞苑しっかりと読んでいる余生	枚方市	寺川 弘一
永遠の契りしっかりとった筈	鳥取市	吉田 弘子
しっかりと度合いが違う爺と婆	鳥取市	加藤 茶人
しっかりとの方が損する三次会	堺市	加島 由一
しっかりとメモしたメモが見当たらぬ	箕面市	寺井 柳童
九条を守りしっかりと子につなぐ	出雲市	伊藤 玲子

B29の音はしっかりと覚えてる	河内長野市	坂上 淳司
キューブを回し脳をしっかりと立て直す	吹田市	太田 昭
しっかりとし過ぎた親で嫁がない	鳥取市	永原 昌鼓
母病んで姉妹しっかりと手を繋ぐ	和歌山県	森下よりこ
しっかりと倒れんように行く見舞	西宮市	亀岡 哲子
しっかりとむかしは女してました	米子市	政岡未延子
紫外線しっかりとカットして遊ぶ	奈良県	渡辺 富子
しっかりと甘えておく幸せの今	藤井寺市	太田扶美代
秋風にしっかりと答え出し実る	泉佐野市	稲葉 洋
自分史にしっかりとこびりつく手垢	富田林市	山野 寿之
しっかりとせよとライバルの手を握る	鳥取市	土橋 螢
補聴器で聞いておりますラブコール	富田林市	中井 アキ
しっかりと見届けたいな復興を	三田市	足立つな子
効能書き隅にしっかりと但し書き	和泉市	横山 捷也
その日までしっかりと生きていくつもり	芦屋市	黒田 能子
おばちゃんの得意しっかりと値切らはる	大阪市	津村志華子
介護する現場しっかりと子に見せる	大阪市	原田すみ子
しっかりと生きた父の柩が軽すぎる	藤井寺市	鴨谷瑠美子
わたくしを神はしっかりと見ていない	松江市	石橋 芳山
しっかりと貯めているから寄ってくる	紀の川市	北山 絹子
しっかりと覚える町の避難場所	寝屋川市	森 茜
いざ出番練習通りやればいい	大阪市	坂 裕之
火傷せぬ距離しっかりと見定める	茨木市	藤井 正雄

しっかりと指切りしたが未だ他人

河内長野市 松岡 篤

わたくしを神はしっかりと見ていない

松江市 石橋 芳山

しっかりと泳がされてる射程距離

和歌山市 北原 昭枝

ライバルもしっかり拳握ってる

出雲市 多久和敬子

しっかりと尾を振っておく犬の義理

富田林市 片岡智恵子

しっかりと生き五七五の本を積む

松江市 松本 文子

しっかりとフオローしている鍋のふた

富山市 有澤 嘉晃

かあさんの愛しっかりと植えておく

鳥取県 斉尾くにこ

しっかりと生きた父の柩が軽すぎる

藤井寺市 鴨谷瑠美子

しっかりと呆けない工夫して暮す

大阪府 小栢こずえ

口だけはしっかりと紙オシメ

大阪府 桑田ゆきの

奥さんがしっかりとるから飲める

堺市 澤井 敏治

根回しでしっかりと釘を刺して置く

和歌山市 喜田 准一

知らぬ間に子はしっかりと世を渡り

河内長野市 穂口 正子

好きなひとしっかりとつばをつけておく

八尾市 村上ミツ子

口だけがしっかりとてよく揉める

高槻市 片山かずお

許したがしっかりと釘をさして置く

鳥取県 伊藤 寿美

目減りする命しっかりと抱きしめる

紀の川市 宇野 幹子

わたし色ボリシーしっかりと抱いている

和歌山市 堀 富美子

秀 句

二度と来ぬ今日をしっかりと生きておく

大阪市 小谷 集一

しっかりとむかしは女してました

米子市 政岡未延子

ふる里の四季をしっかりと刻む風

弘前市 福士 慕情

クレームにしっかりと者が出て波紋

西宮市 片山 忠

しっかりとせんとホームへ入れられる

三田市 上垣キヨミ

先ばかりしっかりと読んで蹴躓く

和歌山市 土屋起世子

しっかりと者もアキレス腱をもっている

大阪市 太田としお

哲学をしっかりと抱いたあばら骨

枚方市 海老池 洋

しっかりとせい昨日の続き生きて行け

長岡京市 山田 葉子

しっかりと尾を振っておく犬の義理

富田林市 片岡智恵子

忠告をしっかりと囁んで明日の糧

池田市 上山 堅坊

零れ種しっかりと花を咲かす意気

高槻市 綿山美斗子

にんげんが好きでしっかりと丸を描く

姫路市 古川 奮水

美しい日本語しっかりとつなぐ

豊中市 江見 見清

しっかりと遣伝子継いで普通の子

米子市 後藤美恵子

トイレだけ洋式あとはみな和式

弘前市 高瀬 霜石

ふる里の四季をしっかりと刻む風

弘前市 福士 慕情

赤ちゃんの頃からでかいほうを取る

和歌山市 柏原 夕胡

手応えがしっかりとあった手の温み

吹田市 木下 敏子

筆勢に病癒えたと知る便り

札幌市 三浦 強一

しっかりと守って欲しい遺書を書く

枚方市 寺川 弘一

しっかりと根付いた苗が明日掴む

和歌山市 上田 紀子

秀 句

呱呱の声大地をつかむ足であれ

橿原市 居谷真理子

二度と来ぬ今日をしっかりと生きておく

大阪市 小谷 集一

しっかりとした字だ母は大丈夫

三田市 田中 章子

「呆 然」

村上玄也選



最終便のテールランプが逃げてゆく
ひったくりと気づくさられた鞆
カーナビに連れて行かれた行き止まり
鑑定に出さねば家宝だった壺
鏡見て呆然歳は歳のまま
乱高下ただ呆然と市況欄
誇らしく車内化粧の女の子
被爆量自分で管理せよと言う
呆然としてたら老いが威張りだす
またしても昨日と同じ忘れ物
竜巻にアツと言う間に飛ぶ車
雑踏に父と腕組む女を見る
官僚の本音に口が開いたまま
いきなりにマイク向けられ出ぬ言葉
呆然と子の食べっぷり見る財布
振り込んでから呆然と立ち尽くす
旅先のロッカーのキー持ち帰り
徘徊の妻バトカーで届けられ
グランドキャニオンただ呆然と立ち尽くす
呆然とスカイツリーを見て帰る

香南市 桑名 孝雄
大阪府 米澤 淑子
鳥取市 福西 茶子
南あわじ市 萩原 狸月
札幌市 三浦 強一
河内長野市 山岡富美子
西脇市 七反田順子
和泉市 横山 捷也
大阪府 小栢こずえ
横浜市 菊地 政勝
大阪市 奥村 五月
貝塚市 石田ひろ子
鳥取市 深澤千恵子
大阪市 原田すみ子
京都市 榎本 宏子
紀の川市 宇野 幹子
堺市 奥 時雄
弘前市 福士 慕情
池田市 上山 堅坊
松江市 石橋 芳山

外国に原発を売る人が居る
騙された方がバカだと言いつつ
歓声が悲鳴に変わる負け試合
呆然は私に当る白羽の矢
女子会の話と酒に恐れ入り
椅子の向き替わる途端に威張りだす
呆然と立ちつくすのも手の内か
おとなしくしろと後期の印押され
呆然と見ていた鳩の出る帽子
力作の絵に孫がらくがきをした
呆然と白い記憶の中にいる
呆然のあとで怒りが沸き上る
佳
すぐそこにドドンと立っている彼岸
呆然とダムの肋を見る日照り
丹精を一夜で猪に荒らされる
淑女から魔女に変身する凄み
ネジ一つ抜けて積み木の城墮ちる
人
呆然から覚めて喪服の用意する
地
信じてた人にもあった裏の顔
天
気がつけば御輿の上になだ一人
軸
目の前で突然起きた自爆テロ

堺市 澤井 敏治
大阪市 坂 裕之
鳥取市 岸本 宏章
茨木市 藤井 正雄
泉佐野市 稲葉 洋
和歌山市 喜田 准一
鳥取市 春木圭一郎
三田市 堀 正和
藤井寺市 鴨谷瑠美子
和歌山市 柏原 夕胡
奈良県 渡辺 富子
唐津市 坂本 蜂朗
弘前市 高瀬 霜石
豊中市 水野 黒兎
三田市 北野 哲男
香芝市 大内 朝子
和歌山市 武本 碧
堺市 矢倉 五月
松江市 三島 淞丘
橿原市 居谷真理子

「引きずる」

山 本 玲 子 選



寝不足を引きずっている肌の荒れ
 栄光を引きずり名刺捨ててない
 失敗を引きずる歳はとうに過ぎ
 自分史は過去を引きずることばかり
 引きずって白髪頭になりました
 断ち切れぬ酒で引きずる血糖値
 良心が引きずっている損と得
 重い靴引きずり通す父の貨車
 引きずると断りにくくなる返事
 昨日のこと引きずらないと空を見る
 心地よい風に引きずられて散歩
 喧嘩せぬように引きずる既往症
 どこまでも引きずる小さな好奇心
 トラウマとなって引きずるきのこ雲
 重い荷をまだ引きずっている戦禍
 悲しみを引きずらないで笑ってね
 デデ虫の引きずった後追っている
 後遺症引きずりながら花は咲き
 開店の長蛇の列へ引きずられ
 引きずって自論持ち込む実力者

大山市 金子美千代
 和泉市 横山 捷也
 和歌山市 松尾 和香
 富田林市 山野 寿之
 河内長野市 山岡富美子
 河内長野市 谷 久美子
 橿原市 居谷真理子
 青森市 松山 芳生
 藤井寺市 鴨谷瑠美子
 鳥取県 岩崎 和子
 豊中市 松尾美智代
 紀の川市 辻内 次根
 海南市 小谷 小雪
 堺市 澤井 敏治
 松江市 三島 淞丘
 東大阪市 北村 賢子
 八尾市 宮崎シマ子
 吹田市 木下 敏子
 大阪府 桑田ゆきの
 倉吉市 岡崎美知江

引きずった会議に酒という薬
 引きずった靴が知ってる汗しずく
 読み終えた本の余韻にひきずらる
 引きずって歩く足音母に似る
 パージンロード父の引きずる娘への愛
 足首に引きずる過去が纏いつく
 栄光の影を引きずる父の自負
 引きずった足で稼いだ棒グラフ
 引きずると損する事を知らなんだ
 引きずるとまた失敗が生まれます
 済んだ事引きずるまいと顔洗う
 進化論引きずっている尾骶骨

佳

いつもでも引きずるでない泣くでない
 パーゲンの札を貼っても売れぬ首
 栄光の過去引きずっている尻尾
 アルバムに引きずる過去も貼ってある
 青春を引きずりながら生きている

突然の別れ引きずる擦過傷

文明が引きずる少子高齢化

二枚舌見てから不信まだ続く

引きずらぬ運命線は掌の中に

札幌市 小沢 淳
 紀の川市 楠原 富子
 大阪府 畑中 節子
 大阪府 米澤 俣子
 和歌山市 武本 碧
 宝塚市 丸山 孔一
 貝塚市 石田ひろ子
 鳥取市 岸本 宏章
 鳥取市 土橋 螢
 生駒市 飛永ふりこ
 高槻市 初代 正彦
 札幌市 三浦 強一

鳥取県 石谷美恵子
 弘前市 高瀬 霜石
 三田市 北野 哲男
 枚方市 寺川 弘一
 鳥取県 斉尾くにこ

松江市 石橋 芳山

出雲市 竹治かし

鳥取市 福西 茶子

「ジョーク」

小 川 注 湖 選



病床の友のジョークにほっとする
寝たきりへジョーク楽しく話しかけ
どぎつくて重いジョークは嫌われる
大阪弁軽いジョークにある温み
度を越したジョーク連発座が白け
ジョークでも触れてならない傷がある
ジョークかて過ぎるとソッポ向かれます
本心かジョークか気になる言葉尻
ジョークだと解っていても気に障る
平和呆けしやれにもジョークにもならぬ
風俗業勧めてジョークとも言えず
淋しさをジョークで越えている涙
さりげないジョークにほっと息をつく
三分粥やつとジョークが出るベッド
とつときのジョークを持つて行く見舞
ひと言のジョークに棘も秘めてある
冗談じゃない年金は減り税上がる
言い過ぎたジョーク火消しに大童
冗談が過ぎて信頼せぬ言葉
ジョークかなむっとしつつも顔を見る

大阪府	加東市	竹原市	枚方市	奈良市	堺市	吹田市	奈良市	出雲市	堺市	唐津市	神戸市	貝塚市	橿原市	松江市	米子市	堺市	姫路市	嶋本	喬
初山	黒崎美紗子	六田	二宮	宇賀	矢倉	須磨	岩本	竹治	岩本	坂本	山田婦美子	石田ひろ子	居谷真理子	三島	吉田	村上	古川	壺水	喬
隆盛		半徳	山久	史郎	章司	活恵	浩二	像山	蜂朗					湊丘	陽子	玄也			

あたたかいジョークが皆を引き寄せる
人権を侵すジョークは許せない
何げないジョークところに傷を生む
ジョークだよなんて逃げてても許さない
ジョークでもチクリと痛む弱い胸
冗談も時とところで肺腑つき
上品なジョークが欲しい自由律
傷ついた心は癒えぬジョークでも
場の空気読まぬジョークで座が白け
講演の目覚まし役になるジョーク
ジョークだと少し本音を混せておく
ジョークなら笑い飛ばしておしまいに

佳

品の良い軽いジョークをデザートに
丸呑みにできぬジョークが喉越さぬ
ジョークでも時と場合で許せない
あのジョーク考えながら帰る道
気になるがジョークだからと許してる

人

控え目の軽いジョークに気が晴れる

地

ジョークだと軽く笑えるうちはいい

天

タイムングうまいジョークに座が和み

軸

ジョーク聞く笑う心に泣くところ

八尾市	村上ミツ子	八尾市	鈴木いさお	相見	柳歩	山岡富美子	深澤千恵子	小沢	山口	光久	永原	昌鼓	福田	好文	小谷	小雪	山野	寿之	春木圭一郎	米澤	俣子	石谷美恵子	雑賀	一泉	横山	捷也	石原	歳子	井上	森生	木見谷孝代	関本かつ子
-----	-------	-----	-------	----	----	-------	-------	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-------	----	----	-------	----	----	----	----	----	----	----	----	-------	-------

初より教室

題一 明るい

太田 昭

【下の字余り】

近頃、下六や下七等、いわゆる下の字余りの句が増えてきています。皆さん方の投句から気がついたことは、下の字余りにも色々あって、これを簡単に分類しますと

- (1) 作者が字余りと思っていない句
 - (2) 作者が字余りを気にしていない句
 - (3) 作者が意識的に字余りにした句
- の三種類になりそうです。

同じ作者が二句も三句も下六の句を作っておられるのを見ると、やはり書かれる前に指を折って数えていただき、そうして下六と気付かれたら推敲して定型にする努力をしていただきたい。その上でどうしても字余りになる固有名詞等は、上に持ってゆくなどの工夫をして頂きたいと思うのです。

下の字余りと言ってもいろいろですが、初心の頃は、ひたすら定型をお奨めしたい。

【少しの修正で良くなる句】

原 手を振って一歩踏み出す更年期	晶 子
添 大手を振って一歩踏み出す更年期	
原 病む友は明るい話待っている	美知江
添 病む友は明るい話待ちわびる	
原 明るさを感じる力皆違う	弥 生
添 明るさを感じる力確かめる	
原 ヒメボタル川面に映る発光器	(燭) 節 子
添 ヒメボタル川面に映る熱帯夜	
原 夜明け待ちすずめと蟬の競い鳴き	明 美
添 朝はらけすずめと蟬の競い鳴き	
原 アベノミクス少し明るさ見えてきた	凱 柳
添 アベノミクス少し明るさ見え始め	
原 給料日妻の笑顔がお出迎え	武 人
添 給料日妻の笑顔に迎えられ	
原 おはようの一言聞いて出る元氣	モ モ
添 おはようの一言聞いて出る元氣	
原 明るさが見えたと政府言っただけ	洋 一
添 明るさが見えたと政府言っただけ	
原 貧しくも裕福そうに明るいの	つ な 子
添 貧しくも裕福そうに明るいの	
原 家計簿はしっかり妻が握さえてる	き つ こ
添 家計簿はしっかり妻が握さえてる	
原 人生を明るく妻が握つて	ミヨノ
添 人生を明るく妻が握つて	
原 人生を明るく生きてくじけない	
添 人生を明るく生きてくじけない	

原 風鈴を明るく捉えて青田風

道 子

添 風鈴を明るく捉え青田風

喬

原 底抜けの孫の明るさ D N A

喬

添 底抜けの明るさ孫の D N A

ひろ子

原 反抗期抜けて明るい塾範

ひろ子

折角の句も誤字で台なしになります。

添 反抗期抜けて明るい塾範

原 このポケ明るいジョーク入れてある

添 ポケットに明るいジョーク入れておき

原 よい天気小川小魚氣持よく

添 小魚の元氣にはなるよい天気

原 明るくて可愛い妻と共白髪

添 明るくて可愛い妻と老いてゆく

原 雨の日は赤い傘さし買物に

添 雨の日も赤い傘さし闊歩する

原 ただいまと明るい声にはととする

添 ただいまの明るい声に癒やされる

原 ボランティア明るい声で話しかけ

添 明るい声で話しかけるボランティア

原 つらい時明るく笑う強い母

添 つらくとも明るく笑う母のしわ

原 深夜勤昇る朝日にリキ入れる

添 深夜勤昇る朝日に迎えられ

原 二人して明るい家庭作るうよ

秋 星

添老い二人明るい家庭作り上げ
 原待ちわびた明るいニュース影ひそめ 絹 枝
 添明るいニュース影をひそめて待ちわびる
 原かあちゃんがいつも明るさ放つ家 (寅) 修
 添かあちゃんの明るい顔に癒される
 原明るさと暗さが混じり悩み抜く 史 郎
 添明るさと暗さの中にある悩み
 原花一輪明るくなくも老いの部屋 正 二
 添老いの部屋花一輪が和ませる
 原ネオン街昼と間違ひハシゴする (中) 修
 添昼と間違ひ梯子酒するネオン街
 原新聞に明るいニュース面欲しい 憲
 添明るいニュースの新聞だけを買って来る
 原写真撮る皆明るいVサイン 紀 雄
 添Vサインの顔が並んで写真撮り
 原見舞い客明るく空気とませる 義 雄
 添明るくく空気とませる見舞客
 原新夫婦若い笑顔がはじけてる (村) 恵 子
 添若夫婦弾ける笑顔ツーショット
 原遺言は明るく生きたただひとつ 利 子
 添明るく生きたただこれだけの遺言書
 原はじまりはママの明るいおはようで 満知子
 添おはようとママの明るい声がする
 原通夜の席明るい笑みはそぐわない 恵
 添明るい笑みはそぐわないよと通夜の席

原見えるかな希望の明日が君達に 友 子
 添希望の明日若い君らに見えるかな
 原ちどり足星空今日も照らしてる
 添星空の照らす巷のちどり足
 原我家庭いつも明朗暮してる 久 子
 添家族そろいいつても明るく暮らしてる
 原暗い過去明るい声で吹き飛ばし
 添明るさで吹き飛ばして暗い過去 回春子
 原営業マンその明るさは本物か 一 泉
 添営業マンのその明るさにある期待
 原明るさを取り柄で生きて七十年 一 文
 添七十年生きて明るさ失わず
 原朝が好き明るい朝を待つて寝る 眞砂子
 添寝て起きて明るい朝が好きになり
 原生きたなら明るい未来築こうよ 孔 一
 添明るい未来築く気力で生きてゆく
 【入選句】
 満月の明かりを浴びて水を撒く
 稀に見る明るい話富士の山
 逆境でも妻の笑顔に救われる
 信号がやけに明るい早い朝
 アベノミクス明るい未来予感する
 満面の笑みが旅立つハネムーン
 かつこうの声響きあう草むしり
 家族揃ひ明るさ滲む老夫婦
 妙 子
 勝 治
 富 子
 元 三
 英 男
 狸 月
 南 宏 子
 克 三

凹む事知らない友の笑い皺
 梅雨晴れて早い夜明けに起こされる 登美子
 離間は朝になったら考える 冷 子
 ご近所と揉めず明るいお付き合い
 木の幹をつかむ空蟬にも朝日 (前) 洋 子
 アベノミクス明るい明日頼みます 昭 枝
 志津子
 心 咲
 志津子
 亜希子
 文 香
 洋 志
 のり子
 こずえ
 紀美恵
 律 子
 井上忠貞
 藤原大子
 子供は元
 【選を終えて】
 全体を通じ、誤字脱字のほか、送りがない
 間違えが散見されました。辞書を引き何回も
 推敲されます事をお奨めします。

川柳塔鑑賞

同人吟 川 本 晔

— 8月号から

八月の雲もラジオも疵を抱く

山 岡 富美子

この一句、私の胸の触れられない襷の奥深く針金でも刺されたような痛みを覚えるのだ。昭和の幼い夏の日の傷跡だ。

絶頂を過ぎて味方は妻ひとり

柿 花 和 夫

振り返ってみれば永く華やかな生き様であつたことよ。最愛であるべき妻を当然の事として自由を振舞つてきた。妻をいたわる事もあまり無かつた様な気がする。齢を重ね老いを感じる昨今、ふと妻の存在が掛け替えないことに気付く。

血圧は低めで義理堅い男

腹を立てたら蹴蹴いたりもする

谷 口 義

平素は何事も冷静沈着、それ故失敗は比較の少ない。芯のある男と評判もよい。でも一旦腹をたてれば何も見えなくなる。純粋過ぎるのだ。でも私は大好きだ。

鬼になつていないか鏡じつと見る

榎 本 日の出

冷静沈着を心掛けている私が、ついかつてなつてしまひ我が身を嘆く。鬼になつてゐるかもと鏡の中の自分をみつめる。昨日まで「やさしさ」を座右の銘にしてきたのに「ごめんね」と鏡の中の私に。

叱らずに父の大きな咳払い

防風林父の腕ふところよ

宮 崎 シマ子

正に父への限りなき讃歌である。穏やかで凛々しい父親像を彷彿とさせる。きつと教育方針を心得た人なのだ。褒めて育てる。現代の教育方針は今ここに辿りついてゐるようだ。

種を蒔くことを忘れていませんか

夏 目 一 粋

種を蒔かなければ何も生まれてこない。人間の欲はただ期待に明けくれている。汗を流した者のみか手にする喜びであつて欲しい。

挫折した夢のはしっこ挿木する

西 谷 悦 子

挫折した夢はいとおしい。夢が皆叶うことの少ない人生だ。それでも私は諦めない。挿木をした後どのような芽が伸びるのだろうか。望みを明日にかける。

八十で山に行く人寝てる人

板 山 まみ子

寝てる人とは、山に行きたくても自由が効かなくなつて寝ている人と想像する。人生それぞれ違うから生かされる。明日の事がわからないから希望が持てる。

耕せば答えてくれる春の土

早 川 遼 行

美しい広がりを持つ句である。努力せず何もしなかつたら答えてくれるものは無い。汗した者にこそ手にすることが出来るのだ。半分は自信ないまま吠える僕

岩 崎 公 誠

私自身思い当たるものがあつて納得、自信がない部分を吠えるのですから。このような演出も面白いではないか。大声豪語しているうち、素晴らしい雰囲気が出て皆を巻き込んでいく。

お話も少しひかえた味がよい

川 端 一 歩

さすがベテランの句、ひかえめの味、こ

れはどのようにすれば出るのだろうか。そう
うだ「もう少しその先が聞きたい」と身を
乗り出す心持、何とも言えぬ余韻。

輪の中でひとり光っている孤独

小 谷 集 一

光るものは……そう少ないから光るのだ。
孤独だと思うのは自身、輪の中に心から入
り切れずにいる自分、何となく輪が別のも
のであるような淋しき、よく解る。

二人居る弱い私と強い僕

大 隅 克 博

私もその通り、弱い私を強い私が励まし
乍ら生きている。男と女が心に居住。

アベノミクス地震予報に似ておぼろ

森 本 弘 風

面白い句になった。笑ってしまったが待
てよと思ひ直して読む。「おぼろ」だから手
の打ちようが無い。寝て待とう。

長生きをしようね友の目に涙

瀬 戸 まさよ

この句は前段があるに違いない。きつと
友達の死に触れたに違いない。涙は哀しみ
の涙と励ましの涙、よい友達だ。

熱いものまだ生きる生きている

好奇心いるんなドアをノックする

須 磨 活 恵

私も時々生きる熱いものを実感する。これ

は生きている証だとしみじみ思う。そして
好奇心もまた旺盛だ。羽搏くことを知らぬ
女のドア、異性に不愛想な男のドアと好奇
心まる出しに。

余生とは軽い会釈でこと足りる

富 田 美 義

この句、なかなか心憎い句である。出来
得れば私もそうありたい。ところが、軽い
会釈で通り過ぎようとしてもニコッと笑っ
て寄ってくる。ケースバイケースで生きる
しかない。巧妙で心惹かれる句。

貧乏性が出すぎて困るバイキング

足 立 茂

ついこの間、実感した句である。その日
は腹が減っていた。多い多いと思ひ乍ら沢
山盛ってしまった。腹は一杯になり「しまっ
た」と思ったが後の祭り。

もつと生きてもつと飲んでと妻の嘘

七 反 田 順 子

もつと生きて欲しいと言ふ妻の願いが強
く感じられてならない。少しでも食欲旺盛
になって欲しい……妻の願いである。

さり気なく売られた喧嘩ポケットに

武 本 碧

他人はいっ喧嘩を売ってくるかわからな
い。その時々売ってくる者、前から僻み
を持った者、でも作者はさり気なくポケッ

トへ処理をした。素晴らしい。

タンボボの綿毛乗る風乗れぬ風

土 屋 起世子

人生の運、不運を感じてしまう。巧く風
に乗れる人、努力をしても乗り損なう人と
様々だ。運とは神業か、はたまた鬼業か。

今晚のレシビ困ったカレーにしよう

福 本 英 子

夫に言われた言葉の思い出。 「カレーは
昼のものだ」と。私はそうは思わぬ。カレー
が欲しい夜もある。コン畜生……

むつかしい人には呆けを演じとく

堀 富 美 子

私も年齢のせいとか、たまに面倒な事には
立ち入らないようにすることがある。呆け
を演じることも生きる術だ。

介護との戦が続く上り坂

松 原 寿 子

介護は病気との戦だ。未だ始まったばかり
の上り坂、作者は覚悟の手綱を固く握り
しめている。頑張っほしい。

爪噛みの癖も直せばいい

小 谷 小 雪

親は子に、いや孫に思いを寄せる。ふと
思う。心のどこかに引っかかっている思い、
遠く離れているからこそ思うのだ。早く治っ
て欲しいと祈る愛がある。

水煙抄鑑賞

— 8月号から

坂上淳司

賢沢と言われてしまつ子沢山

佐藤 登美子

上の子二人を学校へ送り出した後、未っ子を背に、ママチャリの前後に二男二女を乗せ一円でも安いスーパーを目指し奮闘していた頃の登美子さんを、周りの一人っ子が精々長男長女で打ち止めの優雅な連中は「ワ―大変、ようやりはるねー」と、冷やかな目を送っていたはず。でも、一人っ子も独立し遠方勤務となり主人と二人だけの老後を思うと、登美子さんちの賑やかな団欒が、何とも賢沢に思えるのでしよう。まるで蟻とキリギリスの寓話の世界を見るようです。

手鏡の魔女と作戦会議中

栃尾 奏子

奏子さん、魔女の作戦会議って、どんなことを話題にするの？一度こっそり教

えてくれませんか？

その傘について行きたい雨宿り

上田 ひとみ

私なら、ひとみさんに「御一緒しませんか？」と傘をさしかけていたと思います。でも黙って行き過ぎた傘の主は、きつと恥ずかしがりの好青年だったのではありません。

右手首折れもどかしい思いする

黒崎 美紗子

転んだ時身を守る受身は利き手の役目。だから骨折するのは大事な利き手に多いそうです。美紗子さんも、家事や身のこなしの不便さに、つい「左手やつたら良かったのに」と歯がゆいのでしよう。でもねえ美紗子さん、骨折が癒えたら、試しに一日、左手を腰に結わえて家事や身のこなしをしてみてください。「右も左も大事にせな！」と納得されますよ。

助手席を娘と妻が取り合った

藤田 武人

武人さん、一体何が言いたいのか？こんな脂下がつた句に出会えると、愛に飢えてる私なら一発の下に没句にしてやりたくあります。

体重に比べてなんと軽い口

羽田野 洋介

「あははははは！」体重と口を同じ秤に掛けた比喩が愉快。軽い口は災いの元。洋介さん共々、心したいと思います。

つまずいた小さな段差まあいいや

村中 悦男

悦男さん、その通り、その通り。

誤解して別れた友が胸に住む

藤本 直

直さんのような立派な方にも、そんな忸怩たる思いに胸を痛められることがあるんですね。もう他界した友人に同じような悔いを未だに抱いている私奴も、ちよつと気がかるくなりました。

切符握り締めた幼い一人旅

大島 友子

「可愛い子には旅をさせ」。幼稚園か小学校低学年の友子さんのお孫さんの初一人旅でしょうか。「握りしめた切符」にお孫さんの並み並みならない緊張感が伝わってきます。友子さんもきつと、約束場所を一步も二歩も踏み込んだところで姿を見られないように、後を付けておられたことでしょう。



観察と考察 (4)

前回は、自分や他人、そして、仕事や宇宙や自然など、この世に具体的に存在するものを対象に「考察」を巡らした作品を紹介しました。今回は、神仏や生命、そして死など、姿形のないものの「概念」としてしか捉えられないものに対して、それぞれ考えを進めて行きます。

神仏を考察する

神さまに見込まれ試練ばかり来る
根性を貧乏神に磨かれる
神さまがわたしの寿命決めるのか
神仏に頼ると金をせびられる
実力に合わない願いは聞けぬ神
月参り石切さんも待つてはる
掛け違い鉦笑わぬ佛さま

出口セツ子
大内 朝子
黒田 能子
石橋 芳山
針生 和代
笠嶋 恵美
土橋はるお

どれほど科学技術が発達しても神仏の存在あるいは不在を証明することはできません。人智では及ばぬ世界であり、実態を知ることが出来ないが故に、より一層興味が有り、誰もが様々に考えを巡らしています。しかし、今まで見たことがあるような、ありふれた考察では独自性のある作品にはなりません。また、神仏を讃えるだけのものは格言くさくなっています。右のように、神仏に対して皮肉を言ったり、友人や知人のように取り扱いますと、ユーモアのある作品になります。いずれも、神罰や仏罰などというものを意に介せず、遠慮なく思ったことを述べていて痛快です。

生命を考察する

百歳を越えぬと自慢できぬ歳
紙オムツしても百まで生きてやる
死ぬ順番ないから強く生きられる
生き抜いてみるか楽しみある限り
ハムレットそりゃあやっぱり生きるべき
長電話している間に何歳はとる
人工授精エロスの神に叱られる
私たちの「身体」は目に見えるので観察できます。しかし、「いのち」は見ることができませんから考察しなければなりません。また、その生命が失ってしまった「死体」は見ることができませんが、「死」という概念は見る事ができませんので、これも考察しなければなりません。

このような「いのち」も「死」も、無視できないことです。が、深遠で哲学的な命題ですので取り組みにくいものです。しかし、「詠う材料がない」というときには絶好の素材です。掲出した作品のように、自由に独自の考えを述べればいいのですから、チャレンジし甲斐のある対象になるでしょう。

死を考察する

胸に薔薇付けた順序に行くあの世
天国はいつも春やと聞いている
ひたすらにポックリという狭き門
散り際は見事でなくていいんです
私自身の一部が欠けるあなたの死
惜しまれて死んでも棺桶はひとつ
もう心配しなくてもいい死んだひと

片山 忠
三島 崑丘
吉田 弘子
春木圭一郎
居谷真理子
村田 絹子
松山 芳生
田沢 恒坊
太田としお
村上 直樹
上田ひとみ
藤井 則彦
神野きつこ
森下よりこ



色景色に推す津軽の石霜瀬高

奇数月の連載になります。

なんてったって蝦夷^{エミシ}

⑪

「第37回全日本川柳2013年青森大会」は、皆様の御協力の元、大成功。参加者658人。事務局長としては、感無量、ホッと胸をなでおろしております。

新葉館の某女史に、「川柳マガジン」のどこかの隅に、どんなに小さくてもいいから、とにかく毎号、全国大会の記事を載せてよと頼んだら、こっちも句を頼まれた。

去年の7月号に、大会予告と歓迎の意をこめて書いた句。

蝦夷^{エミシ}の血 2013

① 阿弓流^{アキナガ}為の子孫でござる太き眉

② 2013・6月9日・大花火

③ エーゴよりちと難しい津軽弁

④ まつろわぬ民の眉根と蒙古斑

⑤ 咲き誇る志功の桜太宰の桜

⑥ 鈍行もいいが新幹線もいい

⑦ 「はやぶさ」も「はやて」も速すぎる(寅)

⑧ 富士山が薔薇なら百合は岩木山

⑨ 七子八珍あなたをお待ち申します

⑩ ねぶた・ねぶたお見せしましょう血の滾り

注① 阿弓流^{アキナガ}為——平安初期、蝦夷の族長。789年、大

和朝廷軍を破る。802年、征夷大將軍・坂上田村麻呂

に降り、河内国杜山で斬殺された北の英雄でござる。

注③ 大会に参加された方は、津軽弁の講演を聞いて、少し分かった——かもしれないなあ。

注⑨ 七子八珍——青森県の珍味の総称。スジコ、タラコ、ホヤ、ホタテとか。四子五珍くらいは食べたかな。

注⑩ 以前、この欄の④「ぶとぶの巻」で触れたことがあるから省略。バック・ナンバー見てくれれば嬉しい。

奈良、平安の昔から、東北地方は「東国」と呼ばれ、「日本(今の西日本)」の外にあるものとされてきた。

農耕を営み「日本」と同じような暮らしをしていたにもかかわらず、差別の意味を込めて「エミシ」と呼ばれ、長い間、中央から虐げられてきたのだった。

その憤りを込めて、小泉今日子の昔のヒット曲「なんてったってアイドル」の替え歌で、北の応援歌を作ってみた。

知っている人は、歌ってみて下さいな。

♪ なんてったって蝦夷

なんてったって蝦夷 なんてったって蝦夷

平城京の昔から 平成の今日まで

ずーっと 虐げられてきたけれど

ぼくらは けっして負けはしない

蒙古斑くつきり りりしい濃い眉

縄文の 熱い血がたぎる

もとをたたせば 日本原住民

反骨精神なくしちゃったら

イヤ イヤ

小泉今日子——1980年代にアイドル歌手としてデビューし、結婚、離婚を経て、今は女優として活躍するキョ

ンキョ。NHK朝ドラ「あまちゃん」に出演中。



追悼

志田千代さんを偲ぶ

黒田 能子 鴨谷瑠美子 久保田千代

七月二日の夜にお亡くなりされましたとの電話に驚き、信じられませんでした。六月の本社句会では何時ものように元気に、呼名されておられましたのに。まさかこの様なことがあるなんて。

千代さんとはNHK大阪川柳教室で十一年、机を並べたお仲間でした。私の方は退室しましたが、千代さんは今も続けておられました。

教室の終了後のランチ、コーヒータイトと何時もご一緒し、春と秋の吟行会も、今は楽しく懐かしい思い出です。

素敵な佳い句ばかり作られ、楽しく活躍されていました。もともと川柳を続けるつもりだったのでと思います。こんなに急に逝かれるなんて、淋しくて残念でありません。

彼岸では橋高薫風先生とお会いになり川柳をお楽しみください。

お喋りな風鈴部屋に吊るされる 千代
きつとあなたの部屋で涼しげに揺れていることでしょう。聞こえているでしょうか。

祭壇の笑顔へ話しかけて 能子

鴨谷 瑠美子

平成二十五年七月二日、志田千代さんは永眠されました。

一ヶ月前には本社句会に出席されお隣りに座っておられたのに、訃報を聞いたとき余りの突然の事で呆然としてしまいました。

十八年程前にNHKの川柳文化教室で知り合い薫風先生に学び、お互いの句を鑑賞したり励まし合い楽しい時でした。講師が天笑先生に代わってから、お昼もお茶も皆さんと一緒に話が好きで千代さんでした。

お通夜に参列したとき、ご主人様に鴨谷ですと申しましたところ、「鴨谷さん、名前はよく聞いておりました」と言われ、涙が溢れお悔みの挨拶も出来ませんでした。

優しかった千代さん、友情をありがとう。

まだお話がしたかったのに残念です。花野でも吟行の時のように、辞書や資料を並べて熱心に作句されて、佳句が生れる事でしょう。ご冥福をお祈り致します。

合 掌
久保田 千代

とにかく吃驚しました。あまりにも突然のことでしたので。

秋のNHK川柳教室の閉講につき、お別れ会を開くべく千代さんが、色々尽力してくださっており、六月の本社句会で、「出席してくれるよね」と懐かしい話やらを喋ったりして、続きは来月の本社でね……といったものようにさよならをした切りでした。

私は、千代さんには特別な思いがありました。初対面の時、いきなり「あなたも千代なの、可哀相な人」と言われたものだから、怪訝に感じ、窺うと、なんでも「千代」と名の付く女性には余り幸せな人はない、と。強烈な印象でした。

後にNHKの教室で再会することになったのですが、川柳に真正面から真面目に向い合っておられた千代さんを知り、ずっと真近かで気になる存在の先輩でした。

本社でも良く呼名され今も「シダ チヨ」と透き通った千代さんのお声が残っています。

どうぞ安らかに眠りください。合 掌

本社八月旬会

八月五日(月) 午後一時
アウイーナ大 阪

焼け付くような猛暑の中、八月旬会は
一〇名(投句六名)の参加で開催された。
初参加は、新海信二氏(八尾市)多田雅尚氏(三
田市)のお二人。

旬会に先立ち、七月一六日に急逝された同
人の吉村一風氏に黙祷を捧げた。

今月のお話は、木本朱夏編集長の「食いし
ん坊バンザイ」。江戸時代の旦那衆の三大珍味
から文人達の食への拘りなど、ユーモアも交
えて話された。中でも森鷗外の好物が、まん
じゅう茶漬には会場に驚きと笑いの声が上が
った。また鷗外は何でも火を通さなければ
食べなかつたので、「造り」は食べたことがな
いかも知れないと笑わせる。最後に佐藤春夫
の「秋刀魚の歌」を朗読して締め括られた。

(まつお記)

月間賞は、川端六次さん(藤井寺市)

(司会)蕉子・善純(協取)真理子・まつお

(受付)武彦・舞夢(清記)勝弘

席題「税」 山口 光久選

税金が大変ですのおほほほは
年金暮し骨身に沁みる消費税
申告は終わつたカラオケでも行くか
納税をしたがティッシュもくれません
百均であらためて知る百五円
ちよびりの年金からも払う税
後期高齢税金たと払うてます
酒煙草止めれず多額納税者
億ほども納めてみたい所得税
増税の分に年金追いつかず
使い途折り込み済みの消費税
税務署の知人を当てにした不覚
ふるさと税払うりんごの花のころ
相続税払うと遺産ゼロになる
議員数減らしてから消費税
水割りに税の字浮かべ飲み干した
税務署に節税下手を褒められる
タバコ税酒税お国のためならば
孫子の負担減らす税なら払います
税金と影は黙ってついてくる
次の世は税払うより取る立場
申告を済ませて妻とお茶にする
税務署で味方に見える定年後
税務署で給与の低さはやいてる

楓 桑 敏 治 蘭 幸 まつお 耕 治 朋 月 朋 月 一 歩 朋 月 見 清 弘 光 則 彦 朱 夏 ふみか すみ子 篤 子 好 朱 夏 たもつ 富美子 直 樹 武 彦 誠 一 隆 彦

煙草税永年多額納税者
張り切つた分だけ課税追ってくる
税金を払える内が華である
税金を怖がる位儲けたい
軽い程いい体重と税金
産まれても死んでも税金いりますぞ
税務署に罪は無いけど避けてます
何もかも税に委ねる永田町
税関抜けやつと素顔の出る帰国
渡り鳥関税だけは免除され
税すてきつちり納め火の車
消費税大金持ちにまかせましょ
真つ当に税を納める玉の汗
佳 血の絆相続税にゆさぶられ
増税で買うという字が消えてゆく
所得税納めるほどの幸福度
元氣なら許して欲しい介護税
税金はちゃんと納めて小市民
人 注ぎこぼす酒にも払う消費税
地 還付金入った日には上にぎり
天 税に鈴つけて調べてみたい使途
軸 無い強み相続税でもめません

六 点 弥 生 武 彦 由 一 蕉 子 ばっは 五 月 善 純 宏 造 哲 夫 美 智 代 日 出 克 己 ふりこ 千恵子 かずお キヨミ ひとみ 好 公 誠 セツ子

兼題「紙」

岩佐タン吉選

赤紙を配る準備が始められ
立ったまま車内広告読み尽す
万札もトイレの紙も必需品
いい人と好きな人とは紙一重
目も指も喜んでいる紙の本
人間の喜怒哀楽に添う紙幣
僕包む包装紙は無地でない
再生紙むかしのことはみな時効
赤紙一枚父はどうして喜んだ
人生を余儀なく変えた赤い紙
父も兄も夫も奪った赤い紙
赤紙に言いたい事がたとある
赤紙がまた来るような世の流れ
赤紙の恐怖九条守り抜く
いじめなどなかった頃の紙芝居
手紙ならすぐにごめんと言えるのに
幸せな紙だ巨匠の本になり
印刷で紙がお札に化けてゆく
ペラペラの紙が重たくなる辞令
万札は紙ですティッシュだって紙
紙一枚身の上ばなし書いてある
忘れないよう書いたメモまで出て来ない
女性など眼中にない夕刊紙
鶴ならば十本の指覚えてる

幸泉 和夫 黒兎 美智代 真理子 五月 公誠 千代子 ばっは 奮水 いさお 朝子 淳司 セツ子 千代 一步 五月 朝子 光久 真理子 瑠美子 葉子 堅坊 章子

ポリグラフで検査するべし新聞紙
紙とペンただそれだけの反戦歌
巻紙でのお願ひお返事はメール
判捺すと首絞めにくる恐い紙
気にすまいボツと天とは紙一重
白紙委任の力を借りた多数決
不都合は白紙委任で逃げている
コピー機よ紙を粗末にしないで
用意した紙を読み上げ陳謝する
レッドカードを懲りず集める副総理
再生紙卑下することはないんだよ
自分史を消してはくれぬシュレッダー
自分史は未完で表紙決めただけ
佳
来し方を白紙にしたいときがある
脱原発明日を托して配るピラ
オスブレイをいつかは墜す紙礫
ありがとうただ一行の遺言書
川柳は紙と鉛筆プラス酒
人
紙のない時に限って句が浮かぶ
地
九条を写せば余白まで熱い
天
紙オムツのときにくじけないように
軸
九条を紙一枚と言いますか

完司 いさお 見清 克己 楓楽 保州 忠昭 耕治 篤 淳司 完次 和夫 扶美代 則彦 敏治 朱夏 光久 善純 美智代 あきこ 完司

物が溢れやがてはゴミになる末路
溢れても底が見えても困るダム
叔父戦死溢れる無念終戦日
溢れる湯今日一日に句読点
溢れる言葉綴るのはハート
真心が溢れています手話と手話
豪雨禍の溢れる川を見るテレビ
不確かが溢れる地球病むヒト科
言の葉がスマホの海で溢れ出す
キッチンに溢れる愛を盛りつける
溢れる愛が地球を丸くする
米櫃の底見て溢れ出る關志
球児らの溢れる關志甲子園
喫水線のあたりを溢れそうな愚痴
再会のジョッキに溢れ出す昭和
情報の洩から誤解溢れ出す
青木の元氣溢れる無農薬
胸の谷汗滝となるギャル神興
人間が溢れ喘いでいる地球
よく笑うまわりに愛を溢れさす
やる気なら溢れるほどにあるポツケ
理不尽が溢れ地球は眠れない
横文字が溢れ日本が病んでいる
アルバムを繰れば思い出溢れます
好きだよと言えずラムネの栓を押す

房子 萌子 紀子 寿之 修 保州 ルイ子 誠一 富子 篤子 ふりこ 弥生 キヨミ 森子 ふみか 希久子 哲夫 由一 富子 篤子 かずお 和夫 千代子 美智代 よしみ

兼題「溢れる」

出口セツ子選

鏡台にあきれる程の試供品

潮の香で溢れる子等の日記帳

詰め放題主婦の手腕の見せどころ

どん底に生き人情も溢れ出る

溢れ出る過去に掃除が終らない

田植え済み溢れる汗を吸う野良着

人間味溢れる友とだけ本音

大勢の論吉がドッと来る財布

満天に星があふれていた昭和

ケアハウスに笑い溢れていた昭和

貧しくも知恵が溢れていた昭和

上澄みが溢れ残ったのが本音

佳

溢れ出る才智に賭けている五輪

年ごとに命溢れてくる長寿

今もまだ漏れて溢れる汚染水

原爆忌同じ想いの溢れる日

少年のポケット虹があふれている

人

八十路なお胸に溢れるものを抱く

地

ロボットが溢れ人間退化する

天

富士登山人が溢れている平和

軸

神様も親も溢れる愛である

兼題「ガラス」

久保田千代選

ガラス戸の向こうよきこい夏祭り

窓ガラスばかり拭いてる暇な店

結論が出るまで拭いた窓ガラス

強化ガラスあなたの胸に体当たり

びくともしない強化ガラスの妻である

ガラス拭き夫がしてる何かある

ガラス窓ひとつひとつにあるドラマ

ガラス張りじゃない人生浮き沈み

約束はガラスそれでも手を握る

月二万僕の小さなガラス張り

クリスタルガラスに埋めてある余白

夏の天窓いい時ばかりじゃありません

拭いても拭いても心明かさぬ磨りガラス

涼しげな夏を演出するガラス

淡い恋ガラスの中のさくらんぼ

鮮やかなシャンパンガラスドラマ生む

箸置きもガラスに替えて胡瓜もみ

生ビール飲むならどんと大ジョッキ

ラムネ瓶ボン・シユ・カラコロ涼を呼ぶ

ガラス器の値打ちを上げた饅おとし

隠す事なくて心はガラス張り

妻はもうガラスの靴に無関心

磨りガラス向こうに幸せが見える

煩惱を捨ててしまったガラス玉

間仕切りの曇り硝子が聞く内緒

磨かれたガラスに写る今日の罪

ガラス一枚隔て昭和のラブシーン

曇ってるガラス探らぬ思いやり

祭りの夜二人で揺らすラムネ玉

試験管明日へ希望のiPS

ガラスのジョニー歌えばあの日の仕事草

ガラス瓶バラ一輪を輝かす

くもりガラス思いの丈が届かない

繊細なガラスに似たり少年期

ときめきをワイングラスに見抜かれる

ガラス越しきびしい風も他人ごと

愛された記憶の中のベアグラス

ワイングラス揺らして今日を振り返る

佳

愚痴みんな詰めて流したガラス瓶

ステンドグラス神の光が舞い降りる

事の結末知っているガラス片

曇りガラス愛一片が透き通る

カットガラスの中で本音が踊ってる

人

残照の射す絵ガラスに母おわす

ビー玉ころころあわてることはない

地

宇宙に浮かぶ青い地球というガラス

軸

六点

美智代

ふりこ

信二

たもつ

直樹

美智代

保州

ばつは

一步

能子

柳弘

玄也

寿之

寿之

俣子

柳弘

森子

哲子

義

あきこ

兼題「終電」

鶴田

遠野選

終電とこ縁を切つてから老後
あの人に今日は会えない終電車
終電に乗り終点で目を覚ます
終電車無駄に元氣な酔っぱらい
定年だら花束抱え終電車
疲れ切った顔顔の終電車
終電は出た仕切り直してさあ飲むぞ
それぞれの言い分けが乗る終電車
終電を見送りふたり闇に消え
終電車今日と明日が入り混じる
一日の疲れが揺れる終電車
終電は今日締めくくる四コマ目
終電ない子等の楽しい縄電車
気づかつて終電時刻貼る呑み屋
終電も気にせずキミと飲むワイン
終電車スマホいじるか寝ているか
言い訳をいっぱい乗せて終電車
新地発店ぐるみいる終電車
終電の常連さんと目で語り
逢うてきた余韻にひたる終電車
終電車鬼も爆睡しています
終電のベルにホームが長すぎる
終電で寝過ごし焦る空財布
シナリオに無い終電にけつまずく
終電車九時四十分と言う故郷

房 子 幸 泉 雅 明 恵 宏 子
ルイ子 賢 子 武 彦 富 子
すみ子 唯 教 黒 兎 美 籠
勝 弘 まつお 弘 光 好 修 篤 子
朝 子 富 美 子 正 雄 善 純 柳 弘 哲 男

顔馴染乗って終電発車する
終電の吊革眠そうに揺れる
残業に追われた頃の終電車
終電に乗り損なつてからの罪
乗りおくれホテルタクシー天祥に
終電が無理に引き裂く初デート
終電の若い二人に毒される
迎え傘終電までの根くらべ
今日の悔い終電へ捨て明日へとぶ
赤鬼も青鬼もいる終電車
終電の顔は疲れた雑魚の顔
終電を逃がさぬように起こされる
佳
ほろ酔いを全部拾った終電車
終電に置き去りにする今日の鬱
お目当てがあつて終電乗りおくれ
くたくたとべろんべろんの終電車
今日の顔使い果たして終電車
人
終電に遅れてからの或るドラマ
地
火が付いたように走った終電へ
天
終電で蝶から母の顔になる
軸
終電を待たすホームの千鳥足

たもつ 能 子 扶 美 代 葉 子 美 智 代 茂 恭 昌
柳 伸 セツ子 敏 治 克 己 柳 伸
なぎさ ア キ 求 芽 朝 子 好 好
みつ子 ばっは 楓 楽

兼題「ゆづゆづ」 小島 蘭幸選
ゆうゆうと遊び竜頭蛇尾となる
妻の留守今日はゆうゆう部屋で吸う
ゆうゆうと私の海で泳がれる
ゆうゆうと親と過せる日は来ない
心配をさせようゆうと母独り
雨の午後羽根をたたんで毛繕い
晴耕雨読稼ぐ話に耳かかぬ
ありがとう大往生を遂げたいなあ
四海波静か微笑む笠智衆
ゆうゆうと飛ぶ米軍機見てた夏
ゆうゆうと自分勝手な国がある
借金ゼロただそれだけで青い空
悠悠の果てが寂しいキリギリス
余裕あり胸に沈めておくコトバ
夫に添い風と遊んでいる旅路
マンボウをただだんやりと見ています
生きざまを知られぬままの深海魚
大の字で眺める雲の絵画展
悠々自適妻の昼寝には負ける
何人も拒まぬ富士の勇姿あり
ゆうゆうよりテープに倒れ込む美学
ゆうゆうとロビーを去った赤い靴
泰然自若とはパンダのことですか
針のない時計と雲に乗っている

房 子 好 奏 子 唯 教 耕 治 寿 之 ばっは 淳 司 由 一 見 清
善 純 完 司 美 智 代 あきこ 千代子 能 子 葉 子 奏 子 求 芽 焦 子 弘 光 森 子 保 州 朱 夏

圏外で天然色になりました

ひや汗が背中つたっている自若

ゆうゆうたる空間十坪の菜園

ゆうゆうと紅葉マークの列にいる

あくせくと生きてゆうゆうできぬ蟻

ふところに三万ゆうゆうたるもんだ

ゆうゆうじゃないのサツサツとできないの

過去はゆつたり残り時間は早送り

Tシャツでゆうゆう夏のおばあさん

コーヒで三紙を読んてから始動

百万本バラ貰っても慌てない

ステテコでゆうゆうと飲むまむし酒

墜落も操縦ミスもなくトンビ

佳

悠悠と半分の胃で飲んでる

卒寿白寿ゆうゆう越えて以下余白

別荘も墓も建てたし陽は高い

かるい別れが暫らくゆうゆうの時間

ゆうゆうと坂を登っている龍馬

人

みんな留守バジャマに着替えひとり酒

地

どなたさんですかと先に猫が出る

天

ゆうゆうと出来る書斎に鍵はない

富美子

真理子

弘光

富美子

美智代

真理子

かずお

希久子

哲子

克己

敏治

朋月

六点

敏治

隆彦

ふみか

あきこ

黒兎

完司

耕治

川端 六点

句会 燦 燦

7月句会を読む

あお 青 と 砥 たかこ

引力に背いて天へ豆の蔓

黒兎

確かに、豆に限らず植物の蔓は何か巻きついて必死に天に向かつて伸びる。引力に背いている気はサラサラ無いのだと思うが、改めて気付かされた一句。

生前の供養毎晩飲んでます

完司

わたくしを絞るとボトリボトリ酒

完司

どんな題が出て「酒」に繋がる作者。酒が先か川柳が先か。答は言わずもがなである。

言うように登った八十歳の意地

わこ

エベレスト登頂をテレビで観たが、正に言うようだった。「八十歳の意地」でうまく時事を詠まれた。

四つ這いになれる気がする森の中

保州

現代社会を抜け出して森の中。肩書きも柵も脱ぎ捨てたら、大地に四つん這いになれそうだが、本当の自分に戻れそうだとはいたげである。

ピンセットで抓む程度の恋でした

万紗子

軽い恋だったのよと、さも言いたげで、何かしら未練が見える。わざわざピンセットなる小物を出してきているからか？

女心とは複雑なものですからね。

見清

人はそれぞれの物差しで人を測る。褒めすぎたと叱る心の狭い人とはかなりのずれがあるようだ。

例会でも軽く百名を越す大物ぞろいの会。身震いする思いで臨みます。鈴鹿サーキットのお膝元で、毎月「川柳すずか」を発行しています。お手やわらかにお願いします。

おどろけ増し

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願い
いたします。

編集部

米子住吉川柳会(鳥取)(前月分)渡辺多美子報

描いてと庭の花達競い合う
今の俺川柳こそがサブリです
蚊らより頭使うも重労働
大山も衣替えして植樹祭
これからは楽をさせると言ったのに
晴天をにがさないよう布団干す
田植時今年のかかしおたのしみ
弔辞終わる思わず拍手したくなる
机は一応村上春樹置く
未延子

川柳塔すみよし(大阪)森松まつお報

人情に触れてまあるくなつた鬼
鬼さんと友達になり期日延び
真面目だが仕事の鬼になれなんだ
諍えば嫁も姑も鬼の顔
総理に黒田鬼に金棒だったけど
付き合えば鬼も心は持っている
朝子
公平
勝弘
一歩
昌紀
奥五月

川柳の鬼が眼鏡を拭いている
定年の鬼にエプロンよく似合う
鬼さんに忘れられてた隠れんぼ
リハビリへ鬼の心も持ち合わせ
きつと無理今さら売れと言われても
考えておくの返事はまだ来ない
もつれた糸なかなか解けぬまで暮れ
わかりつつ無理がたたつた玉の汗
ぼつくり寺みんなぼつくり近けますか
ダイエツト今日は食べるよ明日から
青空の雲よふたりを乗せてくれ
まごころのノックに揺れる花の芯
後期高齢ノックされてもまだ死なん
病む母へノックはひとつ笑顔です
うれしい日ノック半音上がってる
オシャレして貴方の心ノックする
入ってます鬱のわたしは箱の中
ノックする父子の汗に風光る
頑なな心に響くセレナーデ
子がノックするのをいつも待っている
戦争を語れば今も六年生
逢うごとに言葉の数があえてくる
めきめきとアベノミクスの勇み足
目を見張る子の打つ駒の動き方
糠床でめきめき育つ微生物
お隣のピアノこの頃聴き易く
油断しためきめき脂肪肥満です
ふられたらめきめき折れた両の腕

克己
桃花
半銭
かりん
安昭
由一
篤子
りつえ
和代
順子
公誠
賢子
日の出
温子
志津子
靖子
妙子
裕之
芳香
のん子
定子
柳弘
昭
典子
直子
美世子
シマ子

庭の草三日休むと攻めてくる
竹原川柳会(広島) 古田 太虚報
ちぐはぐに思い出だけが交差する
ちぐはぐな和洋折衷腹いっぱい
虐待も不妊治療もする人科
ちぐはぐに気づきうれしい仲なおり
ちぐはぐになった面白くなった
賑やかに餌を待ってるツバメの子
賑やかな花束にするカスミ草
縄のれんカーブ評論賑やかに
賑やかに七福神が舟で来た
風は賑やかきつと親父の千の風
詳しくは書かぬ手紙に父の愛
紙ひこうき飛ばしてみたいスカイツリー
一枚の紙を麒麟にする魔法
母の頃思えば楽な紙おむつ
合掌の文字ポツと浮く再生紙
私の再出発へ紙ふぶき
折紙が芸術になる薔薇が咲く
かあさんの小言右脳で聞いている
道のりは長い手料理五ツ星
齢かかなくてわたし只今熟成中
体調も日記の隅へ書いて置く
すれ違い他人の顔をしてる夫
大好きなコロケ母の味がする
女には見えないトゲがあるのです
空気のまま教えてくれる風みどり

ゆみ子
現代
規子
年子
輝恵
寛
蘭幸
房子
静風
幸子
半徳
敬子
千代美
淑子
慶子
栄恵
比呂子
汎美
あゆみ
歩美
厚子
栄香
笑子
史子
千枝
一路

川柳塔打吹(鳥取)

野口 節子報

言ったこと真似するベツト飼つてます 貴恵
ワン公もるす番しててほえもせず 久芽代
かわいいね我が家のベツトメタボです 清
餌代の要らぬ金魚の絵を飾る 紀の治
豊かさは人間よりもベツトだけ 滋
ベツトにも不足はあろう顔を見る 恭子
惜しまれて惜しまれて散る花の首 節子
首席だと知らずんちく並べてた 道子
首飾り孫と作った蓮華畑 勝憲
水呉れと首をもたげて頼む花 龍枝
憎らしい徳利の首の色つばさ 美佐枝
落しどころ魚の首を探してる みち子
雨上り首に三つもぶとの跡 善江
ほいほいと諭吉の首はよく動く 紀美恵
仏像の首まで落ちている戦禍 芳光
酋長の首かと思う飾り物 美知江
シースルー歩いてみよう新宿で 義人
十万年地球は核のゴミを抱く くにこ
一本の棒になりきる夜の道 美ツ千
もうすでにあそのボタン押しました 三津子
遊ぶのは楽しめることだけに 玲坊
年老いて孫との遊びテンポあう 悦子
野に遊び可愛いレンゲの首飾り 和子
羽のばし遊んで帰れば座を取られ 美子
横道にそれた遊びの内緒ごと 美山
遊びならやめると言われ更に燃え

老い二人犬に遊んでもらう日々 遊んでいように苦言を呈したい
野いちこを摘んで遊んだのは昔 好きなだけ遊んで来いと五百円
ままごと遊びしているような独り膳 老人はタンス預金を見て遊ぶ
労働か遊びか僕の畑仕事 一ヶ月三万円で遊んどる
名画展ゆつくり命遊ばせる
和歌山三幸川柳会 武本
連休という風船の飛ばし方 連休の残りはラップして保存
連休にとことん母の介護する 連休が終わる時計の針合わせ
連休が済んでお狼の毛繕い 連休は親孝行の日と決める
連休の予定表欄空き家です 連休に命を洗う花巡り
空っぽになる連休の両隣 昭和の日から海外に雄飛する
内気でも戦に子ども征かせない 頂点に立つて内気な亀でいる
内気だと言うがしつかり風を読む こ一番内気のボール脱ぎ捨てて
傍目には内気に見えるらしい妻 内気でも金の話しになれば別
告白が出来ぬ男の影法師

公恵 陽之助 美代子 野蒜 玲子 重利 照彦 石花菜 重忠 碧報 智三 八重子 昇 次根 ひろ子 智子 きく 幸子 美枝子 義泰 起世子 純子 ダン吉 菜摘 富子

富士慕情選

折鶴も辛い折りはもう止そう 断捨離をします遺影を裏向けて シンプルな癒しの庭に椅子ふたつ 句読点打って昨日を切り捨てて 鮮やかな紅に差し替え風を待つ 飾らない台詞が花を華にする 髭の無いチャップリンなど想定外 順調に老いたカルテに歩を合わす 淋しい咳嗽を案する人もない 新緑の間に五感を遊ばせる
(福) 則彦 森子 純子 希久子 圭一郎 千ヨミ

佳句地十選

(8月号から)

黒田能子選

反省する度にブライド欠けていく 生きていく空がこんなにきれいだす ぼつかりと背中が割れて脱皮する 殻脱げばととてもやさしい風に会う 決断は玉虫色の処世術 順調に老いたカルテに歩を合わす ああ言えばこう言うややこしい器 程ほどの幸せでよい冷奴 思いきり缶を蹴つて内気者 散骨希望大海原を墓地とする
(満) 洋 捷也 扶美代

内気な妻ビールの泡が喋りだす
立て板に水を内気と言えますか
内気だと言えば笑いの渦になる
しとやかな内気に心惑わされ
内気らしい顔でトッパの席狙う
ロボットの手足が冷える町工場
ロボットの心臓ネジで出来ている
その内にロボットになる甲虫
ロボットに欠けているのは血の温み
糖衣錠握りロボット生きている
ロボットもいつか団結労働歌
ロボットも美人の方が持っている
ロボットもアベノミクスで活気付く
ロボットだあの日の孫の初歩き
老いたつて角の尖った石である
実力は△印と言う予想
被災者をひととき癒すテント風呂
老老介護傘のしずくが止まらない

富柳会(大阪)

古田 千華報

イセ 町子 美羽 昭枝 孝子 和子 保州 章子 高夫 当代 義雄 絹子 元三 みね 准一 宏夫 幹子 彦次 アキ 登子 千恵 和子 常男 高鷺 壽峰

損得を言わない友の温い背
ソプラノの話し声する花の径
気合い入れながら八十路の羽づくろい
金融倍増グラスの底へ届かない
もう一つ笑顔足を足して花の芯
散り際は納得すくのだまだ蕾
わたしならそんな噂に揺れはせぬ
少年の腕を鍛えている手斧
ときめいたワイングラスと共に揺れ
信念が揺れて人間臭くなる
値上げするところあるらしお給料
木漏れ日の中で夢見るハンモック
羽化すればウンと値上がりする私
どん底で心揺さぶる波の音
箱書きで値上げを謀る古道具
一言に揺らぐ心を繋ぎ止め
馴らされた財布値上げに驚かず
納得の一句が没になる不思議
取られても取つてもまずい既得権
わたくしの視野で生れた曲り角

高知川柳社

小川てるみ報

ケタイで結ぶ絆が温かい
蔓草の生きる姿へ吐息つく
ネクタイを結び新たな顔になる
コンビニのまぶしい程の店明かり
バーゲンと言えば不要の物も買い
あの店を何度素通りした事か

寿之 千華 晴美 佳子 未知 慶子 伸雄 欣之 信子 澄子 柳子 武人 奏子 恵子 華 紅紫朗 清 七朗 森子 哲史 典雄 多加至 みどり 進

川柳クラブわたの花(大阪)寺川はじむ報

歳のせい汚れを知らぬ白が好き
愛情の引き算終えて老い二人
一蹴りでマジック見せた猛者いる
白い花貴方を思い植えた花
七難をかくす色白うらやまし
紫陽花が真珠のなみだこぼす朝
純白の私を染めた憎い人
真白い心で生まれ今ブルー
年金の支え合う木が弱りだし
白黒と決めずにそっと日び過ごす
腰痛は連れてゆけよと喜寿が言う
白旗を時どき使う定年後
ゆで卵つるりと剥けた今日の吉
支え合う近くの他人みな笑顔
後戻りするなど気持あたためる
主役だつて脇役あつて輝ける
五年も経てば時代遅れのニューモデル
三面記事に命が軽い法の声
お互いが言わぬが花の嫁姑

松露川柳会(鳥取)

山本 正光報

地図通り旅のプランをたてている
日本地図四季折々に包まれる
好きな地図見ながら各地旅気分
境界線なごやかにする部落地図
地図よりもナビがたよりの出あい旅

節子 妙子 明美 栄美子 かなえ 孝子 耀一 和子 博子 愛子 浩三 晴美 美代子 知佐子 俊子 はじむ 宏 義明 ますみ 弘子 久子 豊枝 公美枝 智恵子

地図で見る尖閣諸島揺れている
梅雨時の天気図氣にし旅支度
世界地図ひろげ大きな夢を持つ
共和国増えて変った世界地図
旅に出る観光地図をまた広げ

川柳塔唐津(佐賀)

仁部

四郎報

鈴枝 和代 静江 正光 雄々

頭数頭で数えるバスガイド
苦勞した父の足跡鏡にし
うろろうとしてるばかりの蟻もいる
スーパールのレジで主役の一円貨
九条をいじると税は上ります
親驚忌他力本願生かされる

ほたる川柳同好会(大阪)水野

黒兎報

松風 節子 蜂朗 高明 四郎 實

定年後料理に腕を見つけ出す
料理本広げて食べるカップ麺
お手軽な料理が並ぶ暑い夏
煮返しておでん三日目妻の留守
熱燗にブリの照り焼きたまらんね
照り焼きの匂いで知らす土用丑
照り渡る月の光が恋の邪魔
世界遺産富士の雄姿が朝日に映える
老いふたりはつれがひどくなってきた
かわいい子ひどく叱って涙ぐむ
こっぴどく叱られたあのいい先生
老夫も熱中症かひどく痩せ
ひどく降る恵の雨が牙を剥く

信男 正子 桂子 黒兎 幹治 正代 美智代 柳童 春代 長一 勝 郁子 順子

ひどくなる異国のデモの遠花火
脳みそに汗が溜まっている猛暑
庖丁はしっかり研いであるつもり

南大阪川柳会

津守

柳伸報

久仁子 純子 輝

奥さんとはじめて呼ばれ照れる妻
まだ恋はしますと百歳照れている
孫にハグしてもされても照れている
軽く見た女らしい男意地を見せ
娘はVサイン父はめそめそ嫁く朝
好きな娘のメール朝晩何度見る
殺し文句にすぐひっかかる夫です
大差でも次点だったとまた出馬
花野行く愛に女らしい花の精
女らしいな部下に責任おしつけて
何時までも破れた恋に添寝する
女らしいと言わせぬ亡母恋うころ
負け試合いまだ根にもつ併殺打
忘却の彼方に戻りたい未練
間食を食べぬ習慣ノーマタボ
腹芸に喝采あびるメタボ腹
飽食が罨を仕掛けているメタボ
しがらきの狸も負けるメタボ腹
貫禄があるよと自慢するメタボ
飢餓耐えたオレの胃袋ダンブ並み
金持ちだけアベノミクスで肥え太る
定年後まったくしないする休み
ずる休みしてもお腹がすいてくる

なぎさ 克己 あや子 庸佑 恭昌 郁夫 ばっは 和雄 柳弘 直子 清 楓 栄子 集一 タカ子 更紗 昌紀 あさ子 ルイ子 忠昭 一歩 勝弘 たもつ

三保の松原目をはりつけにするニュース
針の穴見えない姑で仲が良い
口答えすると出てくる父の釘
アキレス腱八針縫うてギブス付け
点滴の針は命に立ち向う
糸通すなめてひねって腹立てて

川柳塔きやらぼく(鳥取)大塚

恵子報

弘子 柳伸 典子 正春 志華子 修

恩を知る犬反骨の眼は持たぬ
今日の続きで目覚し時計セットする
背を丸めスマホ相手にならめつこ
お地蔵の青い帽子は二〇年
晴れた日はお供の帽子忘れずに
よう伸びた水栽培のネギですが
何処の木が居心地いいかホーホケキョ
犬の目が散歩はまーだまだですか
私を狙っているな認知症
花がらつみ花の一生しみじみと
ささゆりの香りをのせてくる便り
あやとりで凌ぐ不順な空模様

川柳塔おっぱい吟社(香川)川崎ひかり報

実が熟す人とカラスのせめぎ合い
今年も来たツバメに聞きたい本籍地
おしゃべりな鳥に毎朝急かされる
焼鳥の煙が誘う縄のれん
止まり木探し求めて飛ぶ小鳥
水遊びやめよ鳥肌怒ってる

ひかり 弘 かつ恵 よしみ いさむ 放任

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目 一粹報

値引せぬ種も仕掛けもない愛だ
 五体満足ハンデないが凡人だ
 暇という字が母さんの辞書にない
 古道具ばかりくべたいものばかり
 ハンデなど有つても無いにして生きる
 値引した日からの花が散り始め
 認知症だれもが遠くない未来
 値引き分はなから載せる小商い
 疲れを癒す特効薬は孫の笑み
 雨の日も値引きをしないバスツアー
 ハンデがあるから見えないものがある
 百歳の笑顔ハンデなどいらぬ
 値引品ばかりが並ぶ夜の膳
 値引きした位で損はしていない
 全盲ハンデ母の努力でピアニスト
 もめ事をくべてしまつて仲直り
 過去のこと残らずくべてしまいたい
 値引きだと聞けばどこまでだつて行く
 値引きしても消費税分トントンだ
 夕方の値引きの時は品切れだ
 半値だよ乗せられいらぬ物を買う
 連れ添つて愛が舵取る年輪だ
 良く笑う我が家の妻は太陽だ
 原発のハンデ背負う福島よ
 ハンデもつだからこまで頑張れた
 指一本使えは出来る辞典あり
 七人の敵とハンデを競い合う

洋々 金祥 無限 美恵子 清信 地佳平 とも湖 昌鼓 回春子 振作 善夫 一瑤 みゆき 妻子 由美子 和子 圭一郎 美佐枝 蟹郎 節子 凱柳 かつよ 弘康 美智代 房江 茂登子 穀

もう少しと待っていた服売れちゃった
 ざまあ見る無免がやつと捕まつた
 ざまあ見る人の話しも聞くものだ
 お茶お花魅力の業だざまあ見る
 値切るより誉めたら値引きしてくれた
 値引きさせ帰つてみたら傷ものだ
 ざまあ見る思い上がりと言つてやる 一粹

川柳ささやま(兵庫) 北澤 稠民報

駐車場に作るトマトはミニアイコ
 足バックいっぱい貰いタクシー券
 近道を惑うことなくつき進む
 年ごとに夏を乗りきる策を練る
 仏壇の父が鏡の中に居る
 毒だみが夏を忘れず咲いている
 採れたてのトマト夕餉の灯が照らす
 気遣いが和む家族の羅針盤
 浄土へのみやげが日々に増えて夏
 空梅雨に紫陽花水かけ愛の花
 宿題は母ちゃん頼む夏休み
 初なりのトマトお皿で色かざり
 相談の様に聞こえる一人言
 次々と季節の花咲くありがたさ
 雨上り万緑が冴え目に褒美
 愛犬の思い出偲ぶ散歩道

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西 茶子報

昭和一桁戦争の負け残り
 開くまで楽しみ童心にかえる

文香 秋月 菖子 悦子 重忠 雅女 久子 美緒子 美紗子 純子 哲男 稠民 真由 多美子 開子 可住 かはる 幸子 ちかゑ 照代 美智子 弘子 螢

胸襟を開いて無二の友となる
 まず蚊遣りそれから芋の皮を剥く
 川面から浮き沈みする母の顔
 両脇に子供抱えて寝た昭和
 広辞苑開いて落とす脳の錆
 婚活にわたし売り出す旅に出る
 蚊遣り焚き一杯飲んで木遣り節
 脇の下あたり秘密が洩れている
 目が覚めて何からしようスケジュール
 蚊遣りから遠くはなれているトンボ
 追憶はあの日と同じ川流れ
 川上に愚痴を放出して戻る
 夕涼み蚊遣りを焚いて母を呼ぶ
 入院したら看護師さんはいい検温
 燃え尽きて尚もうず巻く蚊遣りあと
 好奇心流した川が見つからぬ
 伸び切った玄関脇の松バサリ
 窓開ける隣の日曜日が見える
 谷川にいいこい求める夏休み
 パソコンを開く世界がつながった
 逢いたいのが渡りたくない川もある
 土の香を残す野菜を買って来る
 国会もヤジが飛び交い進まない
 ハツケヨイ脇が甘くて負け角力

川柳茶ばしら(愛知) 関本かつ子報

ジョークだと思つて聞けば腹立たず
 人生のスパイス苦しい思い出も
 年甲斐もなくけなされて落ちこぼれ

鈴 孔美子 咲和 茶子 いさを 蟹郎 照彦 盛桜 西和子 実満 八重 富久江 かるお はるお すみれ 満 岩和子 美ツ千 美代子 小鹿 くに子 彩子 露子 惣子 瀬行 美千代 幸子

脇役の渋さ主役も手を抜かず
洒落心長寿の秘訣真似てみる
消しゴムで消したい過去が今もあり
許すのが妙薬らしい胃の痛み

川柳花の輪(大阪)

岡本 薫報

くそあつい熱気が撫でる梅雨明けの
つらいことおまへんとべそをかいて
絶世の美女に囲まれつらい事
想定外だった独りがつらいとは

可哀そうローラにつらい父の罪
ああ言えばこう言う女房と娘いて
被災のつらさ読めば乱れる心の臓
なでた手の温もり覚えてる背中

病む母に抱きつきたくて肩なでる
撫で回すあなたのその手憎らしい
髪撫でるしぐさで女売っている
つらい坂なんとかこえて共白髪

川柳塔みちのく(青森) 小寺 花峯報

花峯報

野の花をつんでは歩くけものみち
タンポポの花弁宙に四散する
次点嘆く落胆庇う友の酒

土まみれ汗まみれ母独楽鼠
日の丸に付いた染みは亡父の道
残り時間ただひたすらに道なりに
成熟の証明花粉症の癖

道の駅ベンチに風が来て休む
帰り道赤い前垂れ村地蔵

まみ子 雅美 百合 かつ子 克陽 勇太朗 みちる 昭好 薫 一幸 敬子 あや乃 楽鬼 泰子 やすの 小とみ 呑舟 つとむ きよし ひとし 美鈴 則彦 芳生 一呑

命日に昔を語る走馬灯
愛燦燦受粉のりんご良く実る
セシウムも花粉も載せて黄砂くる
くるくると政界離合集散し
人間が歩けば出来る駄道
竹とんぼくるくる父の背を越えて

川柳塔さかい(大阪) 村上 玄也報

村上 玄也報

探さんという私今からランデブー
表面の争い笑う地球の芯
中心をずらして本音さぐりだす
嫌われていないとばかり思ってた
てんでこ舞い見当はずれ来訪者
三途の川も笑いで越せる楽天家

嘘をつく時は目を見て直ぐ分る
原点は貴方の授業好きでした
絶対の機会ははずして今やもめ
原点はヘソの緒長男は桐箱に
図面など要らぬ匠の節くれ手
中庸を行く右ひだりぶれながら

浮気者とのつまりは妻のもの
愛の原点母乳の匂い
センチターの溝気にかかるDカップ
百歳へ生きたるつもり的好奇心
湯けむりで見当はずれ美女見えぬ
原点は出来ちゃった婚せわしいな

先のこと見当付かぬ悩まない
原点は母が教えたありがとう
センチターにみな自国置く世界地図

井蛙 花匠 黙人 隆樹 慕情 月雄 時雄 かりん 舞夢 清晋 朋月 八千代 冬虹 みつこ 誠一 雅明 像山 五月 健吾 日の出 ばっは 世紀子 さくら 好子 好

年金を目当てに孫がやってくる
モニターの波形が消えて人の逝く
センチターで筋トレ老いに立ち向かう
原点に解決策があるはずだ
恥ずかしながら頭の芯は色と欲
食べ頃を指で弾いて西瓜売り
暑いとは分かっていても暑い夏
中央に座ると偉い人に見え
文脈で見当つけて読む漢字
耳遠く見当をつけ笑顔見せ
ささくれた私を癒すラブソング
原点はお祭り好きの出会いから
女神より優しい姉に育てられ

長柳会(大阪) 坂上 淳司報

坂上 淳司報

鉛筆書きの亡父のハガキがセピア色
何時誰がけじめ決断今あなた
鉛筆は心の傷も消してくれ
肉入りのカレーを食えた誕生日
激辛のカレーライスで暑氣払い
白無垢が染まりにくくて十年間
妻の色に染まり楽しい余生です
クラス会舟木一夫で締めくくる
足腰をなだめ老後を助け合う
鉛筆に魂込めて書く一票
鉛筆の出番なくなる電子機器
下書きの鉛筆残る母の文
鉛筆に合格祈願母の愛

清 敏治 唯教 扶美代 としお 和夫 和幸 玄也 澄空 篤子 光 瑠美子 天笑 淳司 辰男 もこ 篤 弘光 マサ けい子 正博 登美子 幸代 たいし 芳野

子を抱いて乾いた心満たされる
君が代を歌うと口が渴ききる
乾いた土もたげ芽を出す名無し草
一言に乾いた心潤され
人情も地球も乾く温暖化
言い訳の嘘八百に乾く喉
脳味噌が乾かぬ前に遺書残す
干からびてもなお天を指す瘦せ蛙

八尾市民川柳会(大阪) 土田 欣之報

素晴らしい袋だ命育ててる
逆光の中で浮かんだ嘘の影
夕立に呼び止められる胸の奥
遺産分け終えて無縁となる絆
大空の雲百態にある気まま
二日酔いたどる記憶の曖昧さ
尻尾と尻尾触れ合うような恋だった
憲法解釈を曖昧にしてはならぬ
夕立の真ん中愛が立ち尽す
どの辺で浮き輪投げよか母の愛
どの人もみんな違ってみんないい
コンビニの死角で屯する金魚
曖昧な風よ私をどう捌く
古書店の棚に昭和が蹲る
人間の袋器量の桁違い

豊中もくせい川柳会(大阪) 藤井 則彦報

意味など問わぬ花はきれいに咲けばいい
(永) 玲子

孝代
隆彦
ともこ
和代
三和子
久美子
克三
直樹

節穴があるからそつと覗き込む
本閉じて小さな虫を押し殺す
唐辛子纏う女が路地を出る
寝入り端一匹の蚊に責められる
古傷は僕の大事な宝物
いつまでも攻める野心を持ちたいね
はた目には不自由のないこの不幸
遠花火還らぬ人の顔咲かす
言葉にはそれぞればニアな意味がある
意味不明若者会話短縮語

朝子
高鷲
加央里
壽峰
賢子
常男
耀一
草風
慶子
賀世子
華
寿之
森子
清
欣之
私のどこを切っても膿が出る
さあやるぞ踏ん張りがきく太い足
まっ直ぐな道に親友はいない
思い込み言葉の意味をとりがえ
深い意味無いと言いつつ褒め殺し
芯の太い素うどんに似た男です
図太さのわりには金に細かすぎ
ホテル見る旅で蜚はいなかった
攻めるなら勇み足より向こう傷
この橋を至難の業で渡ります
強気に押し優しく攻めるプロポーズ
ルビを振り悔いない今日にするつもり
誉め言葉貰うてひつかかるなにか
予報士は良いも悪いもせめられる
行間の意味が読めずにジ・エンド
さほり癖今朝の鏡に責められる
ヒマワリに出会い悩みが軽くなり
前の世もきつとおんなじような数
私のどこを切っても膿が出る
さあやるぞ踏ん張りがきく太い足
まっ直ぐな道に親友はいない

庸佑
美津子
堅坊
耕治
正彦
敷
武彦
歌留多
きらり
幹治
健二
美佐子
比ろ志
遠野
美智代
則彦
紀華
武臣
美籠
見清
満子
茂
千代
玲子
菜々子
喜八郎
葉子
求芽

川柳塔まつえ吟社(島根) 相見 柳歩報
ジャンボくじもしやもしやと夢を買う
当たり出た売り場に並び夢を買う
一度でも当たった夢が見てみたい
宝くじ買わぬ私の流す汗
宝くじ抽選までのお金持ち
買うほどに期待は大になるばかり
最高の笑顔で握る宝くじ
億単位射止めた人の幸不幸
宝くじ当たれハレム作るから
土用鰻舌も滑らか中国語
あとつぎは穴子と決めているウナギ
お大臣うなぎ昇りのツイッター
うなぎ屋のオヤジの顔が焦げている
ブルの真ん中に浮いている秘密
羊水のブルに響く母の唄
懐かしき君のブルが広いまま
かなづちはブルサイドの花になる
一二三、ワーンと泣いた初ブル
夜更かしで日中読めぬ本漁る
夜更かしでくせが無理して医者通い
花金はグラスも揺れる午前二時
夜更かしも朝の寝坊もしてひとり
テレビ見て夜更かしをする家の猫
夜更かしの螢は明日死ぬという
夜更かしのつげに心がうろたえる
夜更かしの月からもらうサスペンス
美智子

柳歩報
柳丘
注湖
叮紅
久絵
輝山
青帆
ちえこ
禮子
芳山
草庵
久枝
幸子
弘充
寿代
幸代
柳歩
知恵子
昌枝
長吉
芳恵
千里
孝亮
螢
ゆき
美智子

ちよつと声かけたが縁で深入りし張り上げた声も無視する恋女房武士である生臭い声出すものかざわざわするが私をコールしてくれぬ

城北川柳会(大阪)

近藤

正報

原発を他国に売ると言うショック

グッピーを百匹数え熱帯夜

極楽のメールアドレス聞いておく

本心は隠したままのえびす顔

七夕の笹で跳ねてるデカイ夢

隠すほどない財産を隠してる

覚悟まだ決めていないのに船が出る

平凡と書きしあわせとルビを振る

シヨックには強いおんなの宵化粧

飾らない言葉言い合う友のいる

剣客は目を閉じても隙がない

隠しごと突き刺す如し釜の月

歳言わぬうちに出了れたシニア券

津波跡見て断捨離の覚悟する

覚悟して座っています医師の前

御飯三杯食べてシヨックを遠ざける

さあ夏だ生きているから暑いんだ

待ち合いの診察待つ人皆無口

明日こそシヨックなニュースない地球

悲しみを悟られぬよう背を向ける

肝心な部分はモザイクで隠す

一束を半分ずつの茹でうどん

左余
民子
博子
文子

美智子

仁

昭

義昭

公子

実

たもつ

集一

柳弘

朝子

克己

ばっは

榮子

堅坊

あさ子

典子

勝弘

縣作

麗

賢子

いさお

千恵子

埋蔵金探す古地図集めます
生と死のはざま覚悟と臆病と
缶ビール一本だけと血糖値
あの頃が他国のデモに蘇る
妻の隙みて飲む酒の旨いこと
人を刺す言葉が宙を駆け巡る
覚悟した女は陰で泣いている
2代目へ覚悟を締める博多帯
フクシマの毒そのままに再稼働
心よりのもてなしを受け親友となる
へソクリを隠した場所が見つからん

川柳さんだ(兵庫)

堀

正和報

要らんとこまで似てる孫が来る

私の机の中が変わる留守

古典みなマンガで読んで文学部

先生に恋をしたのは幼稚園

うっかりと同情した荷が重い

二重スパイとても器用な人なんだ

うっかりが増え落着きのない暮らし

低くてもスパイを凌ぐ妻の鼻

鮎一匹酒の肴に夏便り

筒抜けのちびっ子スパイ夏休み

男前何をしたって男前

桃届くご先祖様に先ずどうぞ

年季積みうっかりミスもごまかせる

メールでも母の日祝う子に感謝

うっかりと命落とさぬようお水

修
志華子
弘風
和夫
かずお
秋香
倫子
寿子
直樹
ルイ子
正

警察大任務ですから黙秘です
富士山も世界遺産でアリの列
流行語わからぬままに孫に聞く
パートナール時と場合によりスパイ
イヤホンにスマホ見ながら前も見ず
乾杯し食前菓を飲み忘れ
フェロモンが微かに匂う好い女
コンピュータプロ棋士負けし勝ち名乗り
五臓にはお先と酒が胃に届く
脱サラで屋台ひいてる夫婦独楽
公約も選挙すざれば何のこと
詐欺師でも金のない人騙せない
友愛の鳩がフンを撒き散らす
つらいなら帰って来いと母の声
なんでもかな女スパイは皆美人

川柳同友会みらい(鳥取)吉田

陽子報

山ほどの難儀語らう友がいる

隕石も不意打ち食わずテロリスト

つい切れて後味なんと悪いこと

晩年はもう少し後と思ってる

おだやかな日々によつぷりある不安

世を渡る天狗の鼻も借りながら

親に恩返すつもりの日日介護

日々好日不満はないが満たされぬ

駐車料払わぬために母買う

新入りの庭木は値札つけている

今日出来たと明日出来たと限らない

廣子
喜久子
一泉
健二
雅尚
雅司
茂山
俊昭
哲夫
野薫
富夫
雅

久江
慶一
純宏
和之
葵
一聴
悦子
温子
みどり
美恵子
章子

大あわてお布施が空と知らされる

物置きは妻が言うにはごみばかり

恵方巻きの太さだけある願ひ事

無理をして引き受け歳を自覚する

緩んだら結び直して五十年

くり返す喜劇へ今日の陽が昇る

四月一日でもないのにだまされる

およばれにどの変身をおおうか

納得がいけば何でも許しちゃう

医者知らず勇気がなくて行かぬだけ

タコの糸切れた自由が手におえぬ

早いから良い返事とは限らない

祝いごと早い知らせにつば貯金

おまつりの音頭スローが合ってきた

道しるべの背中も褪せてくる

何であれ早い間に合う男たれ

アベノミクスこの世神楽にしてしまふ

翠洋会(大阪)

佐々木満作報

ふる里の復興を聴くこけしの目

宅急便はどけばコケシ踊り出す

こけし人形村が育てる里の顔

ひげもじゃの男育休とるといふ

なまずのひげ動かさないでいて欲しい

ひげこそが男の値打ち見せ場でしょ

立話ひげが生えてる注意され

髭髥を撫でてフンフン聞いたふり

髭剃って戦う顔へ切り換える

信子

三郎

明恵

恵美代

敦子

嘉子

みち子

安子

勢津子

操子

華蓮

一眸

和代

遊子

菜美

はるお

公弘

すっぴんのママは五時から蝶になる

ライバルはすっぴん負けたなと思う

すっぴんで乗車まつげもつけて下車

すっぴんとすっぴんコピーがうまい

すっぴんの心で写経する朝

予想越え朝ドラジェジェ面白

かたつむりたまには家出したころう

隊す母に化粧落として会いに行く

熱帯夜共寝の妻に蹴飛ばされ

缶蹴りで遊んだ友も要介護

七月の風選挙カーあおりたて

行水を楽しむ有難い要支援

値上げ続きアベノミクスを睨む雑魚

帰省して竹馬の友の老いを知る

善人をやめてストレス吐き捨てる

喝采のない人生に侘びと寂び

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

猛暑が何だ団扇一枚あればいい

朝顔に水をあげては涼貰う

風邪貰うケチなあんたのブレゼント

はしゃぐ子の水鉄砲に出来る虹

追い出し部屋まだ聞えない労働歌

おばさんになった娘に叱られる

贈られた品に見え見え下心

夕立の人情貰う駅の傘

原発があると言わせるこの猛暑

ふと気付く貰ってばかりです神に

志華子

希久子

眞澄

義

満作

公平

桃花

捷也

浩二

げんえい

弘子

千歩

富子

正雄

昭

集一

夜の底やつと真実見えてくる

付き合いが良くて風邪さえ貰ってる

勲章も貰えず父は千枚田

どちらにも流れを変える浮動票

介護してくれそうな子に愛想する

子よ覚悟せよ母は百歳目指します

ようやくと猛暑が昏れて熱帯夜

その先は聞くまい孫の涙ふく

トラ勝てばぐつすり眠る暑くても

ワルガキの良いとこ全部母親似

十六夜の月に絡んだ恋ホタル

昭和史を辿れば暑いきのこ雲

カミさんにいつももろてる小言だけ

猛暑日はガツンと辛いカレー喰う

夜の闇透かせば見えて来る明日

神様に貰ったオッパイ切れと癌

両の手を広げ貰っているころ

暑いので歓声あげて伸びる稲

灼熱の暑さ原爆忌を思う

ひたすらにももてた真夏の夜の夢

ときめきをひとつ葬る夜の淵

魂の流れる声を書く夜明け

可能性丸ごと秘めている子供

宝石は子供ですよと言った亡妻

子供には申し訳ない国のツケ

はびきの市民川柳会(大阪) 永田 章司報

笑うなら笑え愚直な生き様を

敏子

秀夫

克己

千代

見清

賀世子

紀乃

生枝

和雄

忠昭

柳弘

たもつ

勝弘

高鷺

壽峰

一志

あかり

哲男

雀舎

六点

穩夫

敏治

朝子

堅坊

祥昭

章司報

いさお

見え見えの言訳だから責められぬ
野良猫に情けをかけて居つかれる
カラカラと笑うと消えた泣き黒子
真つ先に笑い聲盛りました

私には丁度いいです二上山

わだかまり溶けて心がなごむ仲

梅雨寒に仕舞い忘れが役に立つ

どうにでも取れる笑顔で逃げておく

本当の心知りたい酒をつぐ

あなた好き明るい笑顔はもつと好き

やりすぎはダメほどほどに抑えよう

父の日や孫の音頭に乾杯す

人生のようだ紫陽花七変化

明日のため笑って過ごす被災の地

梅雨がない北海道の旅に出る

友の愚痴ほどほどに聞く春の月

余分な物愛想笑いに買わされる

ヒゲ切った猫にネズミの影が消え

笑ったが目は光ってる怖い人

川柳塔わかやま吟社

川上

大輪報

富士山へ行つた積もりでテレビ見る

情念の山をのりこえ今独り

山ほどの尽きぬ話題で時忘れ

すっぴんで表も裏もないわたし

今日からは素顔のままで暮らしたい

まだ妻の素顔見たことありません

まだ綺麗すっぴん顔をほめて去り

猿 久仁子 美代子 扶美代 みつこ 高 驚 シルク 泰 子 庸 佑 フ ジ 雄 太 美 喜 かつみ ちづる 敏 ヨシ枝 登志子 悦 子 章 司 美 子 徑 子 秀 子 和 香 保 州 幸 子

軽犯罪ですか私のすっぴんは
どきどきさせて僕を肥やしてくれた本
どきどきが瘦せた心によく響く
サスペンスドラマどきどき止まらない
一目惚れ涼しい視線にドッキドキ
結果待つ胸に不安が絡みつき
さみしくて群れを出てゆく日の動悸
招かざる客が見事な良いヒント
身構える招待状の甘い罠
招き猫釣られ財布が軽くなる
叩いてごらん招いてくれる扉
頑張るぞこの辛抱が福招く

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

しっかりと歩みを残す二人旅

過去は過去しっかりと前を見て進む

しっかりと生きてあの世へこうと近く

物忘れしっかりとせいと子に言われ

しっかりと見極めてから買いに出る

読書家をよそ読む書ばらばらと

マンボウはてらう事などないだろう

なめくじやでんでん虫がてらとらと

紫陽花がてらう三日の雨つづき

てらうことなくとも出るボランテア

見せかけの包装紙には罪はない

その揚げつそり瘦せたマニフェスト

お笑は恥もてらいも芸の糧

てらうことなく流れの水のよう

和 悠 子

大輪 泰 女 紀 子 准 一 千賀子 寿 子 あきこ 克 子 富美子 佐 一 小 雪 よしこ

幸せは空にはためく黄色旗
白旗をまだまだ出さず頑張れる
旗持ちの俺だが大志捨ててない
旗の波陛下にこやか植樹祭
大漁旗活気の声に港沸く
旗色が悪いと猫になる私
日の丸はタンスの中で黄ばんでる
祝日は天を仰いで旗を出す
植樹祭陛下迎える旗の波
瑞々しい母ちゃん野菜道の駅
信頼はせぬが新鮮研修医
もぎたてのトマトのような少女達
朝採りのいちごは白い皿に盛る
学び舎を巣立つ少女の瞳が光る
瑞々しいきゅうり頂きまるかじり
瑞々しい心がさせる肌の艶
しっかりと意意外と早い認知症

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

かくし事母はしっかりと見抜いてる

向い風明日を先取りさせる風

口下手を逆手にとつて聞き役に

いじめなどない少年の靴弾む

拉致母娘望みせめても天の川

むずかしい事後回し弾む毬

入院のベッドで聞き耳身の上話

五線譜のおたまじゃくしと恋唄う

世は泰平スマホが通る交差点

哲 文 伯 淑 キヨミ 千代 美津子 求 芽 光 子 照 彦 恭 子 けいこ 美代子 美ツ千 貞 子 茶 子 由紀子 醉美蓉 祐 子 弘 美 重 忠 日出子 英 子 盛 桜 風 露 鬼 一

疑えは秘密の影が動き出す
 気負わずにのびのび行こう終の章
 気がつけば十二時間も飲んでいた
 バカみたい勝手に思っていた秘密
 秘密だと言ってるわりに声は大
 寅さんが通ると風がよく笑う
 平凡に生きて秘密の二つ三つ
 仲間入りさせて下さい緑陰も
 一分を通し男が椅子を去る
 言わないけどオール五だった通信簿
 穏やかな寝息が告げる今日の無事
 きらきらと水子地蔵の風車
 弱い男すぐに秘密をしゃべらされ
 耳打ちでますます秘密めいてきた
 墓参りも話が弾む三姉妹
 星ひとつきらきら光る帰り道
 娘より緊張のバージンロード
 湯通しが過ぎたか骨のない男
 子供らの夢きらきらと塾カバン
 亡夫の好きなカレライスは作らない
 税関を通るとなぜかほつとする
 人はみな秘密をもつて生きている
 たましいがキラリ儂いのね虫
 きらきらとB29が飛んだ夏
 ジャイアント負けてビールがよく通り
 時にキラキラ時にキラキラする男

京都塔の会

樹本

宏子報

雑草を抜いてすっきり盆の墓
 求芽

失言を雑木林に捨てにゆく
 忘れたい心に刻む痛みです
 青春を刻んだ辞書を繰っている
 アロハシャツ事はちゃんとしています
 夏が来て雑草も声高らかに
 顔つきまで余計締まらぬクールビズ
 あてもなく雑踏に出て知る孤独
 刻印を押された腰に無理するな
 言い切つてすっきりし過ぎ空くお腹
 問題を複雑にした外野席
 早く早く言われて雑になる仕事
 いいことの一つで気分すっきりと
 Tシャツが次は俺かと出番待つ
 雑念は振り払つてもまといつく
 柱の傷跡と刻んだ背比べ
 知らぬ間に眠つた後の気持ち良さ
 耳よりな話雑談から拾う
 やる事は雑だが妙に理にかなう
 雑音はためずごくんと一気飲み
 いざという時雑兵の底力
 地味だけど役割大きい刻みネギ
 楽園を目指して夢を刻んで来たけれど
 雑駁な男の影は直ぐ消える

六甲川柳会(兵庫)

伊勢田

殺報

昭
 めぐ
 泰夫
 啓子
 紀乃
 則彦
 満子
 益子
 文代
 英旺
 かずお
 輝美
 弘之
 みどり
 宏子
 さゆり
 庸佑
 福子
 ふりこ
 欣之
 弥生
 森生
 比ろ志

世界遺産富士が自信の山開き
 若さ自慢駄目出しをする足と腰
 若さに燃え眩しく光る球児達
 若き日とまったく違う大志抱く
 温泉地シニアばかりが巾着かす
 ホタル舞う豊かな自然守り継ぐ
 継ぐザイル三浦の快挙国が湧く
 あらかじめ下見しておく形見分け
 流されずオンリーワンでいるつもり
 ゆるやかに丸く流れる家族の和
 流れ雲今日の悩みは今日捨てる
 流れに乗ると及第点をくれそうだ
 何もかも流して心軽くなる
 業績不振あらぬ噂が流れる
 過去の罪水に流して仲直り
 デマ流れ信じられない世の噂
 感懐が胸を流れる古写真
 下町はギター流しがよく似合う
 不器用が流しそうめん取りそこね
 流されて澱んで迷うイエスマン
 生きものに心が動く歳となり
 ふるさとに夕日と私落ちていく
 免許更新呆けていないかテストされ
 継ぎはぎの人生語る美味い酒
 流れにも逆らつてみる雑魚の群れ
 人生の終り近くで仲直り
 騙し合い許し合う間に五十年
 若いなあしかし目尻は正直だ
 通リゃんせ鬼も笑顔になる小径

殺
 利臣
 武香
 文子
 邦子
 寿朗
 洋一
 宏造
 ひろ
 照弘
 義博
 和郎
 浩司
 弘義
 繁義
 和宏
 千賀子
 茂
 政一
 ひとみ
 博史
 道子
 盛夫
 美恵子
 康子
 清之
 武彦
 いわゑ

仕掛けより地に足つけた道えらぶ
ふと本音洩らしてからの風の向き
楓 楽

サークル檸檬(大阪) 松尾美智代報

風向きで男心はすぐ変わる
立つ位置はここだと風の声がする
風切って歩くスーツは値札付き
欠席の理由で猛暑で事足りる
赤ちゃんにお乳飲ませている至福
出番などなくてやさしい風という
丸印何かりそなカレンダー
マンシヨンの小さな部屋も風渡る
ひと休みすればやさしい雨の音
決心もその場の風に煽られる
歳月の風が私を追い立てる
不器用やから時々ラッパ吹くのです
順風満帆ツキも後押ししてくれる
森抜ける風はホントのみどり色
保護色を着てやり過ぐす向かい風
川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

みつ子
房 子
蕉 子
昌 紀
久仁雄
光 久
たもつ
加お里
美智代
扶美代
美 龍
希久子
義 子
智恵子
みつ子
楓 楽

苦勞話きいてくれたがさよかだけ
アルバムに浴衣の似合う君を見る
美男美女お似合いなれどすぐ離婚
コマーシャルさよかと信じお人好し
また小言さよかと軽く聞き流す
京なまりよう似合てはいい女
言つたでしよあなた何時でも早合点
別人の顔と心になる化粧
美しく咲くやこの花この命
ワークシエア覚えられないゴミ出し日
パーベキューすると本音の出るお箸
厚化粧しても部品が悪すぎる
蠻重が背伸びするなと肩たたく
お化粧の指に集中力がある
へえさよか大阪弁でないさされる
夕食に瓶とコップはさげてる
化粧すると思わぬ顔に仕上った
猿山にちよつと似ている政界図
この恋のレシビ誰にも教えない
あきまへんまいどさよかで足りる街
ワインなら私の歳は超高値

幸 香
泰 子
寛十郎
雪 菜
楓 花
あかり
富 夫
和 子
純 龍
よしひさ
柳 明
野 薫
里 江
靖 鬼
五 月
比 志
健 二
ひとみ
祐 康
キヨミ

解凍に時間がかかる頑固者
人間に時計が消えて闇になる
イヤリング時計も外し深呼吸
良い物を選んで配る釣った魚
選ばれた呼名の声に納得す
カブトの緒しめて隙なき人選ぶ
まっぴいか選んだ嫁の尻の下
生きる道選んで今は米作り
ぼんやりと秀句見逃すことがある
カアチャンがぼんやり見える酔ってきた
ぼんやりと見える鏡がとてもし好き
ぼんやりがまんまと鯛を奪われる
ぼんやりが金の勘定だけは冴え
ハンドルを握ると折り深くなる
ハンドルに父母が居て無茶できぬ
ハンドルを握る横ではそつという
ぼんやりは演技だ油断召されるな
米子住吉川柳会(鳥取) 渡辺多美子報

清 帆
忠 良
一 瑤
重 忠
節 子
蟹 蟹
幸 安
菖 子
圭 一郎
蟹 郎
た ぬ
公 子
幸 子
一 粹
茶 子
和 子
美恵子

正 二
ひろし
公 一
多美子
紀の治
登美枝
宏 之

岩美川柳会(鳥取) 石谷美恵子報

医者通い止めたら元氣湧いてくる
静寂を破るサイレン夜半の火事
説法を終えた僧侶がテレカ売る
あの世には花も咲くかと聞きたいが
励ましてくれる仲間と酒を飲む
よきなかま輪投げ大会一位なり
ウソをつき少し遊んでみるとする

活きるため汚い靴もはいてきた

大山滝句座(鳥取)

新家 完司 報

未延子

八月の戦没者野に山に満つ

レプリカは多数英雄ならひとり

血栓ができたか智恵が出てこない

もうたくさんと何時までも呑んでいる

五百羅あなただのモデルどこに居る

心繋ぐ手紙を今日もしたためる

DNA繋ぎ繋いで今がある

世界中こころ繋げばないくさ

刺したかも知れんトッサに出た言葉

漁がない繋いだ船に苔が生え

断層と御用学者の智恵比べ

息切れをしない歩幅で生きてゆく

誰にでも逢え何処までも行く切手

町中が繋がっている灯がともる

昔の家上がり框に鍛えられ

酔うた振り仲間同士の和を保つ

しっかりと鎖で繋ぐ象の足

行列の先にあるのはケーキ屋だ

牛小屋は静かなものだ出荷あと

繋がる愛大自由を訴える

照彦

芳光

紀の治

大鯰

和子

幹啓

忠良

美恵子

蟹郎

石花菜

美ツ千

幸子

雄大

けいこ

松恵

重忠

鈴野

久子

恒子

すみゑ

仁美

完司

満天の星の一つに亡母がいる

流れ星望み一つも言う間なし

希望の星が工場の隅で光り出す

かの星の下に生まれて運不運

願ひ事多すぎました流れ星

呆けた母星の王子を呼んでいる

七夕でロマンとエゴが交差する

定年後希望の星と期待され

鬼ヒトデ星の形をしたギャング

決心がついたあの夜の大銀河

ブナ林元気で笑っている泉

知恵の泉だんだん枯渇する怖さ

蜃気楼だったのかあの時の泉

期待した親に逆らい親になり

生き方の答えが父の背にある

人生の答えはまだ出ていない

答えとは自分で探すものである

答えなど用意してないハブニング

誘われたら二つ返事でお供する

母さんの涙に負けた口答え

答えなどないが心は決めてある

天邪鬼解ついても手を挙げぬ

龍一

一文

雅枝

シルク

喜代子

信二

絹枝

キーキー

美代子

あかり

みつこ

ヨシ枝

扶美代

清之

いさお

アヤ子

雄太

光男

登志子

六点

フジ子

勝弘

未来をあきらめている投票率

余生とは例えば酒の搾り粕

大シヨック骨はスカスカ脳縮む

くよくよと悩めば月も傘をさす

情勢に疎くいつつも孤立する

昭和史に疎い政治家の空論

とうさんのようになるときつい母

どうしよう例えば夫逝つた後

甚に疎く悪いおんなに囲まれる

前例が無くて役人困り果て

世事に疎くいつでも空を睨んでる

大海を知らずくよくよ悩む雑魚

勝つたらハワイあたりに日本基地

例題を解いて教師のしなり顔

例えばの話が長く眠くなり

シヨックです自信くずれる記憶力

心配をしだすと天も落ちてくる

くよくよを空っぽにする本の虫

くよくよとするなら何で手を出した

どんくさい彼の一途に絆されて

公園の蟬くよくよと生きてない

護憲勝つシヨック与えよ改憲に

昭

いさお

イツ子

香代

玄也

和夫

和美

和雄

信二

幸子

ダン吉

珠子

隆昭

敏治

檜代

弘子

保州

ひろ子

洋

みつ江

三成

康信

泰

義

美

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子 報

弥生

岸和田川柳会(大阪)

佐藤

幸子 報

蛙城

隅の席淋しがりやが座つてゐる
かぶり付きで見た玉三郎の素足の美
生きている術時に八卦で道を聞く

みつ子
哲子
藍

ローズ川柳会(兵庫)

木村貴代子 報

みつ子
哲子
藍

手抜きした料理本物知らぬ子等
招待席らしく座っているトップ
未だ生きるつもりで靴も買いました
無礼講にも自然席順できまする
末席に居てもやっぱりばらはばら

岬川柳会(大阪) 八十田洞庵報

好奇心の塊り子供の光る目が
隠しても十五夜お月さんお見通し
隠れてた素直な心垣間見て
ある時は人形になり丸く生き
隠すほどないが何とか暮しとる
マイカーの旅は予定のないコース

川柳大阪 森松まつお報

晩年に良い友を得て老い楽し
明日の夢打ち出の小槌何が出る
生き急ぐ耳にナツメロ振り返る
アルバムに苦勞残さぬ父と母
知らぬ間に園で息子が虫博士
松茸や栗を拾った山恋し
梅雨明けとまがう暑さに空を見る
愛犬に話しかけるも独り言
気心を知っているから無茶も言う
花植える雨を待つ間に句をひねる
終えぬテロ平和の願い吹き消され
今日は晴梅雨の合い間に洗濯だ
愛の水もらって咲かす庭の隅
おかしことおかしと思う感受性
道草をしながら子等は知恵が付き
おらの畑今年も来ましたシシの舞
胸襟を開いてびったり酒の味

大穴でそんで競馬に僕狂う
家事分担そんで小遣貰つてる
そんでから始まる妻の愚痴
気は若いそんでも身体あきまへん
坂道を転げるような物忘れ
玉碎の南の島で泳げます
エキサイトしながら転ぶ丸い石
遮断機が激しい恋を真つ二つ
震度2で激しく揺れ動く我が家
津軽三味激しく叩くわが心
叶うなら愛の讃歌のような恋
沖繩を激しく揺らす人の波
マッチ箱の様な家だが幸せや
ゴミ箱に男の愚痴が捨ててある
リング箱勉強机知る八十路
実直な亡夫が残っている文箱
原発を箱で囲って汚染水
箱物でたっぷり吸った甘い汁
黄昏を知らぬ男の色と欲
黄昏にちよつと変身してウメダ

貴代子 年 代 義 子 いわゑ
富美子 年 子 晴 美 治 子 寛 子
洋 子 雪 子 茂 平 桜 琴 澄 恵 清 一 圭 子 貞 夫 覚 庵 洞 庵

わかあゆ川柳会(島根) 松本はるみ報
しみじみと今朝の光に生かされて
世に慣れてすらりと隠す舞台裏

英 子 はるみ

好 栄 惠 美 子 澄 子 ちよえ かつ子 昌
五月 紀 雄 柳 弘
由 一 川 風 笑 一 善 純 堅 坊 温 子 信 醉 喜 楽 鉄 心 彦 太 美 龍 美 世 子 まつお 朝 香 芳 香

事務所便り

今年も「川柳塔まつり」がやつてまい
ります。

十月十二日(土曜)会場は例年通り「ホ
テル・アウイナ大阪」です。

事前投句の締め切りが迫っております。
九月二日(月)必着、課題は「樹」です。
お急ぎ下さい。

高齢になつても「まつり」と聞くだけ
でわくわく致します。日頃お電話でしか
お話出来ない遠方の方にお目にかかつて、
一言二言お話するだけで弾むものがあり
ます。

是非皆様お誘い合せの上ご参加下さい。
お待ち申し上げております。(山岡富美子)

黄昏の恋の火消した霊柩車
わがままになつて黄昏知りました
年重ねたそれが賞がほしい頃
黄昏たボクが鏡の中にいる
周平を読む黄昏の味がする
黄昏を遅らせたいと焦る日々
国民無視党利略参院選
黄昏をつまみがわりにひとり酒
黄昏はいつもあいつとかくれんぼ
連日の節電対策ゴヤ棚
八月に値上げ待ってる電気ガス

蕉 子 美 花 公 平 いさお 勝 弘 かよこ 司 珠 生 心平太 功 隆 司

ジュニア

川柳



鳥取市立青谷小学校 川柳クラブ

課題「海」

海の砂足ぶみしたら音が鳴る
6年生 相見 秀仁

魚たち海の底からこんにちは
6年生 黄金 咲希

海の中のぞいてみると魚の町
5年生 田中 そら

海の色夕日を浴びてあかね色
5年生 長谷川 奈緒

海の中魚や貝がいっぱいだ
5年生 村上 舞

海の色たくさん色うつして
5年生 廣澤 真凛

暑い日は鳴り砂の浜音楽会
4年生 吉村 茉佑

(指導 日置和紙の里川柳会)

薫風作品の推敲の仕方

栗原道夫

湖の雨を水底から見つめ

初出は、「川柳塔」平成元年6月号で〈湖の雨を水底から見たら〉の形で発表。「川柳展望」平成2年2月号にも「見たら」の形で発表。「見たら」を「見つめ」に変えて、「古稀薫風」「薫風句集」に収録された。

湖の雨を水底から見たら

湖面に雨が降りしきる。雨粒が落ちた湖面は一瞬穴が開いたように凹んで見える。そのような状況を見ているときに、ふと、もし湖に降る雨を水底から見たらどのように見えるのだろうかと思ったのである。

湖の雨を水底から見つめ

「見たら」を「見つめ」に変えることによって、想像の世界で湖面に降る雨を見ている句になった。そのときの気分は、読者が想像するしかない。楽しい気分で見つめているのか、さびしい気分で見つめているのか。湖面から上を現実の世界、湖面から下を現実から離れた世界ととらえてみる。湖面は、ちょうどその境界に当たることになる。活動的な現実の世界に降る雨を、湖面を通して、現実から遠く離れた水底から見つめている。現実に触れることができず見つめることしかできないさびしさ、無音の世界の静謐なさびしさである。

(川柳塔わかやま501号)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
豊中 もくせい 川柳会	16日(月) 13時40分締切 創る・シルバー・ほんと 自由吟	豊中市中央公民館 4F 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	17日(火) 13時30分締切 合図・スポーツ・決める ゆったり・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳塔 みちのく	21日(土) 16時開場 鉛筆・おいしい・痒い	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
和歌山 三幸柳会	21日(土) 12時30分開場 年齢・積む・重ねる	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 和歌山市南中間町20番地 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
はびきの 市民柳会	22日(日) 14時締切 昔・弾む・エール・憎む	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
南大阪 川柳会	23日(月) 13時開場 トンボ・回る・インテリ・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	27日(金) 10時開場 伸びる・同情・祭り・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
富柳会	富柳会 第63回 川柳大会 28日(土) 13時締切 若・活・触・奥・直・実	富田林すばるホール 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
岸和田 川柳会	28日(土) 14時締切 波紋・漸く・靴・ライン	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川柳塔 すみよし	28日(土) 14時15分締切 草・残す・空気	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
川柳塔 わかやま 吟社	第21回 和歌山県川柳大会 29日(日) 12時30分締切 昭和・箱・海・チャンス・折る	和歌山商工会議所・4階 大ホール
川柳 ふうもん 吟社	29日(日) 13時30分開場 ロスタイム・羨む・良かったね	開発ビル 2Fホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
松露 川柳会	30日(月) 19時30分締切 釘・油断・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口1294-2 山本正光
京都 塔の会	30日(月) 14時締切 とろとろ・首・習う	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

9 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	5 日(木) 14時締切 稼ぐ・脚・愛想	奈良市立中部公民館 4 F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城 北 川 柳 会	7 日(土) 13時開場 暗示・磨く・スッポト・自由吟	旭区老人福祉センター 3 F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉 吉 川 柳 会	7 日(土) 14時締切 せめて・鈍る・ぞくぞく	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民 川 柳 会	8 日(日) 14時締切 見舞・巣・焼く・雑詠	八尾神社内 西郷会館 3 F 近鉄八尾駅西口・徒歩5分 〒581-0831 八尾市山本町北5-9-3 土谷耀一
西宮北口 川 柳 会	9 日(月) 14時締切 災害・作る・ほやほや・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川 柳 あまがさき	10日(火) 14時締切 悔やむ・風呂・へとへと 自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200 m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川 柳 同 好 会	10日(火) 13時30分締切 神・ほどく・未だ	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅前ビル 5 F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川 柳 塔 さ か い	13日(金) 13時開場 脅える・賭け・折り句=あなご	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
あかつき 川 柳 会	13日(金) 14時締切 来る・技・街灯・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳大阪	14日(土) 14時締切 まさか・汗・個性	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 打 吹	14日(土) 14時締切 芋・組む・とほとほ	倉吉市上瀬町9 上瀬公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川 柳 塔 ま つ え	14日(土) 13時45分締切 ライバル・整形・乱れる とことん	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
川 柳 ねやがわ	15日(日) 14時締切 利口・空想・弱音・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室 京阪寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 藤 井 寺	15日(日) 14時締切 呼ぶ・ヒント・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	15日(日) 13時開場 ムード・無情・てんこもり	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵

柳界展望

敢闘賞

自分史に亡母の童話を
眠らせる 両川 無限

★第14回生駒市民川柳大会

会は7月21日、生駒市コ
ミュニティセンターで開
催。同人の教育長賞。

★第7回松江市川柳大会

は7月21日、島根県民会
館で開催。同人の天位。

★第31回夜市川柳大会

は7月31日(水)堺市総合福祉
会館で開催。参加者91名、
同人の天位次の通り。

文芸賞

お陽さまと対話をした
い足の裏 石谷美恵子

大賞

哀しみを乗り越えられ
たのは時間 前田 楓花

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

総合成績

優勝

準優勝

鳥取県川柳文芸大賞

文芸賞

大賞

第47回 東大阪市民文化祭参加 第40回 市 民 川 柳 大 会

日 時 9月29日(日) 正午開場

会 場 東大阪市民社会教育センター 3階

TEL 06-6789-4100

近鉄布施駅下車 北口

三井住友銀行北へ5分

宿 題 (各題2句・締切13時)

「夜明け」 岩 佐 ダン吉 選

「おもう」 北 村 賢 子 選

「酒」 土 田 欣 之 選

「きず」 西 美和子 選

「楽」 西 山 春日子 選

「注意」 菱 木 誠 選

「太陽」 森 茂 俊 選

会 費 2,000円(軽食・発表誌呈)

問い合わせ 片岡 湖風 TEL 072-965-1341

主 催 わかば川柳会

第63回 岸和田市民川柳大会

日 時 10月20日(日) 12時開場

会 場 岸和田市立

「東岸和田市民センター」

事前投句「うっとり」 増田 隆昭 謝選

(締め切り 9月30日必着)

兼 題 各題2句 13時 締め切り

「駅」 大内 朝子 選

「錯覚」 河内 天笑 選

「洗う」 川端 一步 選

「続く」 竹村 穂夫 選

「コンビニ」 三宅 保州 選

会 費 1,500円(参加賞・大会誌呈)

主 催 岸和田市・岸和田市教育委員会

主 管 岸和田市文化祭実行委員会

参加団体 岸和田川柳会

川柳塔なら 創立15周年 記念川柳大会

と き 11月6日(水) 午前10時開場

ところ 春日野荘 あすかの間

奈良市法蓮町752-2

TEL 0742-22-6021

事前投句 「言葉」 大内 朝子 選

兼 題 「まもる」 齊藤 保子 選

「まもる」 岡谷 樹 選

「楽」 牧浦 完次 選

「楽」 小島 蘭幸 選

参加費 4,000円

(懇親会・発表誌・記念誌含)

(記念誌に「私の1句」掲載)

締 切 9月30日

問合せ 居谷真理子 TEL 0744-27-6405

〒634-0051 橿原市白樺町5-2-2-405

主 催 川柳塔なら

兵庫県川柳祭 in 篠山

日 時 12月1日(日) 10時30分 開場

場 所 篠山市民センター

〒669-2321 篠山市黒岡191-1

TEL 079-554-2188

JR福知山線篠山口駅よりバス「二階町」下車

事前投句 (各題1句・9月14日締切)

「黒豆」 赤井 花城・岡田 篤

上野多恵子(3名共選)

「守る」 平山 繁夫・原田 麻也

片山 忠(3名共選)

「屋敷」 前川千津子・小山 紀乃

堀 正和(3名共選)

応募料 1,000円(定額小為替)

当日投句 (各題2句・12時締切)

「踊る」 堀口 雅乃 選

宮崎たじ 選

「霧」 前川 淳 選

「城」 村上 水筆 選

「人情」 遠山 可住 選

出句料 1,000円(発表誌呈)

問い合わせ 兵庫県川柳祭篠山市実行委員会事務局

畑 鉄也 TEL 079-594-1180

遠山 可住 TEL 079-557-0111

北澤 稠民 TEL 079-552-1878

長川 哲夫 TEL 078-621-5131

編集後記

★涼しげに老樹いづれ一蟬いづれ点
したり 薫風

★先ごろ七十一歳の男性

がNHKを訴えた。「外国語の乱用により、内容を理解できず精神的苦痛を受けた」というもの。レインブーツ・アスリート・トラブル・リस्क・ハンドケア等々。男性は「日本語を大切にすると会社長という。」

★本誌にも外国語や和製英語を多用した作品が散見される。八月号を見てバラサイト・ネガティブ・メランコリー・モノトーン等々。どこまで許容できるか、表現の自由もあり大変難しい問題である。

★大阪に生まれ育ち、今も大阪に住まう作家・有栖川有栖れっきとした男性の「幻坂」(メディア

ファクトリー発行)は最も古い大阪・天王寺七坂を舞台にした怪談仕立ての短編集。大阪弁は生きて泳いで跳ねる魚、という有栖の語り口が心地よい。

★いま阿倍野界隈は大きく変貌している。天王寺駅前にアペノハルカスという三〇〇メートルを超える巨大ビルが聳えている。そこから少し行っただけが「幻坂」の舞台。本社事務所もすぐ近くである。涼しくなれば「幻坂」を手に散策したい。

★「民族の詩歌」は今号休載です。筆者の三好専平さんは菌に衣着せぬ発言で大阪から発信しつづけた故藤本義一氏の学友。次回は義一語録です。ご期待ください。

★久しぶりの特集は「続・夫婦百景」。さまざまな夫婦のありようを川柳作品から探してみたい。「オヤ、お宅ですか。うちでも

女性 は 花

7月28日、第二回卑弥呼の里女流川柳大会を、吉野ケ里公園駅隣接のホールで開催しました。

6歳から80過ぎまで総勢60名の女流が集まり会場は「女の夏」そのもの。準備段階では雑然とした会場も、一人、一人と参加者が増え、少しずつ華やかに・・・やはり女性には「花」なのだ実感。お題は「鼻」「燃える」「化粧」「南」

「涙」の五題。賞品もたくさん用意しました。差し入れののゴイヤを嬉しそうに貰ってくださる皆さんに「女流」の素晴らしさを教えられました。

女であることの意味を、川柳を通じて感じる事が出来るなんてとても幸せなことだと思います。今後とも卑弥呼の里から川柳の楽しさを発信しつづけます。

(真島久美子)

ひとこと

「なんて声が聞こえてきそうな」。

★7月某日、吉野ケ里の卑弥呼の里女流川柳大会に参加。4日間 番傘同人・真島清弘・美智子ご夫妻のお世話になった。結社の垣根を超えての交流は楽しい。卑弥呼の里川柳会代表・真島久美子さんはまだ三十九歳。若さと行動力あふれる現代の卑弥呼に期待している。(朱)

□川柳塔本社事務所には「川柳塔」の前身「川柳雑

誌」が保管されている。第一号の「編集室から」の一部を紹介する「本誌の主義とあるところは、なるべく通俗的で、世間、川柳を宣伝すること、勢い初心者の指導ということに力を注ぐことにある」と路郎師は述べられた。

□時代小説作家佐伯泰英氏は文庫本書下ろし作家として有名だが、その佐伯氏の単行本「惜標荘だより」を読む。佐伯氏が

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(11月号)」

地名

市都
道府
県
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「門」(9月15日締切)

11月号発表

大内 朝子 選 — 共選 — 竹治ちかし 選

B

A

B

A

地名

市都
府道
県
姓
雅
号

地名

市都
府道
県
姓
雅
号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌新規購読申込書

きりとりせん

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者	☐ ☐
	〒 —	 		年 年
	月 月 から から 一年 半年 9 5 8 0 0 0 0 円 0 円			

該当の方に○をつけて下さい

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
川柳塔社（電話 06-6779-3490）

振替 00980141298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

作品募集

11月号発表 (9月15日締切)

川柳塔 (8句)	小島 幸
水煙抄 (8句)	川上 大輪
愛染帖 (3句)	新家 完司
檸檬抄 (2句)	新治 ちかし
檸檬抄 (2句)	大内 朝子
一路集 (3句)	前山 共選
初歩教室	「望む」(3句) 太田 昭 担当

12月号

檸檬抄「美人」
一路集「予告」「減る」
「ほくほく」
初歩教室「ロマン」

本社9月句会

とき 9月6日金 13時開場・13時40分締切
 ー開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。
 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
 おはなし「ヨーロッパ・高野山」
 兼題「服」
 席題「くくるくくる」
 「鳴る」
 「古着」
 会費 1000円
 投句料 500円(切手可)
 (各題2句以内)
 小島 幸 選
 柿花 和 選
 米田 恭 選
 小林 恭 選
 長井 善 選
 長浜 美 選
 水野 黒 選
 野黒 兎 選

本社10月句会は第19回川柳塔まつりとして、10月12日(土)に開催します。
 (表紙を参照して下さい。)

第32年度 夜市川柳募集

第4回「ラジオ」西口いわえ 選
 ハガキに3句 9月20日締切
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い扱い)、檸檬抄は本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇一三年(平成二十五年)九月一日発行

発行人 小島 和幸

編集人 木本 朱夏

印刷所 美研アト

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一四一七

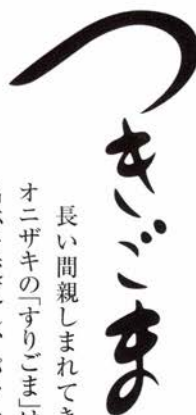
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(〇六)六七九一三四九〇番

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

杵つき製法の「すりごま」 オニザキの



長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。
オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。
今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

第37回 鳥取県川柳大会

とき 10月19日(日) 午前10時開場

ところ 県立倉吉体育会館 2階

倉吉市山根529-2

TEL 0856 (26) 4441

宿題と選者(各題2句・席題なし)

(JR倉吉駅から南へ徒歩11分)

「爽 快」	小 谷 美ツ千 選
「笑 う」	門 脇 かずお 選
「潤 す」	石 橋 芳 山 選
「洪 い」	竹 治 ちかし 選
「す っかり」	杉 山 静 選
「富 む」	古 今 堂 蕉 子 選
「要 』」	小 島 蘭 幸 選

会 費 2000円(大会誌・昼食)

欠席投句 1000円(9月30日 締切 消印有効)

※投句先 〒689-0605 鳥取県東伯郡湯梨浜町園546-16

竹信 照彦方

第37回 鳥取県川柳大会実行委員長 宛

TEL 0858 (34) 3345

主 催 鳥取県川柳作家協会